
せっちゃんにカワカミンが入ったようです。

カワカミン中毒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

せつちゃんにカワカミンが入ったようです。

【Nコード】

N0462Q

【作者名】

カワカミン中毒

【あらすじ】

幼少時、無力に嘆く刹那の前に現れたのは…。影響を受けた刹那（の周囲？）の奮闘劇（？）。ひたすら木乃香への愛情を注ぎまくる刹那に刹那を真人間に戻す為に奮闘する木乃香、周囲の人間を巻き込みながらも刹那は今日も元気に生きていきます。

序章

——これは、今に至るまでの私の物語。

＊ ＊ ＊

生まれた時から自分の居場所なんて無いなんて事はどこかわかっていたんだ。

だから両親が死んだ時、流されるままに里を追い出された。それを当たり前のように受け入れていた。だって自分は忌み子だから、と。

『ねえ、ウチの友達になってくれる？』

だから、差し伸べられた手。それを手に取ったときの感触も、その言葉を受け取った時の感動はもう言葉に言い表せない程だ。それ程までに嬉しかった。それ程までに幸せだった。ただ、ただそれだけだった。それしかない。

だから誓ったのだ。この人を護ろう、と。元よりこの身は拾われた身。彼女はその恩師の娘。ならばその義理を果たすのにも繋がる。

だから誓った。だから修行の日々も頑張った。忌み子だと蔑まれても、負けない、と。

なのに、無力だった。

いつものように遊んでいただけだった。だけど、彼女が川に落ちてしまつて、それを助けようとしたけれども、結局、自分は何も出来なくて、ただ、大人の人が来てからようやく助け出された。

——お前が付いていながらどうしてこんな事に。

その言葉が、痛い程までに重たかった。だから、苦しくて、辛くて、悲しくて。

一人になった。屋敷も抜け出して、もうどこかわからない場所まで来てしまつて。

だけどそこならようやく一人になれたんだと実感が出来て、泣いた。ただ泣いた。涙が枯れても良いと思つた程までに泣いた。悔しくて、悲しくて、辛くて、苦しくて、もう、どうしようも無い程までに痛くて。

『——ねえ、君』

そこで、私は。

『——大丈夫？』

あの人達と出会ったんだ。

＊ ＊ ＊

出会いの記憶。ここで泣いていた私の涙を拭ってくれた人。そして惑う私の道を指し示してくれた人と出会った場所。その場所で、私たちは向かい合っていた。

周囲には桜吹雪。季節は春。旅立ちの時にはお似合いの光景。その桜が舞う中、私は向かいに立っていた二人へと視線を向ける。

一人は男、白髪交じりの黒髪をオールバックにし、スーツを着込んだ男性。

一人は女、長い黒髪にゆったりとしたワンピースを纏っている女性。

「――そう。京都を出ちゃうんだ」

「はい。私の誓いを果たす為に。…お二人には色々とお世話になりました」

「ううん。こちらこそ、刹那ちゃんには助けられちゃったよ」

「そうだね。刹那君、君の協力があったからこそ私たちの調査は進んだからね」

女性は柔らかに微笑み、男性もどこか穏やかな顔をしながら声をかけてくれる。それが胸に染みいる。ああ、私は彼らの力になれていたのだと思うと、良かった、という思いが込み上げてくる。

「…本当に、貴方達にはいろいろな事を教えていただきました。この教えは絶対に忘れません」

「…うーん、僕としては少し忘れて欲しい所もあるけど、もう、染まっちゃってるからなあ…。…うん、程ほどにね？ 刹那ちゃん」
「何故そこで私を見てから言うのかね？」

二人の掛け合いに思わず、くす、と小さく笑みを浮かべてしまう。
ああ、この二人は変わらないなあ、と。

「本当に…時間って経つのが早いねえ」

「そう、ですね」

「だって刹那ちゃんがもう中学生になっちゃう位だからね」

「年を取っても魅力は衰えてないから安心したまえ」

「そうですね。まだまだ若いですよ」

「え？ そ、そうかな…。でもそれって子供っぽいとも言われてる？
？ これでも一児の母になったんだけどなあ」

むう、と少し悩ましがな表情で呟く女性に、やはりクスクス、と小さく笑みを浮かべてしまう。この人は本当に可愛らしい人だ、と心の底から思う。

それは隣に経つ男性にも同意見なのか、微笑ましい表情で女性を

見ている。良いな、と思わず思える並ぶ二人に自然を笑みが零れる。時間は経っていく。もう行かねばならない。それを思えば名残惜しさを覚える。それにそつと僅かに痛んだ胸を押さえて。

「：私がここを去ったら、しばらくは「こちらの世界」には来ない、んですよね？」

「そうだね。一通りの調査は終えた。後はじっくりと交渉までの機会を待つ事となるだろう。その時の交渉役が私になるのか、それとも私達の次の世代に引き継がれるかはわからないが。――だが、いつかその時は来るだろう」

「じゃあ…」

「暫くは会えなくなるね。もしかしたら、これが今生の別れになるかもしれない」

やはり、と思った。

彼らは私の住むこの世界とはまた理を異とする世界からやってきたという。そしてこの世界が彼らの世界と共に歩める世界なのかどうなのかを調査する為にこの世界に来訪していたのだという。

それに最初に接触したのが私というのは、何とも言えない気分になる。ただ、それがどうであれ、彼等と出会えた事は私にとって何よりの幸運だったと言える。だから、胸を張ろう。

「なら、貴方達に伝えておきたい事があります」

すう、と息を吸う。

「――佐山さん」

男性の方―佐山 御言―が一つ頷き、私と視線を合わせようと真っ直ぐに見てくる。

「――新庄さん」

一度、佐山さんから視線を外し、彼の隣に寄り添うように経つ女性の方―新庄 運切―を見る。

「貴方達に出会えて本当に良かった。あの日、私と出会ってくれてありがとうございます。貴方達に教えて貰った事を胸に、私はこれから生きていきます」

もしも、彼らと出会えなかったら私はどのように育っていたのだろうか？ そんな疑問が脳裏を掠めるが、そんなのは些細な事だ。今の私がここにいる、ならばそれで良い。だから胸を張って答えよう。

「――T e s. ここに私は誓う。お二人の教えを決して無駄にしないと、二人の教えのままにこの胸を張って生きていくと。この生涯、この身、この命をかけて、貴方達への感謝を忘れずに生きていくと」
「――T e s. その誓いを聞き届けよう。ならば刹那君、君に教え

た合言葉は何だね？」

「^{進め}Ahead、^{進め}Ahead、^{前に進め}Go Ahead！」

「よろしい。ならば、いつかの巡り合わせを願おう。そして叶うならば、その時に君の成長を喜ぼう。そして過去になるだろう今の話をしよう。それを笑って話せるように——此処に佐山の姓を以て誓いを立てよう。私たちは君との出会いを忘れず、君に誓った事を忘れずに君の期待を裏切らない事を」

「僕も。新庄の姓に誓うよ。——君を忘れない。いつか、この世界が僕らの世界と重なる時、また出会おう。そして笑ってまた話そう。ここまで築いた僕たちの思い出を」

手を伸ばす。それは誰からという訳でもなく、自然と伸びた手だった。刹那の手を佐山が握る。その二人の手にそつと重ねるように新庄が手を添えた。三人は見つめ合い、互いに微笑みを交わす。

『——いつか、また』

＊ ＊ ＊

麻帆良学園都市。それは埼玉の麻帆良市をそのまま丸ごと学園に

してしまった巨大な学園都市だ。その学校の数は計り知れず、そこに通う生徒もまた数えきれない。そんなスケールからして巨大な学園都市の通学路を疾走する二つの影があった。

「木乃香ー！ 不味いわ、このままじゃ遅刻するわよー！」

「ははは、大丈夫やってー、まだまだギリギリ間に合うわ」

「でも何かあったら遅刻しちゃうじゃないのー！」

二つの影は女生徒のものだった。一人は鈴のついた髪飾りでツインテールに結んだ少女。もう一人は黒髪を伸ばしたほわほわとした少女だ。ツインテールの女の子は全力疾走で、黒髪の少女はローラースケートで軽快に走っている。

「もう！ 中学校に上がったばかりで遅刻なんて出来ないわよー！」

「そうやねー。それは流石に不味いわー」

「もう、本当に焦ってるの！？ 木乃香ー！！」

「あはは、アスナが急かしすぎなんよー」

まるで対照的な様子で会話が進む二人。そしてもうすぐ校門、という所まで二人はかけてくる。時間にはまだ余裕がある。それを見たツインテールの少女―神楽坂 明日奈―がぐったりと体の力を抜く。そんなアスナの様子に黒髪の少女―近衛 木乃香―はクスクスと笑う。

「あー、疲れたあ」

「はは、お疲れ様、アスナ」

ぐったりとして疲労感を滲み出させるアスナに、木乃香は軽く肩を叩いてアスナの努力を労う。そのまま二人は校門へと足を進めていき。

「あれ？ あそこにいるの…誰だろ？」

「え？」

最初に気づいたのはアスナだった。アスナの視線の先には確かに一人の女生徒が見えた。自分たちと着ている制服は同じ。背には何やら長いものが入っているだろう袋を背負い、髪をサイドで一本にまとめてあげている。

彼女はまるで誰かを待つように腕を組んで壁に背を預けて待っている。そんな生徒の様子をアスナは怪訝そうに見ていたが、不意に、木乃香が呟きを零した。

「…うそ、まさか…せつちゃん…？」

「え？」

木乃香が何か、驚いたような顔をしているのにアスナは気づく。そしてアスナが呆けている間に入り口で待っていた生徒もこちらに気づき、そして木乃香の方を見て少し目を見開かせた。

その反応に、またもアスナが、え？ と首を傾げている間に門の傍にいた生徒はアスナと木乃香の傍に歩み寄ってくる。それに木乃香が信じられない、と目を見開いている。口元に両手を添えて驚いているのだから、余程の驚きなのだろう。

「――お嬢様」

そして、歩み寄ってきた生徒が満面の笑みで木乃香へと微笑みかけた。

「せ、っちゃん…？」

「…はい。そうですよ、このちゃん」

「…せっちゃん！ せっちゃんや！！ 久しぶりーっ！！」

今度は刹那が満面の笑みを浮かべていきなり駆け出し、せっちゃん、と呼んだ生徒へと抱きついた。それを生徒の方もまた満面の笑みで受け止めている。え？ 何この私邪魔な空気、とアスナは思った。

そんな置いてけぼりのアスナを無視して、木乃香はせっちゃんと呼んだ旧友らしき生徒と話し始めた。

「せっちゃん、どうしてここにおんねん？」

「どうして、と言われましても、転校してきました」

「ええーっ！ 何でもっと早く言ってくれへんのやー！ 手紙とか出せるやろー！」

「ふふふ、驚かせようと思ひましてね」
「もう、せつちゃんの意地悪ー！」

キャツキャウフアハハハ、と思わずそんな幻聴が聞こえて来そうな二人にアスナは思わず、あのー、と呟きかけた。所在無さ気にゆらゆらと手が揺れて、どうすれば良いのかなあ、と頭を悩ませる。

「じゃあ、これからせつちゃんも一緒に学校にいけるんか!？」

「ええ。そうですよ。これからずっとです」

「ホンマに!？」

「ええ。これからずっとお嬢様の傍でお嬢様をお守りいたします」

「そんなんええっていつも言ってたやんか! もう、せつちゃんはお変わらんなあ」

「いえ。変わりましたよ。お嬢様。私は悟ったのです。お嬢様こそ、私が生涯、守り抜いていくべき人なのだ」と

ほえ? と思わず木乃香が声を漏らしたのと同時に、彼女は木乃香の両手を握りしめて言った。思わず傍目のアスナが「ええーっ!？」と心の中で大絶叫する程までの衝撃映像だった。

それにやはり完全に自分が置いてけぼりにされているのを感じるアスナだったが、やはりこの二人、むしろ木乃香の手を握っている生徒が置いてけぼりにしたまま。

「これからお嬢様に悪い虫が付かないよう、私がお守りいたしますのでご安心ください。お風呂、トイレ、どこからでも覗きなどという不敬な輩を撃退出来るようにすぐ傍にお仕えいたします」

「…あの、せつちゃん？」

「もしも体調不良などでお嬢様の気分がよろしくなくなった場合でもすぐさまお嬢様の状態に合わせた薬も調合いたしますのでご安心ください。ああ、苦い薬などが駄目だとしてもご安心ください。私が各種、味を研究し、幾つかの種類を作っていますので」

「あの、だから…せつちゃん？」

「これからのお嬢様の生活に何ら不便などさせませんので、ご安心ください！ お嬢様、この刹那、常にお嬢様の傍にてお控えいただきますのでなんなりとお申し付けください！ 無論着替えなども任せてください！ お嬢様のスリーサイズは既に把握済みです！」

「いやいやいや、ちょ、待とう？ せつちゃん、待とう？ っていうそんな情報を！？」

「目測です！！ 上から…」

「目測！？ って言わんでええから！！！」

「お嬢様、暫く見ない間に大きくなりましたね…。とても美しくなれました」

「あの…せつちゃん…？」

「はい。何でしょうか？ お嬢様」

「……………なんか、怖い」

ぴし、とアスナは世界に罅が入る音がした。あ、これ、なんかやばい前触れだ、と。

「…まるで、変態さんや」

あ、終わったな、とアスナはその木乃香の一言で終焉を悟った。

「……………ぐふっ」

「って、吐血したー!? し、しっかりしてせっちゃんっていう変態さーんっ!!」

「――私は変態じゃない!! ただお嬢様を愛して止まないだけだ!!」

「いやいや、それおかしいから!？」

「何もおかしくなどない!! だいたい貴様は誰だ!？」

「気づいてよ!? 最初から居たでしょ!? もしかして天然なの!?
ねえ、天然なの!？」

何なの此奴!? とアスナは思わず思う。思わずツツコミで叫びたくなってしまいう程までに、そう、こいつは変な奴だ、と。

そう思っている、ふと、アスナは気づいた。木乃香がぷるぷると震えているのが。あ、これはなんか暴発する前触れだ、と思った瞬間。

「せ、せっちゃんの変態さんになってもうたーっ!! うわーんっ!!」

「がふっ!? お、お嬢様、ご、誤解です、私はただ…」
「せっちゃんのばかーっ!!」

ぱしーん、と小気味の良い音が空高く響いた。呆然として頬を押さえるせっちゃんと呼ばれた生徒、泣き出したまま走っていく木乃香、そして取り残されるアスナ。

どれだけ時が過ぎたろうか、遠くで予鈴の音が鳴っている、とアスナがふとぼんやり思っていると、ふふ、といきなり声を漏らし

――。

「――…死のう」

「ちょっと待てえええっ!？」

――いきなりの自殺宣言だった。今にも首を吊りに行きそうな彼女を必死に羽交い締めにながらもアスナは空を仰いで叫んだ。

「ああもうっ、なんだってのよおおおおっ!!！」

これは、とある一人の少女の奇行と、それに巻き込まれる彼女の愉快な友人達が繰り広げる物語である…。

第1章「彼女たちの学園生活」 01

「龍宮君、今日、京都から一人、魔法生徒が入学してくる。君と同室になるから良ければ面倒をみてやってくれんかのう」

今、思えば、この言葉が私の苦難の人生の幕開けだったんだ。

* * *

皆さん、初めまして。突然だが私の愚痴を聞いて欲しい。

私の名は龍宮 真名という。簡単な自己紹介をすれば麻帆良学園中等部1年生。部活はバイアスロン部。普通の中学生ではなく、これでも裏の世界ではちよつと名の知れたスナイパーだ。

ちなみに裏の世界、というのはこの世界には魔法が実在している世界で、私も魔法使いとは関わり合いとなっている身だ。まあ、そこら辺の詳しい説明は置いておいて、だ。

：まあ、そんな特殊な生い立ちの所為か、年の割には老けてみられる、というか、だから私は大学生ではないとどれだけ言えばわかる、っと、いやいや、そういう話をしたい訳ではない。確かに愚痴とは言ったが、こういった愚痴ではないのだ。

皆に聞いて欲しいのは私の同居人についてだ。私は先程も言ったとおり、中学生。今は学生寮に入って生活している。それはつまり同居人もまた必然的にいる訳なのだが…。

最近、私の頭を悩ませている張本人がこの同居人だ。この同居人、一言で言うところ…。

「ああ、お嬢様、今日の寝顔も愛くるしく、この刹那…朝から出血多量で死んでしまいそうです…!!」

……………変態だ。

改めて紹介しよう。彼女の名は桜咲 刹那。変態だ。今年度よりこの麻帆良学園へと転校してきて、自分と同室になったルームメイトだ。普段は生真面目を絵に描いたような優等生だが、ある一点においてこの女、変態化するのだ。

もう、これでもか！ いやいや、まだだ、これからだ！ と言わんばかりに完全なる変態だ。完全変態、最早人間の領域を超越している。だってそうだろう？ 彼女の起床時間は「お嬢様の起床10分前及びお嬢様に危険迫った時」というらしい。訳がわからん。

どうやってそれを察知しているのか、別に魔法的な契約だのしている筈はない。なのに距離が離れているのにも関わらずこの同居人は「お嬢様」とやらの目覚めを関知出来るのか。一度問うてみたところ「これもお嬢様への忠誠心が為せる技だ」らしい。それ忠誠心と違うだろ。どれだけ万能なんだ忠誠心。

…しかし末恐ろしいのは、常に「お嬢様」とやらをストーキング…もとい、護衛をしている彼女の式神を維持し続けている魔力だ。365日ほぼ展開しているといっても過言ではない。

これだけならばまだしも、この式神、いやに高性能なのだ。何がどう高性能なのかは正直語らないでおく。正直犯罪一歩手前だとい

うのが私の感想だと言わせて貰おう。しかしそれだけとなるとかなり燃費を喰う筈なのだが、それだけの魔力は一体どこから？

訪ねてみたところ「これもお嬢様への忠誠心が為せる技だ」だそうだ。だからどれだけ万能なんだ忠誠心。しかもその鼻から出る鼻血は何だ。それが忠誠心だとも言いたいのか。

ちなみに、毎朝こんな感じな訳だが。私の同居人は。：皆も私の言いたいことはわかってくれたと信じている。だから、敢えて言わせて貰おう。

「：誰か助けてくれ：」

このままでは私の胃痛のライフがゼロになりかねん。胃腸薬は既に常備だ。それを見た刹那が「何だ、胃腸の調子が悪いのか。なら私がお嬢様にもしもの時があつた時の為に作っていたこの漢方を特別に分けてやろう。何、本来ならばお嬢様の為に用意していたものだが、だからといって困っている人がいてお嬢様の為に、など言つてはお嬢様の責任にしてしまうため、つまり責任はこの薬をいづ如何なる状況においても切らさないように出来なかった私の不徳という事でさして気にするな、ハハハハ」と言っていたな。しかもやたらと早口で。なのに一言一句聞き取れるのが不思議だ：。

：覚えているなあ、むしろ刻みつけられたなあ、耳に。脳に。やめろ、ステレオで頭の中で笑っている声が響いている気がする。：効き目は良いから飲むか。：そして漢方の癖に甘い味がするのは何故だ。確か刹那は「なに、お嬢様の舌に不味いものなど入れられる訳がなからう。つまりならば薬にも常にお嬢様の舌を楽しませる為に各種味を用意しておくべきだと私は思うのだ。ああ、良ければ真名、この味も試してみると良い、新作なんだ」と。何だ、私は実験体か刹那。：あ、でも甘いな。癖になるぞ、これ。

＊ ＊ ＊

外に出れば、あの変態性は隠れると思ったが、実は奴の変態性は開放型だ。実に鬱陶しい。実に迷惑だ。実に胃に悪い。既に例の漢方は私の必需品となっている。己、忌々しい…。これはこれで商品として売れば儲けるんじゃないか？

…さて、そろそろ現実逃避はやめようか。通学路を歩く私の隣、その隣には頭を抱えながらうねうねとうねりながら歩く桜咲の姿が見える。まるで軟体動物かのような動きで前に進んでいる。正直に言おう。ぶっちゃけキモい。

恐らくは、「お嬢様」のストーカー：監視につけた式神からの情報を得て何かがあったのだろう、というより、もう恐らくいつも通りの事なおんで次に出る言葉が予想出来る、と溜息を零した。

「ああ、お嬢様！ そんな速度で走ったらスカートがめくれて下着が！ そうなったらこの刹那、周囲の男共の目を潰さなければなりません！」

「待て、刀を竹刀袋から出すな、それにそんな強風は吹かん」

「龍宮、そうであってもお嬢様の生足に目を引かれる輩共が現れるとも限らん。なら、お嬢様にはこのストッキングを、ああ、だがこ

のストッキングによってそういった趣向の輩共がお嬢様に邪な視線を向けるやもしれん!!」

「むしろ貴様だ。いいから落ち着け。遅刻する」

「龍宮、離せ! 私はお嬢様の純潔を守らねば!! それに比べれば遅刻など所詮些末事!!」

「ほう、それで具体的な方法は?」

「周囲の男共を滅多KILL!!」

とん、と私は刹那の首に手刀を叩き込む。遠慮無しの一撃は刹那の意識を呆気なく刈り取る。そして力の抜けた刹那の襟首を掴み、そのままずるずると引きずりながら校門を目指す。

もう日常となった風景だ。正直、日常になどなって欲しくなかったが、こうでもないとかこの同居人が本気で辻切りになりかねん。まったく、変な奴かつ厄介な奴が同居人になってしまったものだ。

「…恨むぞ、学園長」

そもそもあのぬらりひょんもどきが私に「仲良くしてやってくれ。君に期待しているぞ」だ。くそ、こうなる事をわかってたなあぬらりひょんめ…。

今度、そのぬらりひょんヘッドを撃ち抜いてやろうか、と思わずぶつぶつと悪態を吐きながら学園への道を歩いていく。そして学園の入り口付近にたどり着くと意識を失っていた刹那が意識を取り戻す。

「む…龍宮、済まない。また突然眠ってしまったのか」

「ああ。お前は常にお嬢様の為に努力しすぎた。また睡眠時間を削っていたんだろう？ 頼むからもう少し寝てくれ。じゃないとわざわざ毎日お前を学校に運ばなければならない」

「それに関しては龍宮には頭が上がらないな。今度、またあんみつでも作ろう」

「それはありがたいな」

「：しかし龍宮、首が痛いんだが、寝違えでもしたか？」

「ああ、いきなり意識が落ちるもんだからな。仕様がなさ」

「そうだな。これも私の未熟だ」

：ふっ、チョロいな。

「お嬢様」が関わらなければ桜咲は真面目が取り柄の優等生ちゃんだからな。そして桜咲の作るあんみつはそこんじよらの店で買うあんみつより上手い上に無料。ふふ、なんと経済的な：。おっと、思わずよだれが。いかなな、まったく。

* * *

刹那は普通に学生としている分には時たま奇行に走るぐらいなので比較的平穏だ。日常とは斯くも素晴らしいものだったとは、と改めて噛みしめざるを得ない。：どうしようもなく情けなくなるが。

時間は放課後。既に学校は終わり、各々の時間を過ごす時間帯だ。私は学校の鞆を揺らしながらどうしようか、と行き先も決めずにぶらり、と街中を歩いていた。

「：ふむ、どうにもあの馬鹿が傍にいないと落ち着かないのは私も病気かな」

同居人だからな。何かあったら真っ先に私にも何らかの被害を被りそうだしな。それにあまり騒がれて勘ぐられるのもごめんだ。ここは自分も刹那を見習って奴に監視でもつけた方が良いか、と割と本気で考えながら桜咲の姿を探す。

とは言っても、別に本気ではない。本気で用があるなら携帯に電話でもかける。それでも刹那を探すのは、見つけて何かしでかしそうなら止める為だ。

まあ、見つからなければ見つからないで良い。ぶっちゃけどうでも良いのだが、それでも放置しきれないのは最早仕様が無い、と苦笑を浮かべて。

「あ、真名、見つけたー」

「む、木乃香か？」

探そうか、とした所、不意に呼び止められる。誰だ、と思って振り返ればそこには大和撫子と言うべき同級生の姿があった。彼女の名は近衛 木乃香。：そう、刹那が「お嬢様」と呼び、常日頃ストーカー、護衛をしている少女だ。

彼女は魔法世界、それも日本においてはかなり有名な血筋の、い

わゆるお嬢様という訳だ。それ故に刹那が護衛についている、という事なのだが、彼女自身にはそういった裏の事情は隠しているようだ。

故に、彼女はごく普通の一般人と変わりがない。…正直、そのままでいた方が幸福だと思う。

「なあ、真名、せっちゃん見なかった？」

「いや。私は見てないな」

「そっかー…」

軽く小走りでかけてきて、そのままの勢いで問いかけてきた木乃香はしょんぼり、と肩を落とす木乃香の表情は見るからに落ち込んでいる。…まあ、無理もないか、と思わず思う。

刹那に聞いた話によると、刹那と木乃香は幼馴染みらしい。昔はよく一緒に遊んだものだ、とわざわざどこから持ち出したのかわからないプロジェクターを持ち出してまで刹那が説明していたものだ。しかしあの映像は一体どうやって作成したのだろうか。明らかに視点が刹那のものだと思われるのだが。そしてやたらと木乃香にエフェクトがかかっていたのは気のせいなのだろうか。むしろあの映像の成分が木乃香100%で出来ていた気もする。

「…せっちゃんが傍におらんと何しでかすかわからなくてなー」

「……木乃香、その気持ちは痛い程、わかる」

「……真名も、いつもいつもご苦労さんやなー」

まあ、そんな木乃香への忠誠心を隠しもせずに振る舞うから本人

にも「昔のせつちゃんは…」とか言われるんだ。ああ、そういえば、奴が転校してきた当初にこんな騒ぎもあったな。

刹那と同室になって、とりあえずの挨拶を交わし、奴の自己紹介のほとんどが木乃香に対する忠誠心(?)で出来ていて、とりあえずそれに脳を浸食されるような苦痛を受けた後に登校。

その後、入学式を終えて、そこから別行動で寮へと戻ってきたら……。

『龍宮、介錯を頼む』

死に装束を身に纏って、切腹用の短刀を用意していた。正直、流石の私も驚いて一度扉を閉め、自分の部屋かどうかを確認した程だ。そして慌てて奴から短刀を取り上げると喚く泣く暴れる。いつそ逆に殺してやろうか、と思った程だった。

何でも「お嬢様に変態と言われた。そして嫌われた。ビンタされた。もう生きる価値なし、絶望だ、よし死のう」らしい。…会って早々、貴方を365日^{監視}護衛しますって言われれば、そりゃ変態と言われるわ、この戯けが。

まあ、そんな騒動もありつつも何だかんだで刹那と木乃香はまた幼馴染みとして付き合っているらしい。刹那は相変わらず変態で、木乃香は「ウチがせつちゃんを真人間に戻すんやー!!」と意気込んでいるが。是非とも頑張っ^て欲しいものだ。私の胃の安寧の為に。

「うーん、せつちゃんどこ行ったんやろ? ウチの傍にいないって事が凄い不安なんよね」

「…まあ、大方、アレだ」

「…アレになる前に止めたいんやけど…」

そんな時だった。遠くの方から、ぎゃー！！　だの、ひいひいっ！！　だの、助けてくれー！！　だの悲鳴が聞こえてきたのは。嫌な予感がして振り返ってみればそこには逃げまどう男子生徒とそれを追いかける刹那らしき姿が見えた。

らしき、というのその件の人物が黒子の格好をしているからだ。だが背丈やその手に持っている竹刀袋にいられている刀、そして額に白字で書かれた「お嬢様命」が黒子の変装の台無しになっている。…アイツは一体どういう考えで覆面にあの字を入れたのか。謎すぎる。

「あーっ！！　もう、またあーっ！！　こらーっ！！　せつちやーんっ！！　待ちいやーっ！！」

それに木乃香もまた絶叫して、慌ててその後ろ姿を追っていく。ばたばた、と駆けていく木乃香の背を見送って、私は空を仰いだ。

「…今日も良い天気だなあ」

＊ ＊ ＊

その日の夜。皆が寝静まる宵の時刻。月が浮かぶ空の下、私はその手に仕事用の装備を持ちながら駆ける。

「やれやれ、入学してからというもの、慌ただしい奴らだ」

口から零れ出る悪態は今宵のターゲットに対するもの。この麻帆良学園は魔法的な価値が高く、常に小競り合いが頻発に起きている。魔法に関わる者はこれを撃退する仕事を担っている。当然、この私もだ。

だが、最近の小競り合いはそれだけが理由にあらず。その事には木乃香の存在が関わってくる。

魔法は一般人には秘匿されるものだが、その活動は世の為、人の為に活動している。紛争地域で難民を助け出したりと、極秘裏にだがその魔法という異能を以てして人を救う事を生業としている。

その為、魔法にはそれを管理し、運営する組織が生まれるのは当然の帰結。この学園の学園長であり、木乃香の祖父でもある近衛近右衛門は関東魔法協会の理事も務めている、という訳だ。

そして問題なのが、この日本にもう一つある魔法組織、それが関西魔術協会だ。昔から関東魔法協会と関西呪術協会は仲違いを起こしていて、今は冷戦状態、と言っても過言ではない。

ここで複雑なのが木乃香の立場だ。木乃香の祖父は先程も言ったとおり、関東魔法協会の理事を務めているのだが、彼女の父親は関西呪術協会を束ねているのだ。

しかも、彼女の実家はやんごとなき血を受け継ぐ名家の娘なのだ。その身に秘められた魔力は英雄として名高い”サウザンドマスター

”ナギ・スプリングフィールドを超えるとまで言われている。

その力を悪用されぬように、彼女は麻帆良で育てられていた、という訳なのだが、その彼女が魔法協会の膝元にいるのが氣にくわない関西の者たちが小競り合いをしかけてくる、というのが現状だ。

「しかし、果たして私の仕事が残っているかどうか、だな。まったくあいつめ……」

ふと、苦笑を浮かべて呟いてみる。その手には小さな白い羽が一枚。やれやれ、と思わず肩を竦めた。

眼前に見えてきたのは森。結界に反応して迎撃に出た先生達によって張られた結界が展開されているのが確認出来た。その内側へと入るための詠唱を唱え、結界の中へと飛び込んだ。

＊ ＊ ＊

――――斬。

呆気なく、という程にまで綺麗にその首が落とされた。首が落とされたのは異形の頭。角の生えた筋肉質な顔だ。それは煙になって消えていき、その痕跡すらも残さずに消えてしまう。

戦場となる森の中、森に散開するのは鬼や天狗といった式神達だ。その数は恐らく50体ほど。それが恐れを成して足を引いている。その中心にいるのは一人の少女、刹那だ。

刹那は淀みない洗練とされた動作で刀を構える。野太刀と分類されるソレは少女の体には不釣り合いだ。だが、それを容易に彼女は自らの手足の如く扱っている。

その表情に浮かぶのは引き締められた表情だ。常に彼女が浮かべている表情ではあるのだが、その瞳の奥には日常にはある穏やかな光はない。ただ冷徹なまでに自分を殺し、静かな殺気を周囲へと叩き付けている。

「…貴様等が誰によって差し向けられた刺客かは知らない」

が、と。

「お嬢様の身を害すのならばお嬢様の為に斬る！！ ……ついでに学園の平和を乱すのならばな！！」

かつ、と目を見開きながら刹那は言い切った。その後、付け足すように小さく言葉を添えたが。それを聞いた鬼達は思わず、こけた。思いつきり、コントのような転び方だった。

『あれええええっ！？ ついで！？ ついでで学園なのか！？』

「……ついでで何が悪い！？ むしろお嬢様が至上だ！！」

『げ、外道！！ こいつマジで外道！！』

思わず鬼達が全員指を揃えて叫んだ。それに刹那はやや眉を寄せるが。

「…貴様等、良いだろう。貴様等に如何にお嬢様が優れた存在なのかを得と語ってやろう!!　　いいか、まずお嬢様の魅力はだな——」

「オ、オヤビン!!　　どうしましょう、何か語り出しましたよ!?!」
「別に聞きたくないのに頭の中に入ってくるような、何なんすかこれ、何なんすかこれ!?!」

「く、こ、この、よくわかんないがとにかく奴を止めろおお!!」

言葉と共に、動きを止めていた鬼達が一斉に襲いかかる。その動きに合わせて刹那もまた動いた。肩に担ぐように刀を構え、地を蹴った。瞬きの間とも言えるその一瞬、刹那の姿はかき消える、否、目にも留まらぬ速さで駆け抜けたのだ。

「——嘆かわしい。お嬢様の素晴らしさが伝わらないというのは…否、これは私の不徳。お嬢様の素晴らしさを万分の一すらも言葉に出来ぬ我が不徳…!!　　ああ、申し訳ありませんお嬢様!!　　この刹那、我が身の至らなさが憎い…!!」

「オ、オヤビィィィンツ!!　　どうしようこいつ、どうすればいいんすかこいつ!?!」

「くっ…変態か此奴は!!」

うあああああっ！！ と頭を抱えながら叫ぶ刹那に鬼の一匹が最早涙目の状態でリーダー格の鬼へと助けを求めている。しかし、助けを求められた鬼も正直言ってお手上げだ。それがつい、感想となつて口から零れ出た瞬間。

「――誰だ、私を変態と言つた奴はああ――っ！！」

目を見開き、修羅の如くの形相で刹那が吼えた。踏み出す速度は最速の一步。神速の如く駆け抜け、肩に担いでいた上段から振り抜いた。振り下ろされた刀は抵抗なく鬼の体を両断する。煙となって消失せる鬼の体、刀の勢いは衰えず、が、その勢いを殺さぬように地を叩く前に刹那は刀を切り上げた。

その切り上げた刀が次に迫っていた鬼の腕を飛ばす。そのまま踏み込み、その足を軸にするようにして回転。胴体を真つ二つに斬り飛ばす。

「私は変態ではない。――ただ、お嬢様を愛して止まないだけだ！！」

『――確定じゃねーかアアアアア！！』

やかましい！ と叫び、刹那はそのまま刀を構えて鬼の群れへと飛び込むのであった。

「…ほらな。やっぱり私の仕事がないじゃないか」

その光景を遠目で見守っていた真名は呆れたように溜息を吐き出し、その手に握っていた銃を下ろすのであった。

この後、刹那が鬼達を全滅させるのにかかった時間は3分もかからなかったという。

＊
＊
＊

「お嬢様、おはようございます！ 今日も美しいですね、この刹那、直視するのが少々堪えます！！」

「あははー、おはようせっちゃん。そんなにウチって見苦しいか！？」

「まさかそんな！！ ならば24時間見つめる覚悟で参ります！！ いざっ！！」

「せいっ」

「――目つぶし！？」

朝の教室、教室に先にやってきていた刹那は後から入ってきた木乃香の前に跪き挨拶をする。それに木乃香のこめかみに青筋が浮かびあがるのを周囲のクラスメイト達は見ていたが、いつも通りとしてスルーする。

そうして刹那が満面の笑顔で顔を上げた瞬間にこのかのVサインが刹那の目を潰した。ぬおおっ！！と目を抱えて地面を転がる刹那を青筋を浮かべたままにっこにこと笑みを浮かべて見ている木乃香。その二人の様子を見ていた真名は小さく溜息を吐き出す。

「…ああ、平和だなあ」

第1章「彼女たちの学園生活」 02

ウチにはとても大切な幼馴染みがありました。ひとりぼっちで、広
いお屋敷で遊んでいた私の始めての遊び友達になってくれた大事な
親友。

その子とはある時を境に離ればなれになってしまって、凄く寂し
かったけど、でもいつかまた会えるから、とお父様に言われていた
から我慢してた。いつか会えたら色んな事を話そう、とか、そんな
事を考えていた。

…そんな些細な夢は、まさかの親友のあんな変貌で粉々に碎かれ
るなんて思ってもみなかったんです…。

＊ ＊ ＊

彼女―桜咲 刹那―と再会したのは私が中学校に上がった時でし
た。その時、私はあまりの親友の変貌振りに思わず現実を認めたく
なくて、思わず彼女にビンタをしてそのまま逃げてしまいました。
…もつと強い一発、いれておくべきだったかな、と今でも本気で
思います。

え？ そこは普通落ち込む所だろ？ って？ …そりゃウチやっ
て落ち込みましたよ。親友があんなになってしまったと言っても、

親友をぶってしまった、というのは自己嫌悪しましたよ？

でも、正直、今となってはその罪悪感は消え去ってしまったわ。なんでかって？　だって毎日会う度に度が過ぎる程までに過保護だし、普通に話してくれへんし、皆には迷惑かけるし、すぐ訳のわからない奇行に走り出すし…。

ああ、もう！　思い出すだけで苛々するやら悲しいやら疲れるわ！　昔はあんなに優しくかったのに…。違う、今でも優しいんやけど、あそこまで度が過ぎたものじゃなかったんや…。

もうこうなったらウチが真人間に戻してみせる！　と決意してみたものの…。ああ、もう、どうしてあんなになっちゃったんや、せっちゃん…。

＊ ＊ ＊

「――と、言う訳できりきり吐きいや？　じいちゃん」

「こ、木乃香がグレてしもうた！？　濃、ショックッ！！」

「はよ吐かんと、ウチもうお見合いせへえんからな？　後、今まで取った写真とかビデオとか全部始末するから。ほら、早よ、楽になるよ？　じいちゃん」

「それは駄目じゃっ！！　年寄りから生き甲斐を奪うもんじゃないぞ木乃香！！　わかったわかった！　吐くから！　吐くからそのライターは仕舞いなさい！！」

笑う、とは本来攻撃的なものであるという。木乃香は満面の笑顔を浮かべたまま学園長室の執務机の対面に手を置いて自分の祖父である近右衛門を睨み付けていた。その片手にライターを持ち、かちかち、と不気味に音を鳴らせながら。

それに近右衛門は今にも昇天しそうなまでにショックを受けつつも、自分の生き甲斐でもある孫の成長記録を奪われては堪ったものではない、と慌てて木乃香に言う。その必死さに木乃香もようやく落ち着いたのか、ライターを執務机の上において。

「…で？ 吐けと言われても何を吐けば良いんじゃない？ 儂？」

今更じゃが、と前置きをしながら近右衛門は木乃香に問いかけた。そもそもこの可愛い孫はいきなり学園長室に来るなり前述の通りに迫ってきたのだ。正直、何の事かさっぱりだった近右衛門だった。対して、木乃香は、ああ？ とメンチを切り出す。それに軽くビりつつも、何でこんな怒ってるんじゃない？ と疑問符を浮かべる近右衛門。そんな近右衛門の反応を無視し、木乃香は執務机を力強く両手で叩いて。

「せっちゃんの事や！ どうしてあんな…あんな変態さんになってしまったんや！？ じいちゃんの仕業やろ！？」

「木乃香がどういう目で儂を見とるかようわかったわ！！ 儂、泣いちゃう！！ あ、ライターを持ちゃいかん！！」

「もう、何考えてせっちゃんをあんな風にしたんやーっ！！」

「わ、儂は知らん！！ 儂は何の関与もしておらん！！」

「……………え？」

「な、何じゃ、そのいかにも「心外です」って顔は!？」

「いやいやいや…せやかて…ほら、じいちゃんやし？」

「儂って何!？ 孫にこんな扱いされる儂って何!？ あ、火つけ
ちゃ駄目!！」

再びライターを手に持った木乃香に最早土下座の勢いで謝罪する
近右衛門。それに木乃香がふう、と溜息を吐きながらライターを机
の上に戻す。

「…じいちゃんの仕業じゃないなら、せっちゃんはどうしてあんな
ったんや？ まさかお父様が？ そっか、お父様かあ…」

「む、婿殿は関係ない! だからその「絶縁します」的なオーラを
醸し出すんじゃない!! 婿殿本当に関係ないから!!」

「じゃあせっちゃんはどうしてあんなったんや!？」

「そ、それは……」

「それは？」

「…儂にもよくわからんのじゃ。気づいたらあんなってたらしいと、
婿殿から聞いておったんじゃ。そもそも木乃香、儂、あんまり京都
いかんじゃろ？ 儂が刹那君と顔合わせたのは数度しかないんじゃ
ぞ？」

「でも、なんやせっちゃん、じいちゃんと仲良い、みたいな話をし
ておったけど…」

その木乃香の呟きに、ぎく、と近右衛門は一度体を震わせた後、
左右に視線を彷徨わせ始める。だが考え込んでいる木乃香はその仕
草に気づく事はない。一瞬にして動揺を消した近右衛門は、ほっ、

と胸をなで下ろし…。

「学園長、失礼いたします。桜咲です」

（このタイミングでかーっ!?!）

ノックの音と共に入ってきたのは刹那だった。さっきまで胸をなで下ろした手はそのまま足へと叩き付けて、ぱちーん！　といい音を立てた。まるで悔しがるような反応に木乃香が怪訝そうな顔を浮かべたが、刹那の方が気になるのか、刹那の方へとちらちらと視線を向けている。

「せ、せっちゃん…」

「お嬢様、先程振りです」

「いやいや、数十分前に会ってるやん?」

「そうですね。41分23秒振りです」

「細か!?!」

「私の体内時計は正確です。もしもお嬢様が時計などをお持ちでは無いときに正確に伝える為に、そして最悪の場合には遭難した時などの為にすぐに時刻を把握出来るように修行をしました」

「どういう状況を想定しとるんや!?!　…ちなみに今、何時?」

「16時51分59秒、失礼、今52分になりました」

「うわ、携帯の表示も一緒に変わったわ!　怖い、せっちゃん怖いっ!?!」

「これで遭難しても安心ですね、お嬢様」

「どや顔したって褒めへんからな…?」

自信満々の顔で言い切る刹那に、木乃香は半目になって呆れたように言う。それに気にした様子もなく、刹那は近右衛門と向かい合った。それに近右衛門がびくつ、と体を震わせ、何やら高速でジェスチャーらしき動きをしている。

それに木乃香は先程と同じ怪訝そうな表情で近右衛門を見る。近右衛門は必死にジェスチャーを続けている。それを刹那も軽く小首を傾げて見ていたのだが、ああ、なるほど、と納得したように頷き。

「そこまでお待ちせしていたとは。申し訳ありません、学園長。これが今日の分のお嬢様の成長記録です」

「ノオオオオオオオー！ー！ッ！？！？」

鞆の中から取りだして机の上に置いたのは数十枚の写真とケースに収められたDVDディスクだった。それを置かれた近右衛門は思わず頭を抱えて絶叫した。その瞬間、その写真を覗き込んだ木乃香が固まっているが、それを無視して近右衛門は叫ぶ。

「どうしてバラすんじゃ刹那君！！ 空気を読みなさい、空気を！！」

「？ 空気は吸うものですよ。空気に文字は書いていませんよ？」

「素でボケ！？ いや、狙ってるんじゃろ！？ そうやって儂を嵌めようとしているな刹那君！！」

「…ああ、なるほど、比喻ですか。そういう言い方もありましたね。失礼しました。それでは、私は用事も終わりましたので、どうぞ、ご家内での親睦を深めてください。お嬢様、失礼します」

「…うん、せっちゃんにも後で話あるけど、今はバイバイな？」

「ええ、それではまた後でお伺いたします。それでは」

にこつ、と笑みを浮かべて刹那は学園長室を去っていく。同じく、刹那に笑みを以て見送った木乃香は、その表情のまま近右衛門へと振り返った。ひい、と近右衛門が小さく悲鳴を上げて後ずさった。

「？ どうしたんや？ じいちゃん、そんな後ずさって。ふふふ、それってまるで自分が悪いことしてます、って認めてるみたいやんか？」

「こ、これは、その、あの、あれじゃ、ほら、な？ ……わかってくれるじゃろ？」

「勿論。――さ、言い残す事、あるなら今の内やで？」

「ま、まっ――」

＊ ＊ ＊

学園長室を後にし、外へと出た刹那は不意に何かの音を耳にして顔を上げた。その瞬間、放物線を描きながら近右衛門が飛んでいくのが見えた。

「…なんだ、ただの学園長か」

特に問題なし、と刹那はそのまま歩みを進めた。さて、帰ったらお嬢様の映像及び写真を保管用、観賞用、布教用に焼き増ししなければ、と今後の予定を確認しながら。

編集するだろう映像や写真の事を思い、ほくほくとした顔で帰ろうとしていた刹那は気づかない。その後ろから満面の笑顔を浮かべながらも、こめかみに青筋を浮かべて疾走してくる木乃香の姿に。

＊ ＊ ＊

「…ふう、刹那が作ったものだと思うとやるせないが、なかなかどうして…」

通学路の途中、刹那の作った漢方を飲みながら真名はのんびりと歩いていた。その味を堪能していた。この心安らぐものを作ったのが、そもそものストレスの張本人だと思うとやるせないが、それでも効果は抜群だ。

が、その真名の癒しとなっていた漢方は、不意に見上げた空、空

飛ぶ学園長と刹那の姿によって吹き出される事になったのだ。

「――ぶほっ!?　ぐうつ、げほおっ!?　は、鼻に漢方が……!　
って!?　え、え?　な、なあああ?」

鼻にまで漢方が入って悶え苦しむ真名だったが、今一度空を見上げるが、そこに学園長と刹那の姿は無い。見間違いだっただのか、と真名は目を擦って。

「…しかし、私は魔眼持ちだぞ?　見間違いなんてあるのか?　いや、だとしたら学園長と刹那は空を飛んで…?　いや、魔法?　でも、なんか、こう、違う、って、……一体なんなんだああああああああああああっ!!!!!!!!!!!!!!」

うがああああああああああっ!!　と真名は頭を抱えて絶叫するのであった。

＊ ＊ ＊

「…ウチ、もう誰も信じられへん…」

アスナは困惑していた。帰ってきたら同居人が膝を抱えて部屋の隅で鬱になっていた。またか、とアスナは彼女の親友という桜咲刹那との出会いの事を思い出し、投げやり気味に溜息を吐き出した。放っておきたい所だが、このまま放っておくのは自分の心境的にも、今後のにもよろしくない、そう思い、意を決して木乃香へと声をかけた。

「木乃香、なんかあったの？」

「…アスナもそうやってウチを裏切るんや。お父様やってきつと裏ではせつちゃんをあんな変態にするようにし向けたんや。ふっ、次はアスナが変態になるんか。お気の毒にな、アスナ…」

（な、なんか洒落にならない事呟かれてる…！！）

これは本格的に危ない。まったく一体何があったのか、とアスナは嘆息しつつも、何とか木乃香を励まそうと、木乃香の頭に手を伸ばした。まるで子供の頭を撫でるように木乃香の頭を撫でる。

それに木乃香は少しだけ身を震わせて、そこでようやくアスナに気づいた、というように表情を驚きに変えてアスナを見た。そんな木乃香の様子にアスナは僅かに苦笑を浮かべるが、そのまま彼女の頭をなで続けて。

「大丈夫だよ。私は木乃香の味方だから」

「…アスナ…」

「なんかまた桜咲さんとなんかあったのかわからないけど、嫌がらせしよう、ってやってる訳じゃないんだから」

「…それはわかつとるけど…」

「嫌だって言ったの？」

「え？」

「だから、その、桜咲さんにそんな変態紛いな事しないで、って」

「……あ」

「言えば止めてくれるんじゃない？　きっと、っていうか、絶対桜咲さんは木乃香の事、好きだから。好きな人に嫌がる事をしよう、って言う人はいないでしょ？」

アスナのその言葉に木乃香は目を見開かせた。確かにアスナの言う通りだ、と。自分は刹那に嫌だ、とは言っていない、と。ただ刹那に何も伝えないまま、刹那を拒絶していた。

刹那の行動は正直、理解出来ないし、やられては嫌だ、と思った。だけどそれは悪意からやっている訳じゃない、という事は木乃香だっけわかってる事だ。ならば、それを正そうとするのではなく、それを嫌だから止めて、というのが正しいんじゃないか、と。

「…アスナ…」

「大丈夫だから、もう誰も信じない、なんて言わないでよ。冗談でも、さ。ね？」

「…っ…アスナ、ごめん、ごめんな…！」

ごめんな、と何度も呟きながら木乃香はアスナにもたれかかるように抱きついた。それにアスナはこのかを抱き留めて、ぽんぽん、と背中をあやすように叩きながら頭を撫で続けるのであった。

＊ ＊ ＊

次の日、木乃香はアスナと共に教室へと入った。そうすると、刹那がいつものように木乃香の前に跪いた。それはいつものような光景だった。だから誰も気を留める事はない。アスナは一度、木乃香へと視線を向けた後、軽く掌を振って自分の席へと着いた。

「おはようございます、お嬢様」

「……」

「？ ……お嬢様？」

「お嬢様って誰や？ ウチ、お嬢様って名前やないんやけど」

ぷいっ、と顔を背けながら木乃香は刹那に言い放った。それに刹那は、軽く眉を寄せた。そしてやや困ったように表情を歪ませて。

「…あの、ですが」

「その話し方も。昔のせつちゃんはそういうの嫌いやって言ったらすぐに直してくれたのに」

「…うっ…」

「…どーして昔みたいに喋ってくれへんのや？　ウチの事、嫌いになった？」

「そんな事はありません！！」

刹那が声を荒らげて言った。それにクラスメイト中の視線が集まるが、木乃香は気にせず、ただ刹那を見つめたまま、刹那に指を差して言った。

「なら！　今度からお嬢様と敬語は禁止！」

「ええっ！？　そ、そんな、お、お嬢様…」

「このちゃん」

「うっ…」

「このちゃん」

「あ、あの、お嬢…」

「このちゃん！」

「あうう…」

木乃香は刹那に強く言い切りながら迫る。それに刹那はたじたじとなり、後ろへと一步、下がる。そして視線を彷徨わせ、それから、ちらっ、と見るように木乃香の顔を見た。その間にも木乃香は一步も引かず、刹那をジッ、と見続けて。

「…ん、…ん、…ん、…ん…」

「……っ…」

「い、…ん………——コケコッコーっ！！」

こ、と何かを言いかけながらもだんだんと顔を真っ赤にさせていった刹那は、そのまま鶏の鳴き声と共に窓の外へと硝子を突き破りながら逃げ出していった。それに木乃香は全力でこけ、聞き耳を立てていたクラスメイトの幾人かもずっこけた。

「そこまで引っ張っておいて何よソレーっ!？」

「あの、馬鹿…!! 少し期待した私が愚かだったか…!!」

がーっ! と吼えるアスナに、全力で脱力しながらぶるぶると震えている真名。それに笑い出す者や、様々な反応がクラス中に広まる。それを木乃香は、刹那が突き破っていた窓硝子を見て、ふう、と小さく溜息を吐いて。

「…まったく、せつちゃんは仕様がないなあ」

くす、と小さく笑みを浮かべるのであった。笑みを浮かべるこのかの脳裏に蘇るのは刹那と出会い、一緒に遊ぶようになってから暫くした後の事。

その時もまだ、刹那は木乃香の事をお嬢様、と呼んでいた。それを嫌だ、と木乃香は必死に訴えて、そして刹那に「このちゃん」と呼ばせるようになった時。

「…あの時にもわとりさんやったなあ、せつちゃん」

変わってない。本当に何も変わってないんだ、と。そう思えるようになって木乃香はおかしかった。腹を抱えて笑いたいくらいに嬉しくて、自分の頬が緩むのを感じるのであった。

＊
＊
＊

「…で、誰も突っ込まないけど、桜咲さん、飛び降りたけど…」
『…………あ』

＊
＊
＊

「お嬢様…駄目…？ …この、ちゃん…うう………」

飛び降りた先にあった木の枝にひっかかり、目を回しながら呻く刹那が保健室に運ばれたのはこの数十分後の事だった。

第1章「彼女たちの学園生活」 03

その日、麻帆良は休日であった。学校が休みのこの日、普段は学校に通っている生徒達は思い思いに自分の時間を過ごしていた。自分の趣味に没頭する者もいれば、部活動に熱中する者、それは様々だ。

そんな休日を満喫する者たちの中にその二人はいた。一人は髪をサイドで纏めて、私服と思わしきシャツにミニスカート、その下にスパッツと動きやすそうに服装を纏めた少女だ。

その少女の腕を引き、満面の笑顔で歩むのは長い黒髪を長し、その横にちょこんと跳ねるように髪留めで結び、ゆったりとした上着にスカートを纏った少女。そう、刹那と木乃香であった。

「あ、あの、お嬢様…、そんな引っ張らずとも付いていきますので…」

「駄目やー、せっちゃんは。手を離したら何しでかすかわからんから。手を繋ぐが嫌なら首輪やで？」

「……………」

「え？そこは否定して欲しいんやけど!？」

「いえ、妥協案としては…」

「そんなに私と手、繋ぎたくないん？」

「ちょ、ちょっと恥ずかしいので…」

少し照れたように言う刹那に、いやいや、首輪をつけられる方が恥ずかしくないんか!？と全力でツツコミそうになる木乃香。はあ、と深々と溜息を吐き出して。

「嫌やない？」

「…嫌じゃないですけど」

「じゃ、このまま続行ー」

刹那と言質を取った木乃香は終始、自らのペースで刹那を引っ張っていく。そんな木乃香にやや照れているのか頬を赤らめつつも、どこかその頬を緩ませている刹那。

二人がいるのは商店街だ。麻帆良の中にあるだけあつてか、その店の内容は学生を対象とした商品が揃えられているように感じられる。その商店街の中でも服屋を中心とした一角に二人は歩を進めている。

二人がこうして共に買い物に出かける事になったのは、ほんの数日前に遡る…。

＊ ＊ ＊

木乃香は刹那に「このちゃん」と昔の愛称で呼ぶように迫ってかというもの、刹那と木乃香のやり取りは刹那が終始、木乃香に押され、木乃香から逃げ出す、そしてトラブルを起こすという流れになっていた。

その刹那が暴走した際に主に被害を受けているのは同居人の真名らしいが、そこは置いておき、刹那と木乃香の関係にはしばしば、変化が見受けられた。そしてその日も、木乃香は刹那と昔のように仲良くやっていけるように、そして変態として歪んでしまった刹那を真人間に正す為に刹那の姿を探していた。

最近では遠目から見守るに終始していたが故に木乃香はなかなか刹那と接触出来ずに居たのだ。そこで木乃香は意を決して真名と刹那の部屋を訪ねてみる事にしたのだ。

「せっちゃん、真名、木乃香やけど開けてー」

木乃香が二人の部屋の前に立ち、ドアをノックしてから中へと声をかける。そうすると中で何かが暴れるような音が響いた後、がっん、と大きな音が聞こえ、そして静かになる。中で何が起きたんやろうか？ と木乃香は思わず口元を引きつらせる。

そうして少し間を置いた後、扉が開き、中から顔を出したのは真名だった。どこか疲れたような顔をしたまま木乃香へと顔を向けて。

「やあ、木乃香。あの馬鹿なら取り押さえておいた。用事があるなら入ってくれ」

「ごめんな、真名。苦勞かけて」

気にするな、と溜息混じりに真名は木乃香に告げて部屋へと招き入れた。木乃香が中へと足を踏み入れると、気絶したように力を抜いた状態で倒れ伏している刹那の姿が目に見え込んだ。

その姿に木乃香は目を見開く。彼女が驚いたのは何に対してなの

か。ただ、彼女が凝視するのは刹那の姿。

「…これ、せっちゃんの私服？」

「…まあ、そうだな」

「…これ以外の服は？」

「…全部似たようなものだな。後はジャージとかそこら辺だ」

「――制服と何も変わらんやんかーっ！！」

木乃香は傍にあった刹那のものらしきクローゼットを開いて絶叫した。そこに納められていた服は似たり寄ったりの服ばかりで、なおかつそのバリエーションも少ない。年頃の女の子としては信じられない現実を目の当たりにした木乃香は魂が抜けそうだった。

「真名のクローゼットと見るからにサイズが違うし…」

「此奴の私物スペースはほぼ木乃香の映像や写真で埋まってるしな」

「――燃やす」

「――お嬢様であつてもそれだけはッ！！ 後生ですお嬢様！！」

何の迷いも無しにライターを取り出した木乃香に倒れていた刹那が必死にしがみついて懇願する。それを振り解こうと木乃香は力を込め、そのまま刹那を剥がした。そして軽く荒れた息を正しつつ。

「せっちゃん！ 女の子としてこれはどうなんや！」

「着れば問題ないかと」

「じゃあ、私が年中ジャージでも良いんか？」

「駄目に決まってるじゃないですか!？」

クワツ、と刹那は開眼する程までに声を張りだして否定した。それに木乃香はむっ、とした顔を浮かべて。

「じゃあせっちゃんはどうなんや!？」

「私は良いんです。可愛くありませんし、興味ありませんし」

木乃香の問いかけに、しれっ、と心底どうでも良い、と言わんばかりに刹那が言い切った。それに木乃香の頭から、ブチツ、と何かが切れる鈍い音がした。それを察知した真名が一步距離を取り、玄関の方へと寄っていく。

そうして木乃香が顔を俯かせ、ふるふる、と震えだした。その震えが続くにつれて木乃香より異様な気配が溢れ出す。それに刹那は気づかず、お嬢様? と心配そうに木乃香に声をかけた瞬間。

「せっちゃんの、ドアホーッ!!」

「ボディッ!？」

木乃香の腰の入ったボディীবローが刹那の鳩尾に叩き込まれる。それに刹那はあまりにも無防備に受けてしまった為に、耐えきれずにその場で崩れ落ちる。ぴくぴく、と痙攣をする刹那を見下ろし、肩で息をする木乃香。

そして木乃香は何かを決意を決めたように刹那を見下ろし、刹那へと指を差して。

「決めた！　せっちゃん、今度の休み、せっちゃんの私服を見立てに行くからなっ！！」

「え…？」

「え？　やないよ。行くんよ、せっちゃんの私服を買いに」

「あの、別に要りませんけど…」

「うるさーいっ！！　せっちゃんの意見は聞いてないんや！！　もし、せっちゃんが嫌やって言うんなら私、年中ジャージで過ごしてやるんやから！！」

「なっ…！！？　お、お嬢様、そんな、お考え直してくださいっ！！」

「うるさいうるさいうるさーいっ！！　言うこと利かないんやったら絶交やからな！！」

そうして、木乃香の絶交の一言に予想以上に堪えた刹那が憔悴しきった様子で頷いたのはこの後の数分後であった。

* * *

そんな経緯があって、二人は刹那の私服を買いに街へとやってきていたのだ。刹那は出発まで渋っていて、今でも木乃香に手を引か

れて歩いている。木乃香はそんな刹那の表情を伺うように見る。
自分が見られている事に気づいたのか、刹那は木乃香へと視線を
移す。そして刹那は軽く小首を傾げて木乃香へと視線を向けて。

「お嬢様？ どうしましたか？」

「…むー、せっかくお出かけしてるんやから、そういうの止めへん
？」

「…む…」

木乃香が不満そうに眉を寄せながら刹那に言うと、刹那もまた眉
を寄せる。それからしばらく刹那は悩むように眉を寄せ続けていた
が、不意に、溜息と共に力を抜く。そうした後、改めて木乃香へと
表情を向けて。

「…わかったよ。このちゃん」

それは普段の刹那からは想像の出来ない微笑だった。頬を上げ、
目を小さく細めるようにして笑っていた。その表情に木乃香は一瞬、
呆気取られたように刹那を見た。今まで、どう言おうとも敬語をや
めなかった刹那が、ようやく昔のように呼んでくれた。

その驚きもあったが、今、浮かべている刹那の表情があまりにも
綺麗に笑う。それは本当に、綺麗、と賞賛したくなる程の笑みだっ
た。穏やかな木漏れ日。まるでそう思わせるような…。

「…このちゃん？」

「…うえ？ あ…せ、っちゃん…？」

「…どうかしたんか？ …やっぱり、なんや、この口調で喋るの久しぶりやから変か？」

「え？ そ、そんな事あらへんって！ なんか、その…懐かしいなあ、って思っ」

「…ごめん、どうにも、なあ。このちゃんの前に出ると気、張ってしまうからなあ。まあ、そうそう気なんて抜けへんけど…」

「そんな、気いなんて張らんでもええのに」

「そうしたら腑抜けになっ」てしまいうやから、嫌なんや。言うたやろ？ ウチはこのちゃんを護る、って。その誓いは、今でも続けてるんやで？」

につ、と。普段は浮かべないだろう表情を刹那は気軽に浮かべている。それに木乃香は調子を狂わされっぱなしだ。昔の刹那とも違う、けれど今までの刹那とも違う、彼女の違う一面。

「ほら、私服を選びに行くんやろ？ うちはそのうのわからへんけど、このちゃんが選んでくれるなら安心して任せられるわ」

「…む、むう…さっきまで乗り気やなかった癖に。何、調子良いこと言うてるんや…」

「…ごめん。お詫びに、今日は一日このまま付き合うから、機嫌直してや。ほら、行こう」

繋いだ手。先程まで木乃香が引いていた手を引いて刹那は木乃香を連れて歩いていく。それに木乃香は、わ、わ、と引っ張られるままに前へと進み、そのまま刹那に手を引かれるまま木乃香は服屋を目指すのであった。

＊ ＊ ＊

それからは、木乃香にとって本当に楽しいと言える時間だった。

刹那は自分が選んだ服を試着室で着て見せる。選んだ服の中には刹那が気に入ったものや、木乃香が似合うと太鼓判を押したものの、刹那があまりにも似合わない、無理矢理木乃香に着せられた服など、様々な服を刹那に着せていた。

それは、いつから願っていた光景だっただろう。木乃香にとって待ち望んでいた光景。親友である彼女と普通の友達と同じように買い物に出かけ、互いに馬鹿だと思われるようなやりとりをして一日を過ごしていく。

そんな時間が楽しすぎた。だから木乃香は終始、笑顔でいた。それに吊られるように刹那も笑顔で。

「うーん、次、どこ行こうかー？」

「…まだ選ぶんか？」

「まだまだ！　せっちゃんはまだでさえ服持っていないんやから良い機会やで！！」

軽くげんなり、という表情で木乃香に視線を返す刹那。そんな刹那に笑いかけながら木乃香は刹那の隣を歩みながらスキップを踏む。見るからに浮かれている、というのがわかって、刹那は心配げに声をかけた。

「このちゃん、転ぶで？」

「転ばんよー」

浮かれたままに返答する木乃香に対し、刹那は苦笑を浮かべて。そして、彼女は不意に目に止まった店に足を止めた。それに気づいた木乃香もまた足を止めて刹那へと振り返った。

「せっちゃん？」

「このちゃん。ちょっと、あの店、見に行っても良い？」

＊ ＊ ＊

（せっちゃんのセンスってわからん…!!）

木乃香は試着室で着替えている刹那を待ちながら思わず思う。木乃香がいるのはスーツなどを売っている、木乃香などにはほぼ縁が無いと言っても良い店だ。だが、刹那はそこに入りたい、と言い出した時は思わず、何で？　と言ってしまった程だ。

何でも、スーツが着てみたい、と刹那は言ったのだ。別に着たいのなら、と木乃香もOKしたので刹那はスーツを選び出したのだ。その選びようは先程の服を選ぶよりも真剣みがあった。

うんうん、と唸りながら木乃香が待っていると、しゃ、と試着室のカーテンが開く音がし、木乃香は試着室へと視線を向けた。

「――」

「うん。どうかな？　このちゃん」

結んでいた髪を下ろし、胸元のネクタイを調節しながら刹那は問いかける。濃い色のダークブルーのスーツ。下はスカートではなくパンツのものを掃いている。着崩す事無く、しっかりとスーツを着ている刹那は、思わず木乃香が指を差し。

「――なんでそんな違和感無いんやつ!？」

「何で、って言われてもなあ」

まだ幼い内にスーツを着ればスーツに着られている感が見られるが、刹那には異常なまでにそれが無い。女の子らしい格好をしているよりもスーツの方が似合っているというのはどういう事なのか。

しかもどちらかと言えばその姿が会社員よりも、漫画やアニメな

どに出てくるボディガードのイメージが沸いてくる始末だ。…似合っているのが駄目だという訳ではないが、これは、何とも…。

「うん、これ買おう」

「買うんか!？」

「後、何着か欲しいかも」

「ええ…似合うけど、スーツっていつ着るんや？」

「私服にするけど」

「おかしい! それはおかしいでせつちゃん!! スーツって私服に着るものやない!!」

「え? あの人は普通にスーツだったけどなあ…うちもこっちの方が楽やし。寝る時はYシャツだけでええし、着るだけでええし…」

うわあ、と木乃香は思った。ガチャ、と。本当にお洒落などに興味を持っていない。機能性重視、ここに極まれり。思わず木乃香が溜息を吐き出す。

そんな木乃香の様子に刹那は小さく笑って、木乃香の額を軽く指で突いた。突然の刹那の行動に木乃香は小さく悲鳴を上げて刹那を見た。

「冗談やで、このちゃん。…でも、女の子らしい格好してるよりは、こっちの方がうちは落ち着くだけやから。かといってまんま男の子の格好する気もあらへんけどな」

「…むう、まあ、せつちゃんがそういうなら良いけど…。ところであの人って誰？」

そういえば、と木乃香は先程、僅かに話に出てきた「あの人」というのが気になった。それに、ああ、と刹那は小さく頷きと共に呟いて。

「うちの尊敬する人やよ。うちが今、こうしてられるのは、あの人のお陰やから」

「へえ、せっちゃんがそこまで言う人なんか？　どんな人なん？」

「…一言で言おうと」

「言おうと？」

「変態、かな？」

（そいつが原因か――っ！――！！）

ざわっ、と木乃香から一瞬、黒いオーラが噴出する。親友をこんな変態へと仕立て上げたその「誰か」への恨みを募らせる木乃香。

「後…」

「ん？」

「そうだね、あの人――」

――「悪役」だよ。

それは本当に綺麗なまでに笑って、刹那は尊敬していると言う誰かを差してそう言った。それは本当に綺麗な笑顔過ぎて、刹那がどれだけその人の事を慕っているのかがわかった。どれだけその人の事を信頼しているのかがわかってしまった。

それが、少し、羨ましくて。

「…せっちゃん、お会計、済ませて来ようか」
「ん？ あ、そうやね。行ってくるわ」

自分が、悔しい、だなんて思っているなんて認めたくなくて、「あの人」と刹那が呼ぶその影を少しでも遠ざけたくて、木乃香は歩を進めた。

＊ ＊ ＊

時刻は夕暮れ。刹那は人気の無い道を歩んでいた。木乃香の姿はなく、これは木乃香と別れた後の帰り道。刹那は何気なしに空を見上げた。空には空を行く鳥の姿が見えた。落ち行く日の光に照らされ、その光を追うように飛んでいく。

——もしも、君を受け居られない世界だと言うのなら、君が逆に
見捨ててやれば良い——

久しぶりに思い出す声。ああ、久しぶりに彼の名残を思い出して

しまっただろうか。

——もしも、この世界での生き甲斐が死ぬというのならば、死んだと思って私たちの元に来ると良い。何、君程度の「化物」など腐る程いる——

それは、今もこうしてあれる彼との「契約」。

——だから、生きると良い。君は望み、私のそれを望む。だが、君がまたそれを望むなら私はまたそれを望もう。我が異界の友よ。君のその翼を手折るには少々惜しいのでね——

だから。

——胸を張れ、刹那君。君の翼は誰よりも美しく純粋だ。それは誇って良いものだ——

その誓いがあるから。例えば、いつか此処に私の居場所が無くなったのだとしても。

「いつか、この心折れる時まで……」

——私は、誓いを果たそう。今の私を生かしているその誓いを。

第1章「彼女たちの学園生活」 04（前書き）

月詠に関してかなりの捏造設定が入ります。それでもよろしいという方はどうぞお進みください。

第1章「彼女たちの学園生活」 04

京都。昔の町並みが未だに色濃く残る関西の都、その中にその屋敷はあった。規模は広大、屋敷は豪邸。和の豪邸というべきその住居の一角、そこに一人の男性がいた。彼の手には手紙と大量の写真と映像を納めたDVD。

それをやや苦笑気味に見つめた後、読んでいた手紙を仕舞い、机の上に置いて男性は写真へと目を向けた。そこには角度的に盗撮なんじゃないか、と思ってしまう角度で撮られた少女の姿。

「…受け取っている私も私かもしれないが、彼女も大概になってしまったなあ」

苦笑気味に呟いた男性の名は近衛 詠春。その名字からもわかる通り、近衛 木乃香の実の父親である。彼は手の中にある刹那が撮影した写真を見ながら、木乃香は楽しそうに生活している事を感じて頬を緩める。

だが、中には明らかに「犯罪だろう」と思わずツツコミたくなるような写真があるが、それを見る度に苦笑が浮かび上がる。そうして、一度視線を写真から視線を外して、詠春は吐息を零した。

いつからだろう。才はあると思っていた。いつかは、やがていつかは自分を超えるだろうと思っていた幼き少女。予想はあったのだが、その成長はあまりにも早すぎた。彼女が麻帆良の地に送られたのは、確かに彼女の意向と彼女の奇行もあったのも事実。

だが、それだけではない。それだけではないのだ。彼女を京都に置いておけなくなった理由が存在する。それを思い出し、詠春は溜息を吐き出した。

「…才はあると思っていたが、まさかあそこまで成長を遂げるとは、私ですら予想していなかった」

彼女の成長速度は速かった。気づけば、いつの間にか師範と拮抗するだけの実力を得ていたのだ。それに驚いている間にも師範を倒すだけの実力を得ていた。そんな彼女を”鬼才”と呼ぶようになったのは必然だったのだろう。

そして、それがただの人ならば、またそれも受け入れられたのかもしれない。だが現実はそうではない。

「…忌み子、か」

重々しく呟かれその嘆きは誰にも届く事無く、ただ誰もいない詠春の執務室に消えていくのであった。

* * *

「刹那さんっていつも竹刀袋持ってるけど、別に剣道部って訳じゃないよね？」

昼休み。パックジュースをストローで吸い上げ、飲み干した後にアスナと一緒に食事を摂っていた刹那へと声をかけた。それに自作してきたという弁当を箸でつついていた刹那は一度、箸を止めてアスナを見た。

ちなみに昼休み、この食事時、刹那とアスナの他にも木乃香と真名の姿がそこにあった。何かとこの四人は連むようになっていたのはこの四人のそれぞれの関係性を考えれば自然な事だっただろう。アスナの疑問に対し、刹那は口の中にいれていたものを飲み込み、小さく頷きを返して。

「そうですね。私は別に剣道部、というわけではないですね」

「じゃあ、何で竹刀袋持ってるの？」

「お守り、みたいなものですよ。これはお嬢様のお父様から戴いた大切なものなので」

「え？ そうなん？」

初めて聞いた、と言うように木乃香は顔を上げて刹那を見た。それに刹那はそういえば言っていなかったか、と言うように表情を変えた。ふうん、とアスナは頷いて。

「へえ、それって木乃香のお父さんが使ってた竹刀とか？」

「いえ。真剣ですけど」

「――ぶーっ!？」

木乃香が飲んでいたお茶を吹き出す。その吹き出した先には真名がいて、真名の顔面に木乃香の吹いたお茶が吹き付けられ、真名が硬直する。それを見た刹那が目を見開いて叫んだ。

「お嬢様の吹き出したものをかけられるなんて……！！羨ましいな、真名……！！あれ？お嬢様、そんな笑顔で何ですか？え？歯、食いしばれ？こうですか？——へぶうつ……！」

「せっちゃんが、更正するまで、ぶつのを、止めない……！」

「……あの、龍宮さん、大丈夫？」

「……問題ない」

刹那の上に取り、マウントポジションを取った木乃香が全力で刹那の両頬を往復ビンタしまくるのを敢えて視線から外しつつ、アスナは真名へと心配げに問いかける。それに真名は眉を寄せた顰めっ面でうなり声のような声で返す。

そして刹那を殴り倒した木乃香が慌てた様子でハンカチを真名に差し出しながら謝っている。最早、土下座しかねない勢いだ。それに真名は気にするな、と返しつつもしっかりとハンカチで顔を拭う。

「……でも、真剣なんて持ってて良いの？」

「許可は貰っているさ。問題はない。……常に持ち歩くのはどうかと思うが、な」

「そういうお前もな、真名」

「……刹那さん、平気なの？」

「何。これもお嬢様の愛の鞭だと思えば、苦痛などある訳がない！」

「せっちゃん。大嫌いや」

「ごふっ!？」

「全然無事じゃなーいっ!？」

木乃香の一言に吐血し、倒れ伏す刹那。それにアスナはぎゃーつ、と絶叫する。木乃香は不機嫌そうに頬を膨らませて、真名はそんな三人の様子に小さく溜息を吐き出すのであった。

「せ、刹那さん、大丈夫?」

「…ぐふっ、アスナさん…もしも私に何かあったら、お嬢様の撮影は貴方に…」

「ごめん。断固断らせて貰うわ」

「ならば死ぬわけにはいかぬ!!!」

アスナへと遺言を託そうとしていた刹那だったが、アスナの無表情の拒絶に復活した。それに真名はしらけた目で刹那を見て、木乃香は冷たい眼差しで刹那を見ていた。その視線を直視とは言わずとも受けているアスナは居心地が悪そうに身を揺らして。

「刹那さん、剣道部に入部しないの? 真剣持つぐらいにまでやってるんだったら…」

「いいえ。私にその気はないですよ。入部などしたらお嬢様を撮影する時間が無くなりますし。何より、私自身が、きつと部活で上手くやっていけませんから」

「え? どうして、そんな上手くやっていけないって」

「…気にしないでください。ただ、私の性格上、無理だって話です」

そうして微笑む刹那の表情は、どこか空虚なものに見えてアスナは思わず息を呑むのであった。木乃香もそれは同じだったのか、アスナと似たり寄ったりの反応をしている。

ただ一人、真名だけが刹那をじっ、と見ていたが。だが、彼女はただ何も言わず、その視線を逸らすのであった。

＊
＊
＊

夜。

月が浮かぶ。月光が柔らかく麻帆良の町並みを照らしている。その麻帆良の町並みを巨大な世界樹の枝に乗りながら見つめる影があった。その影はその口元をにい、と歪めた。そう、それは笑みの形へと。

「ここが、麻帆良…」

熱を帯びたような声。それはまるで恋いこがれるようなそんな響

きを宿して。影は世界樹より飛び降りた。

＊ ＊ ＊

時折、襲撃してくる麻帆良への侵入者。刹那はその報せを受け、撃退に向かっていた所だった。その肩には竹刀袋が担がれている。そのまま疾走を続けながら、刹那は一度、齒軋りを鳴らした。

「お嬢様の成長記録の編集の邪魔立てするとは…余程私に斬られたいらしいな今日の侵入者共は！！」

刹那の表情は明らかに苛立ちに満ちていて、纏っている気配は怒気を孕んだものだ。今日も彼女の恒例となっている木乃香の映像や写真を悦に浸りながら編集していた所、侵入者の報せが入り、中断させられた刹那は実に怒っていた。

そのまま人気の無い森の方へと入っていき、侵入者が侵入したポイントへと向かう。木々をかき分け、枝を蹴りながら駆ける。

「――ッ!？」

が、その歩は止められた。刹那は枝を踏み、その勢いを殺しながらも、残した勢いを利用して跳躍。そして刹那の間を置いたその瞬間、刹那の蹴った枝が何者かによって切り落とされた。

刹那はそのまま木を蹴り、地へと着地しながらも竹刀袋に納めていた刀、夕風を抜く。それを構え、自らへと襲いかかった敵へと視線を向ける。

「うふふ…ようやっと会えましたなあ、刹那センパイ」

間延びしたような口調で話すのは自分と同年代と思わしき少女だった。纏う服はロリータ・ファッション。後は目を引くものは眼鏡と、その両手に握られた小太刀。浮かべている表情は嬉々としたもので刹那を見ている。

対する刹那は怪訝そうな顔だ。見知らぬ顔だ。知り合いにこのような人物がいた、という記憶はない。だが、誰かともわかつてはいなくてもこの少女が何者なのか、検討はついていた。

「…貴様、神鳴流剣士か」

「そうやで、”鬼才”にして”忌み子”の刹那センパイ」

「…ほう…鬼才はともかく、私をその名で呼ぶか。——死にたいのか？」

刹那の全身から殺気が放たれる。それは目の前の少女へと叩き付けられるが、それを少女は嬉々として受け止めている。狂気すら見

え隠れするその仕草に刹那は目を細める。

「ああ、ええ殺気やなあ、わざわざお家を出た価値があったわあ……」
「……何？」

「改めて、名乗りまひようかあ。月詠といいます。あんさんと死合いに来ましたわー」

名乗りを上げた少女―月詠―から放たれるのは、その間延びした口調とは異なる禍々しいまでの殺気。それが刹那の純粹な殺気とぶつかり合い、空気が震え出す。それに、ほう、と刹那は吐息と共に一言漏らして。

「……お前が何流の剣士であろうと、ああ、何。やる事は一つだ。そう、――私の首を取ると言ったか？ 貴様ごときにやる程、この首は安くはないぞ？」

「うちの剣がそこまで安いか、是非確かめ合いましょうやあ、センパイ……！」

今宵、二つの剣が噛み合う。その牙を持ってして相手の喉元を喰らわんとするように。

* * *

何もかもが愛おしく感じるまでに鋭く、疾く、殺意を乗せて振るわれる。

それが月詠の体を震わせる。ああ、興奮している。このまま昇天してしまいうなまでに心が昂ぶっていて、体も満ち足りている。刹那の刀を受け止める度に、それすらも全てが快樂に変わってしまいうなまでだ。

「これほどまで、これほどまでに！ 鬼才と言われるだけではありません。すなあ、センパイッ！！」

疾く、鋭く、その剣閃は確かに月詠の体を斬り刻まんと迫る。その全てをいなす為に小太刀を際限なく振るう。手数では小太刀である自分が上。なのに月詠は攻める事が出来ずにいる。

それ程までに重い。一つ間違えれば一気に小太刀ごと自らの体を切り捨ててしまうのではないか、と言うまでに。ぞくぞく、と背筋に怖気にも似た感覚が走る。それが、月詠の体の火照りを加速させていく。

「アアアアアアアアアアアアアアアアアツツ!!!」

歡喜の悲鳴。それを上げながら月詠が攻勢へと転じようとするもその全てを刹那が全てを塞ぐ。小太刀を持つ手に震えが走り、一度、月詠は刹那から距離を取る為に勢いよく刹那を押し返す。

そのままステップを踏み、再度刹那へと迫る。今度は月詠が攻めに入った。月詠の連撃を刹那は刀で打ち払い、時に小太刀の柄を蹴り上げ、月詠の剣戟を捌ききっていく。それに笑みを深めながらも

月詠は刹那に追い継る。

「末席でありながらも！ その実力は既に師範を超え！ 神鳴流の中でも才溢れ、神童と称されてもおかしくなかった！」

「――」

「けど、そうは呼ばれへんかった。何故ならセンパイは――」
「――べらべらと」

刹那が歯を噛む。月詠の一撃を受け止め、そのまま逆に押し返してみせる。おおっ、と月詠が声を挙げて下がる。それを逃がさないと言わんばかりに刹那は前へと踏み込んだ。

踏み出しの一步は大地を震わせるまでに重く、自らの身体能力を向上させている「氣」を練り上げる。それを呼び水に刀身に電気を呼び寄せる。帯電した刀に気を吹き込み、それを一気に吐き出すように。

「やかましい――ッ！！！！」

――神鳴流ヶ奥義”雷鳴剣”。

その一撃は、大地を割る程までに強力で月詠もその衝撃に堪えきれずに後方へと吹き飛ばされる。だが、その結果に刹那は舌打ちをした。手応えが無いからだ。つまり、月詠には防がれたのだと刹那は理解した。現に月詠はすぐさま刹那を狙って小太刀を振るってきた。

「純粋な身体能力、気の練り込みの速度に、才気溢れる剣閃、それが在ろうとも受け入れられなかったのは——センパイが「化物」やからなあ」

「——」

「センパイは、”混じりモン”やもん——」

な、と。月詠が声を続けようとした瞬間、月詠に対して刹那は斬りかかっていた。その表情は能面のように揺らぐ事はない。

だが、それとは反比例するようにその剣閃は鋭さを増していく。それを受けながらも、月詠は笑みを深めながら叫ぶように言葉を続けた。

「人間やないもんなあっ！！ センパイはあっ！！ バケモノやあっ！！ なあ、”烏族”とのハーフ様あっ！！」

「——貴様」

「気分はどうやった！？ 自身の功績を認められず、ただその内に流れる血がバケモノやっというだけで疎まれ、蔑まれた日々は！！！ せやのに、ああっ！！」

小太刀を交差させ、刹那の上段からの刀を受け止めながら月詠は刹那を見つめる。刀の噛み合う不快な音も気にならない、というように。

「——何で、こんなに綺麗で、純粋な刃なんですかあ、センパイア イッ！！」

月詠は小太刀を振り抜いた。受け止めていた刹那の刀をはじき飛ばし、再び剣戟の音を奏でる。

響き合う剣戟を耳にしながらも月詠は問う。そんな歪んだ人生を歩みながらも、どうしてこんなに純粹で美しいと思う剣を振るえるのか、と。

刀に思いを乗せ振るう。何故、と問うように。どうして、と問うように。その答えを問うように月詠は刀を振るい――。

「――だから、言っただろう。その安っぽい剣で私の首を取れると思うな、と」

――呆気なく、右腕を切り裂かれていた。

は？ と。月詠の思考は一度そこで止まる。だが、首を傾げる暇はなく、ただ生存本能に従って後ろへと引く。手の甲から肘の下まで一文字に引く傷。そこから血が噴き出し、月詠はそれが何故なのか理解出来ず。

「――ッ、ツアアアアアアアアアアアッ!?!?!」

スパークする。痛い、痛い、と。熱い、熱い、と。腕の痛みがまるで体全体を浸食していくような感覚に月詠は身を丸めるようにして右腕を押さえた。血は止まらない。痛みに歯を食いしばりながらも、月詠は顔を上げ、眼前に立つ刹那を睨み付けた。

「何をしたか？　という顔だな。なに、私の恩人から教えられた技法でな。”歩法”という」

「…”歩法”、やて…？」

「何。簡単な話だ。お前に気づかれない程度にお前の認識から”ズレた”だけだ。呼吸、踏み込み、鼓動、聴覚、知覚するその全ての一つ一つのタイミングからズレたんだ。些細であろうとも、その隙を積み重ねれば知覚される事無く相手の懐に入る事が出来るという訳だ」

「んな…でたらめ…な…！　ウチの動きを見切ったと言うんか…！？」

「いいや。お前は速い。全てなんて見切れん。——だが、お前の剣が正直なだけだ」

「は…？」

啞然とする月詠に対し、刹那は肩を竦めるようにして見せた後、吐息と共に吐き出した。

「お前は、私のような”バケモノ”にはなれん」

「——」

「純粹である事は悪だとは言えないさ。そもそもバケモノだから悪だと言う訳でもないだろう。お前の修練も、お前の才能も、誰に認められずとも、誰からも受け入れられずとも、それがどれだけ常人

を逸脱しようとも、お前は所詮、人の延長線上にしかない」

刹那の言葉に、月詠は立ち上がる。腕の痛みを忘れたように月詠は刹那へと斬りかかった。

月詠は左腕に握った小太刀で刹那へと斬りかかる。動かない右手を引きずるようにしながらも刹那へと迫る。

「無駄だ。お前は私を理解出来ない。私もお前を理解しようとは思わん。——だから、お前は私には勝てない。私はお前よりも、強い」

今度は、左手に握っていた小太刀を叩き斬られた。それでもまだ足が残っている、と蹴りを刹那へと叩き込もうとして、その足を大地に叩き付けられ、折られた。そのまま力を失って大地に倒れ込み、息を荒くしながらも刹那を睨み付ける。

「…こんな…戦いに享楽を見いだす…狂人でも…センパイはうちを人と言うんか…!？」

「戯け。狂人には漢字に人が入っているだろう。お前がどれだけ社会に馴染めない、人の輪に入れない、常人よりも逸脱した異常者だとして、だからお前が人ではないという証明になるか？ お前の周囲がどれだけお前をバケモノと扱おうとも、私から見れば少し外れただけの人間だ」

「……な…」

「もう一度言ってる。——お前は、人間だよ。どこまで行っても、どれだけ逸脱していようが、その涙がその証明だろう？」

「…あ…?」

泣いて？ 月詠は左手で頬に触れて、自らの瞳から流れるものに気づいた。それに気づいて。

「才能は私よりもあるだろう。それに見合うだけの修練も積んでい
る。——見事だったよ、月詠」

それは、嘘偽りない賞賛の言葉。それが、月詠を啞然とさせた。
それが心に響く。まるで反響するようにその言葉は何度も月詠の中
で繰り返されて。

「あ……ッ…、っ、…っア————ッッッッッ！！！！！！」

泣いた。泣いていた。泣き喚くように一人の少女が泣いていた。
声を張り上げて、月に向かって吼えるように泣いていた。

それを見下ろすのは一人。刹那はただ、瞳をそっと伏せて手に握
っていた刀を鞘へと収めるのであった。

＊
＊
＊

『長。このような形でのご対面、申し訳ありません』

「気にしないでください。刹那君。：月詠君の件に関してはこちらでも把握しました」

京都の近衛宅。詠春は自身の執務室にいた。耳に当てた電話越しに聞こえてくる声に、詠春は穏やかに返答を返す。その相手は刹那だ。刹那の言葉にいつも通り、と思い、思わず頬を緩ませる。だが、それも一瞬。すぐに詠春は顔を引き締めた。

『：そうですか。やはり、彼女は？』

「ええ。：彼女の才能は君と同格、もしくはそれ以上でしょう。何せ、見ただけで”斬魔剣・弐の太刀”を体得出来るだけの才能を持っています」

『長。私のような末席ごときが弐の太刀など扱える訳がありません。純粋な才能だけで言えば月詠が上でしょう』

「神鳴流、という枠に収めれば、ですがね。ですが、それが仇となつてしまいましたね」

『やはり、彼女は疎まれていましたか』

電話越しなのにも関わらず、詠春は頷いていた。刹那が月詠を鎮圧した後、報告を受けた詠春は月詠の経歴が洗っていた。彼女は詠春の実家である青山の分家の娘として誕生。そして習わしとして神鳴流を学ぶも、その才能を幼少の頃より見せつけてきたという。

詠春も耳に挟む程度の噂は広まっていた。その実力は当時、噂に

なっていた刹那と同格と言っても過言では無かった。だが、逆にそれが仇となってしまった。

『少なからず、私の影響もあるのでしようね。私のような混じり物が騒がれていた頃に、私と同格と謳われたのならば、人として扱われない』

「それは刹那君の考えすぎです。…過ぎたる才能は時に自らをも傷つける刃、となるという所でしょうか。彼女の才能には両親すらも畏怖を抱いていたようですからね…」

『…絶縁状を叩き付けた、らしき話はこちらでも伺っておりますが…』

「…はい。残念ながらこちらでもそのような話になっています。処分しようにも、彼女はまだ幼い…彼女の環境を考慮すれば、このまま罰則を与えるというのは酷でしょう」

むむむ、と詠春はうなり声をあげる。このまま罰するには、月詠が歩んできた道はあまりにも過酷で、あまりにも不幸だ。

『…それなのですが、長。学園長の提案なのですが――』

＊ ＊ ＊

遠い、夢を見ている。

自分の家は剣術の一家だった。血筋代々受け継がれるその剣を自分も受け継ぐ。当たり前のようにそれを受け入れていた。だって、それを両親が望んでいたから。

最初は、どうして剣を握ったのか。そんな懐かしい夢。掘り起こすように、この色あせた記憶の色を思い出していく。

——いつか、ウチも——

ああ、そんな。そんな小さな願いからやったか。その姿が余にも格好良くて、それがとても大切な物だと教えられたから、なら自分にとってもそれは大事なものになって、そう思えば両親と同じになれると信じていて。

だから練習した。だから必死に見て、それを会得しようとして必死になっていただけ。ただ、それだけだったのに。

いつから、私は——そんな願いを忘れるまでに…こんなに、歪んで…。

「…う…?」

「——目が覚めたか？」

意識が浮上してくる。懐かしい夢の残滓は消え失せ、ただ開けた視界は曇っている。眼鏡が無ければぼやけたままの視界、思わず癖

で眼鏡を探して手を這わせる。その動作に気づいたのか、傍らに誰かがいたのかにようやく気づいて。

その誰かが眼鏡を渡してくれた。それをかけてようやくその顔が見えた。そこにいたのは椅子に座ってこちらを見下ろしている刹那の姿があつて。

「…センパイ…?」

「ああ。気分はどうだ? 傷は完全には直してはいないし、身体になども大分枷はかけさせて貰っているがな」

「…あはは…ほんまや、全身、痛いし、重いわ…」

「それは結構。そう言えるという事はお前は正常だ。良かったな」

「…良くないわ、これじゃ、碌にご飯も食べれへんわあ…」

「…気の抜ける奴だな。まあ、いい。それでだ、月詠」

「なんどすか?」

ふう、と吐息を吐き出しながら刹那は呆れる。だが、意識を切り替えるように一度頷いてから月詠へと視線を合わせる。

「これからどうしたい?」

「…どうしたい、って…ウチどうされるんですか?」

「お前の両親は、「お前なんぞ知らん」だそうだ」

「…まあ、家出娘なんかに情がわく程の出来た親でもないどすし」

「と、言う訳でお前は現状、捨て子、と言っても良い。——そこで長がお前の事を引き取っても良いそうだ」

「……は?」

まるで予想外の事を聞いた、というように月詠は目を見開いて刹那へと目を向けて。

「何。「将来に伸びるであろう才をここで潰すのは勿体ない」と、な。お前さえ良ければ、という話だが、養子組の話は用意してあるそうだ」

「――」

「ただし、条件は付くがな」

「条件…?」

「このまま此処、「麻帆良学園にて教育を受ける」事。そしてまともな一般常識など学んでこい、とき。ちなみに監視役は私で、お前には色々と制約も付くがな」

「…それって」

「普通の人間として生きろ、という事だろう。お前の才能があれば何、2、3年は遊んで暮らしても、錆び付いた所ですぐに取り戻せる。まったく、嫌味な才能だな」

月詠は刹那に話される内容に、ただ啞然とする事しか出来ない。だが、暫くすると、月詠は肩を震わせ始めた。それに刹那が視線を向けると、月詠は刹那に顔を背けるようにしていて。

「……………何でや?」

「何で?」

「センパイやろ? ウチの処分に口添えしたの」

「ああ。否定はしない。嫌だったか?」

「何でや…?」

「言った筈だ。私とて神鳴流の剣士。我が流派が栄えるならそれに

越した事はない。私は別に一番強くなりたい、という訳でもないしな。強くなれる奴がなれば良い。お前ならそれが出来ると思ったから口添えしたただけだ」

「……ウチに、そんな気が無くとも、か？」

「そんなの個人の勝手だろう。私はそう思っても、お前の考えも違うだろうし、他の神鳴流の剣士だって違うだろう。——だからどうした、だがな」

他者の意見などどうでも良い、と言わんばかりに刹那は言い切った。それに、月詠は刹那から背けていた顔を刹那へと向けて。

「センパイ、責任、感じてる？」

「……何がだ？」

「ウチの事、確かにセンパイが絡んでるのも、無いとは、言いませんよ？ でも……センパイが居てくれたから、ウチはセンパイを目指せた。何も目指すモンがなかったら……ウチ、もっと、壊れてたかもしれへん。おかしくならなかったら、今まで頑張ってきたモンが、全部無駄やって、あんなに綺麗に思うたものが、意味がないなんて思っ、て、なんか本当におかしくなりそうな気がするわ。……だからな、センパイ」

「……なんだ？」

「……受け止めてくれて、ありがとうございます」

そう言っ、て、月詠は微笑んで見せた。その表情に刹那は少し、呆気取られたような表情を浮かべた後、力を抜いたように微笑を浮かべて。

「寝ると良い。まだ体も回復してないだろう。話はそれからでも遅くはない」

「…せやなー…じゃあ、遠慮無く眠らせてもらいますわ…」

そうして、月詠は眼鏡を外そうとして、あ、と声を漏らした。

「…あの、センパイ？」

「何だ？」

「…寝るまで、そこにいてくれますか？」

「…いるだけでいいのか？」

「はい。そこにいてくれるだけでええんです…」

「…まあ、良いだろう」

「おおきにー…」

そうして月詠は眼鏡を外し、ふう、と体の力を抜いてベッドの温もりに身を預けた。そして、瞳を閉じるその直前。

「おやすみ、月詠」

「——おやすみ、センパイ」

刹那の声が聞こえた。それがどうしようもなく、胸が熱くなって、口元が緩むのを感じながら月詠は安らかにその瞳を伏せるのであった。

第1章「彼女たちの学園生活」 05

月が浮かぶ。僅かに欠けた月の下、その影はいた。

闇夜に紛れるように黒く、されど月光を受けて輝きを帯びるのは金色の髪。宙に浮かぶのは童姿。闇に紛れたその姿の表情は見えない。だが、小さな、それは本当に小さな音だった。

「…ああ」

漏らした吐息に混じった声は何を込めたものか。それは落胆とも取れる。それは失望とも取れる。それは、明らかに不愉快なものだった。だから先程漏らした音は舌打ちだと言うのならそれらもまた納得。

——気に入らんな。

影は空を見上げる。月が満ちていく。だが、その月が円を描くのには、まだ時間がかかる…。

＊ ＊ ＊

「お嬢様、用事がありますので失礼しますね」

「え？　また？」

学校が終わる音と共に席を立ち、いつも通りに鞆と竹刀袋を背負った刹那が木乃香へと声をかける。それに木乃香はそんな言葉を漏らした。そう、最近、刹那は放課後になると用事がある、と言ってどこかへと行くのだ。

以前はそういった事が無かった、と言う訳ではなかったが、ここまで頻繁なのは初めてであった。故に木乃香がそう刹那に言ったのは特段、不思議な事ではないだろう。

「用事って…せつちゃん、最近何かしてるん？」

「いえ、ちょっと。私用でして。では、急ぎますので」

そう言い残し、そそくさと刹那は教室を後にした。その背を木乃香は怪しむように見送る。そんな木乃香に気づいたのか、アスナが木乃香の方へと寄ってきて木乃香へと声をかけた。

「木乃香？　どうかしたの？」

「うーん、なんかせつちゃんがまたよからぬ事してるんじゃないかと…」

「……うーん、刹那さんだしね。真名さーん、何か知らない？」

「さてな。私は知らんよ。アイツは最近は寮に戻ってくるのも遅いな」

荷物を整理していた真名を見つけ、アスナが声をかけてくるも真名から帰ってきた答えは乏しくない。アスナと木乃香は互いに顔を見合わせて唸る。あの木乃香至上主義である刹那がこうも木乃香から離れる期間を長く置くという事は、だ。

「「絶対良からぬ事をしてる」」

「……………否定できないのが嘆く所なのか、哀れむ所なのか…」

木乃香とアスナの声がぴったりと重なり、それを聞いていた真名は口元に苦笑を浮かべつつも、否定はしないのであった。

「という訳で！ 尾行や、アスナ、真名！」

「了解！」

「…あれ？ 私まで含まれてる？ いや、木乃香、私は帰…」

「尾行や、真名！」

「…だから、私は帰」

「尾行や、真名！」

「……………OK、了解だ、近衛嬢」

満面の笑顔の木乃香に押し切られ、はぁ、と疲れたように真名の吐息が零れるのであった。こうして、木乃香、アスナ、真名による刹那の尾行が始まるのであった。

＊ ＊ ＊

すぐさま刹那の後を追った三人。刹那の姿は幸いにもすぐに見つけられ、彼女の後ろを電柱の影などに隠れながら追いかけていく。刹那がまず足を向けたのは学校から最寄りのスーパーであった。

「スーパー？ 何の用があるんやろ？」

「さあ？」

「…む、卵が安売りしているな。お一人様、1パックまでか。木乃香、アスナ、買うのに協力してくれ」

「真名、そんな事してる場合じゃ…」

「…そんな事、だと…？」

「…アスナ、1パック確保ー」

「い、いえっさー」

刹那の行く先に首を傾げる二人を余所に卵の安売りに目を惹かれる真名に木乃香は抗議しようとするも、真名の眼光に危ないものが見え隠れしていたのに気づいてあっさりとその手に卵を手取るのであった。

そのまま刹那の行く先を追跡すると、刹那は幾つか果物を買っているのが見えた。それを片手に刹那はスーパーを後にする。同じく卵の会計を終えた三人もその後を追うようにスーパーを出て。

「果物なんかどうするんやろ？」

「普通に、食べるとか？　そこまで量があつた訳じゃないし…」

うーん、と唸りながらもアスナと木乃香は追跡を続けていく。その背後で「ふむ、これで食費の節約が…」とぶつぶつ呟きながらも家計簿をつけている真名を引き連れて。

そうして、刹那を追っていった先、三人が辿り着いたのは……。

＊ ＊ ＊

「入るぞ、月詠」

「あ、センパイいらっしやーい」

ドアをノックする事、三回。刹那が足を踏み入れたのは麻帆良にある病院の一つ。その病室のベッドで横になっているのは月詠だ。

彼女は刹那の声を聞いた瞬間にその表情を笑みに変えた。

そしてそばに置いてあった眼鏡を手に取り、手を伸ばすが、それよりも先に刹那が眼鏡を手に取り、月詠に手渡す。眼鏡をつけ、刹那の姿を確認して。

「おおきに、センパイ」

「気にするな。体の具合は良いか？」

病室に備えられていた椅子を引き寄せ、月詠の横に座るように刹那は陣取る。そのまま月詠に体の調子を伺う。それに月詠は少し悩むようにした後、刹那を見て。

「んー、大分良くなりましたよー、まだ退院は出来へんけど。右腕はまだ動かし辛いし、足はまだ折れたままやし」

「後はリハビリもあるからな。時間はかかるだろう。気を封じられたからには無意識にしていた肉体への強化が無くなるからな。前のようにはいかないだろう」

「あー、それもあるんかなー、なんや体がだるい気がしてなー」

そう、今の月詠は気を封じられた状態だ。麻帆良に滞在し、学生として暮らす為に月詠出された条件というのは気の封印であった。気は、超常的な力を発揮する為の力でもあり、刹那自身も使っている力でもある。神鳴流剣士ならば誰でも扱えるといっても過言ではない。

修練によって使える気だが、希に才能あるものが厳しい修練の下で覚醒する事もあるそうだが、これは余談。月詠はその気を封じら

れた事によってその身体能力は格段に下がっているのだ。

「それは寝過ぎだろう。ただのな」

「あはは、寝たきりの病人にどないせいって言うんやー」

月詠が笑う。それは心底おかしそうに、楽しむようにクスクスと。それを見て刹那は微笑ましそうに月詠を見た後、先程スーパーで買ってきた果物を取り出し、懷から果物ナイフを取り出した。

「まあ、良い。果物、買ってきたが食べるか？」

「勿論ー」

＊
＊
＊

「…え？ 何、コレ？ 何なん？ コレ」

「いや、見舞い、だよね？」

「…そうだろうな」

そんな二人の様子を覗いていた木乃香は思わず呟く。その木乃香の下になるように覗いていたアスナはそんな木乃香の様子に少し首を傾げつつも、自分の意見を口にする。それに同意するように覗かずに壁に背を預ける真名は頷いて。

「センパイ、あーんして、腕動かんのやー」

「…嘘つけ、ったく。まあ、良いか、ほら、口を開けろ」

「あーんって言うてくれへんといややー」

「…ほら、あーん」

「あーん」

ミシッ、と。アスナは思わずその異音に顔を上げた。そして見たのは能面のように表情を消した木乃香だった。異音の原因は木乃香が手を添えている扉の取っ手だった。

いや、ちょっと待とう、とアスナは冷や汗が背中に吹き出るのを感じつつも冷静に思考する。刹那と木乃香は幼馴染みだが、刹那の奇行及び普段の態度からああいう態度は刹那は木乃香には取らない。見ていて思ったが、刹那の表情はどこか気を抜いたような、更に口調も砕けていて二人が親しい仲なのだと見受けられる。それを見ていた親友の反応…。

（ま、まさか、これって修羅場ーっ！？）

思わずアスナは助けを求めるように真名の方へと視線を向けたが、そこに真名の姿は無かった。

（に、逃げたーっ！？ 私、逃げ損なったー！！）

アスナが慌てふためくこの間にも、みしみしと音はだんだんと強くなっていく。それに、中の刹那が気づいたのか、扉の方へと歩み寄ってくる音がして。

アスナが逃げようとしたのも時既に遅く、中から勢いよく扉が開かれた。

「誰だっ！？ ……って、お嬢様に、アスナさん…？」

最初は厳しい目つきだった刹那も、二人の姿を見て呆気取られる。それに、能面のような表情だった木乃香はにっこりと笑みを浮かべだした。それに、刹那は思わず一歩後ずさった。その間にアスナは全力で後ずさり、退避を謀っていた。

「…せっちゃん？」

「あ、あの？ お、お嬢様？ な、何故、ここに？」

「せっちゃん？」

「は、はいっ！」

「…誰、その子？ 随分と仲良しさんやね」

ニコニコと、木乃香は笑みを浮かべたまま刹那の方へと歩み寄っていく。刹那は木乃香が歩み寄ってくる度に一歩、また一歩と後ろに下がり、病室へと戻されていく。

刹那の額にはだらだら、と汗が浮かんでいる。その木乃香の気配を直接向けられていないアスナでさえ体が震えてきそうになるのに、それを真っ向から受けている刹那の状態は押して知るべし。

「おやまー、誰かと思えば、姉君やないですかー」

「…へ？」

「な…!？」

だが、その空気を壊したのは月詠だった。こちらはにやにやと笑みを浮かべて木乃香を見て、そして彼女に対して姉君、と言ったのだ。それに場の空気は一気に月詠の主導権へと変わる。

木乃香は何を言われたかさっぱりわからず、刹那は何を言い出すのか、と驚きに満ちた表情で月詠を見ていた。アスナは何が起きているのかさっぱりわからずに全員の顔を見回す事しか出来ない。

「どーも。近衛 月詠と言います。おはつにー」

「…え？　せっちゃん、どういう事？　え？　父様の隠し子…？」

「ち、ちちちち、違います！！　彼女は詠春様の養子でして…だから電話を手を取っちゃいけません！　病室での通話は禁止ですっ！！　詠春様はそんなお方ではありませんから！！」

目から光が失われた木乃香がそのまま虚ろな様子で携帯電話に手をかけ、電話帳から誰かの名前を呼び出し通話しようとしている。それを刹那が必死に食い止め、通話ボタンを全力で切る。

そんな刹那と木乃香の様子をやはりにやにやと笑みを浮かべながら月詠が木乃香へと声をかけた。

「まあ、そういうことですよ。センパイとは仲良くさせてもらってますー、お互い知ったる仲ですから。ねー、センパイ」

「つ、月詠！　どういうつもりだ！？」

「どういうつもりも何も、ウチの姉に挨拶しているだけですよ？」

刹那が月詠の意図を読み取れずに困惑した様子で月詠に問いかける。それに、月詠は何を言っているのか、と言わんばかりに刹那に言う。

「…まあ、そういう訳でいきなりで戸惑うかもしれへんけど、そういう事なんで、姉君。よろしゅうな」

「あ、う、うん…よろしゅう、って…えと、色々とその、ありすぎて…」

「お、お嬢様、しっかり！」

思わず頭を抱える木乃香に刹那がすぐに駆け寄る。それを見た月詠の瞳が一瞬、細まるのをアスナは見た。見てしまったのだった。

（や、やっぱり修羅場なの、これー！？　何なのよもうーっ！？
　　ってか逃げた龍宮さん後で覚えてなさいよーっ！！）

＊ ＊ ＊

こうして月詠と木乃香が出会い、それから少しした後の事、アスナが修羅場だ、と恐れ戦いていた病室は…。

「へー、お家の事情とか、色々あったんやなー、月詠ちゃん」

「ウチとしてはそんな苦でもなかったんですけども、でも今、お姉と話せて楽しいで？」

「そうか？ えへへ、うち、お姉ちゃんかあ」

和氣藹々としていた。先程まで刹那が座っていた椅子に座って、月詠と木乃香は仲良さそうに話していた。話し出すまでには木乃香の方はぎこちなかったが、月詠が進んで刹那を話題にする為に、それに木乃香が自然とぎこちなさも取れ、今に至る。

それを壁に背を預けて見ていた刹那はどこか安堵したように吐息を吐き出した。同じくアスナも溜息を吐き出した。修羅場だと思っていた空間がこうした和む場所に変わったのは本当に助かった、と。

「あ、センパイー、いっぱい話したから飲み物欲しいんやけどー」
「飲み物？ ああ、そうだな。お嬢様もいらいますか？ アスナさんも」

「そうやねー、じゃあお願いしてもええか？ セっちゃん」

「刹那さん、私も一緒に行くわよ？」

「一人でも大丈夫ですよ。アスナさんはお嬢様と一緒に。では行つてきます、お金は後で良いですから」

そう言つて、刹那は病室を後にした。ソレを見送つた後、月詠はふう、と吐息を吐き出してベッドに身を沈ませるように力を抜いて。

「あ、月詠ちゃん、疲れたんか？ 怪我、してるみたいやし、なんやしんどかったら言つてや？」

「それは大丈夫やで。…ああ、本当に、センパイはお人好しやなあ」

「お人好し、じゃなくて優しいんよ、せっちゃんは」

「そうどすなあ。…なあ、お姉？」

「ん？」

「…お姉は、センパイの事、どれだけ知つとるんどすか？」

「え…？」

唐突な問いに、木乃香は思わず声を漏らす。それは、と言いかけて、木乃香は思った。意外と思い直せば、自分が知っている刹那の事など数える程にしか無い、という事に。

そんな木乃香の様子に、月詠は瞳を閉ざした。重たく吐き出された吐息が何故か病室の空気を重くしているように感じて、アスナは思わず月詠の様子を伺うように声をかけた。

「…月詠、ちゃん？」

「…知りたくないどすか？ あの人の抱える秘密」

「せっちゃんの、秘密？」

アスナの声かけに対する答えなのか、それとも木乃香へと向けたもののなのか。その言葉は月詠の口から紡がれる。それと共に月詠の瞳が薄く開かれ、木乃香を見据える。それに木乃香は、ぞく、と言
いような無い寒気を感じた。

刹那の秘密、という言葉が嫌に心臓を跳ねさせる。予感めいたものがある。それは、聞いてはいけないものだ。そもそも刹那が自分に隠しているならば、本人から打ち明けられなければ聞いてはいけないものだ、と。

そう、思っている筈なのに。おかしい、と思う程までに。それは――知らないければならないと感じてしまうのは。

「…ええご身分やね。本当に。だからそんなにええ人なんですわ、お姉。本当にうち、そう思いますで？　好きになれそう、って思ったわ。せやけど、ウチ、きつと…」

――お姉の事、やっぱり嫌いやわ。

＊
＊
＊

「…む、もう暗くなってきたか。話し込み過ぎたか…」

ふと気がつけば、すでに街頭の灯りが灯っているのを刹那は見た。病室での木乃香と月詠の慣れ始めには肝を冷やしたものだだったが、何かと上手くやっていけているように見えたので安堵していた。

「…しかし、ちびせつなめ…。お嬢様が尾行していたら知らせてくれても良い物を…余計な機能を付けすぎたか」

思々しそうに刹那は思い出したように呟いた。ちびせつな、と言うのは彼女が木乃香の護衛及び成長記録を残す為に用意した式神だ。昔は自分の意志を受けて動くものであったが、改良に改良を重ねた結果、自立機動が可能となった。

思考は刹那と同じなので、彼女に撮影などを専念させていたのだが、逆にそれが裏目に出たか、と思わず齒軋りをして。そうして苛々としていた刹那であったが、ジュースをねだってきた月詠の顔を思い出し、待たせると不味いか、と月詠の病室へと戻ろうと歩を進めようとした時だった。

「――失礼。桜咲 刹那さんですね？」
「？ …貴方は…」

不意に、呼び止められた。その声に刹那は軽い驚きと共に振り返った。そこに居たのは…。

「…絡繰 茶々丸、さん？」

そこには、自分のクラスメイトの姿があった。長い髪に、所々にロボのように見えるパーツが見えている。纏っているのは制服のままだ。何故彼女がここに？ と、その事に刹那は疑問を挟めずにはいられない。何故、ここに茶々丸がいるのか、と。

「――少々、お話をよろしいでしょうか？」

第1章「彼女たちの学園生活」 06

刹那が月詠の病室に戻る。その手には三人分のジュースがある。それを両手で抱えつつ、病室へと入ると、どうにも空気が重かった。月詠も、木乃香も、アスナも誰もが口を開いていない。

それに少し疑念を思うが、それどころではないな、と刹那は三人へと声をかける事にした。それによりやく三人が気づいたのか、月詠が笑みを浮かべて刹那を迎え入れた。だが木乃香とアスナの反応がいまいちだ。

それに刹那はやはりおかしいな、と思いつつも病室の奥へと進んでいく。

「おかえりー、センパイ」

「ただいま。ああ、月詠。悪いな、ちょっと用事が入ったから私は行かなければならなかった」

「ふーん？ そうなんですか？」

「ああ。それではお嬢様、アスナさん、私はこれで…」

三人分のジュースを月詠のベッドに備え付けてあったテーブルの上に置きながら刹那は月詠に言う。それに月詠は何でもないように刹那へと聞き返す。それに刹那は頷きと共に返事を月詠へと返し、そのまま木乃香とアスナにも挨拶をして病室を後にしようとする。

だがその刹那の歩みは止められる事となった。刹那の動きを止めたのは、自分の手を引く誰かの手の存在。刹那がそれに驚きながらもその手の人物を見ようと振り向いた。

「…せっちゃん？」

「？ お嬢、様？」

手を引いていたのは木乃香だった。それを確認するのと同時に驚いた。自分の名を呼ぶ木乃香の声はどこか不安げだ。木乃香が浮かべている表情でさえ不安げに歪んでいて、何故そんな顔をしているのか、疑問にさえ思うほどだ。

一体自分がいない間に何があったのか、先程病室を出る前まではあんなにも楽しそうにしていた木乃香がそんな表情を浮かべているものだから、刹那も困惑する事しか出来ずに木乃香の顔を見つめる。その間にも、木乃香は眉を寄せるように表情を変えて刹那を真っ直ぐに見つめながら問いかけを投げかけた。

「どこ、行くん？」

「知人の所へ行ってくるだけですよ？」

「…誰の所？ ウチの知ってる人？」

いつの間にか、刹那の手を引いていた木乃香の手の力が強くなっているのに刹那は気づく。やはり先程からどうにも様子がおかしい、と刹那は木乃香の顔を覗き込むように見る。そして問いかけを投げかける。

「…お嬢様？ 何かあったのですか？」

「…あ…」

それに、木乃香が正気に戻ったように表情を変える。そして自分の手が刹那の手を握っている事に気づいて、それを慌ててを離し、わたわたと手をばたつかせる。そうして刹那と距離を取り、壁に背を預けてようやく落ち着いたのか、木乃香は両手を突き出すように前に出し、首をぶんぶんと振って。

「な、何でもない！ 何でもあらへんから！」

「…は、はあ…？ でも、その、いつもと様子が違ったようでしたけど…？」

「そ、それは…、つ、月詠ちゃんが！」

「…月詠が？」

「そ、そう！ 月詠ちゃんからせつちゃんの悪逆非道の数々は聞いたんやからな！！！」

「な…！？ 月詠！？ 貴様！？」

木乃香の言葉に、何を言った！？ と言わんばかりに刹那は月詠を睨み付けた。それに月詠は口笛を吹きながら視線を逸らした。本当の事は言っていないだろうが、在らぬ事で自分の人間性を疑われては堪らない、と刹那は一つ、頷いて。

「お嬢様、私はそのような悪逆非道な行いなどしておりません！」

「…私だけの良いなら、肖像権の侵害、プライバシーの侵害、余罪はまだありそうやけど？」

「…否定出来ない！？」

「出来て堪るかーっ！！」

木乃香の冷え切った声に刹那は顎に手を当て、考える事暫し、目を見開いて叫ぶ。それにアスナが掃いていたスリッパを手にとって刹那の頭をどついた。

その自分の行動にアスナは気まずそうに顔を歪めて、刹那から距離を取った。それに月詠がクスクスと笑い出し、そんな月詠を刹那はギロリ、と鋭い眼光で睨み付けて。

「と、ともかく！ ……せやから、せっちゃんがまた、何かしでかすのかと、思うて…」

「…お嬢様。私がどこかに出る度にトラブルを巻き起こすと？ それは心外です！」

「…どの口が言うんや、どの口が」

ジト目で刹那を睨む木乃香に、刹那はふう、と息を吐き出す。そうした後、刹那は木乃香の方へと歩み寄って、その肩を叩いて笑みを浮かべる。

「大丈夫ですよ。少し、真面目な話があるだけですから。お嬢様は何も気にならずにいてください」

「……せっちゃんが、そう、言うんなら。……せやから変な事とかしちやあかんよ？」

「ええ」

刹那は笑みを浮かべたまま、頷きと共に返事をする。そうして刹那は荷物を持ち、三人に背を向け、病室を後にする事が出来た。その刹那の表情には木乃香へと向けていた笑みの欠片すら浮かんでい

なかった。

そのまま刹那は病院の出口を抜ける。空には雲がかかり、それが月光を覆い隠していた。だが、風によって流される雲がゆっくりと消えていき、月光が辺りを淡く照らし出した。闇より浮かび上がるのは、二人の少女の姿だった。

一人は茶々丸。彼女はまるで控えるように佇んでいる。そしてその隣にいた少女。その風貌はまるで人形。長く伸びた美しい金色の髪、童と言うような姿だが、その表情に浮かぶのは不敵なる笑み。纏うのはゴシックロリータ風貌。その上に漆黒のマントを羽織り、彼女はそこに立っていた。

「…私に何の用だ？ エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル」

その問いかけに、彼女は口元を笑みの形に歪め——その指を高らかに鳴らした。それと同時に世界が閉ざされていくような錯覚。その感覚に刹那が眼を細めると同時に、エヴァンジェリンと呼ばれた少女は宙に浮いていた。

「なあに。少し貴様に問いたい事があってな。——戯れに付き合え、桜咲 刹那」

＊ ＊ ＊

刹那が去った病室。刹那がいなくなったその病室では刹那が戻ってきた時と同じ重い空気が漂っていた。木乃香は僅かに伸ばしかけた手を、そのまま力なく下ろした。

それを見ていたのは月詠だ。木乃香の一連の様子を見ていた月詠はそのまま、ふう、と吐息と共に瞳を閉ざした。

「ほら、結局は問えへん。問うてもあの人は答えへんかもしれへんし、もしかしたら全てを答えてくれるかもしれへん。でも、それは終わりや。それを聞いてしまえばそれは崩れ落ちる」

「……」

「普段から真剣を持ち歩いてるなんて、いくら何でも常識外れやろ？ そんな常識外れの所にあの人はおるんや」

「…月詠ちゃんは、知っとるんか？」

「言わんけどな。知っとるよ。あの人は今のままで良いんやろうな。…けど、うちはそれがどうにも納得が出来へん」

月詠の声に混じるのは苛立ちだ。あの日、刹那と刀を交えたときに感じた彼女の刃の在り方。それは余りにも純粹なものだった。そしてそれを一心に受けているのは、近衛 木乃香その人、他ならぬのだ。

刹那の剣は強い。敵と定めたのならば迷い無く断つ。例えそれがどれだけ屈強な敵であろうとも、その身が立つのならば、その心が折れぬのならば、彼女は例え四肢が動かずとも勝利を諦めない。

ただ、己が身がどうなろうとも、その刀を振るう意味の為に。――

——彼女が護ると決めた木乃香の為に。

だが、その刹那の励みを、努力を、誰が称えられよう。称えられないのだ。彼女に誰かの賞賛の言葉など意味が無い。己の評価などどうであろうとも、死なない限りであるならばそれもどうでも良い。ただ究極的に、彼女はただ一つの約束の為に何もかも捨てていけるのだ。それを受け入れているから、彼女はとても穏やかに、そして安らかに全てを受け入れている。その上で我を通す事を恐れてはいない。

それはあまりにも——彼女の名の如く、刹那のような生き方で。それが美しいと思うのと同時に、妬ましいとも思ったのだ。その剣をどれだけの言葉で飾ろうとも、それを刹那が誇る事はないのだ、と。唯一、彼女に報いる事が出来るとするのならば、それは唯一人しかないのだから。

あんな美しいものが認められない。それを一心に向けられている事も知らず、彼女の傍にいて、その笑顔を振りまいている木乃香が——月詠にはどうしても許せない。許せる筈がない。

「……何も、あの人は求めているじゃないや。ただ、自分だけでもう完結してしまってるんや」

それが報いられる事がない世界だという事も。それでも恐れずに、絶望も無しに彼女はその道を行くのだと決めていた。誰かがそう決めた訳でもなく、ただ一人で、その孤独な道を行くのだと。

純粹だ。だからこそ、不純物が混ざらないまでに澄んだ、されど故にそれ以上にもならない孤独な刃。彼女を理解するものは誰もいない。誰にも理解させる事を望んでもいないし、させることもしないだろう。

月詠に刹那は言った。お前はバケモノにはなれない、と。ああ、

なれないさ。だって自分が欲しかったものは孤独なんかじゃない。それは月詠と求めているものとは対極だからこそ。だから、月詠は刹那にその心を奪われたのだ。

「…駄目やってわかってる。こないな事、言う事でさえ、センパイに対する裏切りや。センパイはこんな望んでない。せやけど…なあ、お姉。センパイ、いつ消えたって、おかしくないんやで？ あの人に…——それ以外、なんもあらへんのやから」

＊ ＊ ＊

「——がっ!？」

叩き付けられる。大地に叩き付けられた体は軋み、悲鳴を上げる。全身の痛みが感覚を麻痺させていく。あまりにもその力量差は絶望的だった。刹那はそれを感じて、口の中に堪った血を吐き出した。

夜に包まれた麻帆良の都市の一角。病院の前の広場、隠蔽用の結界が張られた空間の中で刹那が対峙するのは空に浮かぶ月光の光を吸い込み、夜を纏った少女、エヴァンジェリン・A・K・マグダウエル。

刹那の同級生にして、その正体は魔法世界で恐れられた真祖の吸血鬼。悪の魔法使いとして世界に名を馳せた600万ドルの賞金首。ある理由でこの麻帆良学園に封じられている、とは刹那も耳にはしていたが…。

「…はっ、これで封印されているとは…さすがはかの「闇の福音」といべきか」

「ふん。満月の時のみには力が戻る。そういう訳だ。まあ、それでも全盛期とまでは言えないが、なに。貴様を嬲る程度の力はあるさ」

鼻を鳴らすようにしてエヴァが笑う。無詠唱で放たれたのは魔法の矢、氷属性を含んだ魔法の矢は地に叩き付けられた刹那を狙う。刹那は息を一気に吐き出し、起き上がりと同時に足に気を込めて跳躍する。

その一步は刹那を遙か彼方へと運ぶ。瞬動、と呼ばれる技術。気を足へ溜め込み、踏み込みと同時に爆ぜさせ瞬間移動する技法。刹那の一步は一気に3mもの距離を飛び越え、エヴァから距離を取ろうとする。

「——見事な瞬動だ」

「ツッ!!」

「反応速度、技術の研鑽も見事。その年であの詠春に迫っていると、正直の所、賞賛の言葉を贈っても良い程だ」

眼前から聞こえた声に刹那は反射的に夕風を振るっていた。が、その剣閃はエヴァの手が刹那の手首を掴み、封じる事によって防が

れる。至近距離から刹那を見つめるエヴァの顔は笑っている。だが、その瞳は一切笑ってはいなかった。

何とか逃れようとする刹那だが、エヴァの力は尋常ではない。そのまま互いの力が拮抗する中、状況を崩す一打を相手に与えたのはエヴァだった。再び無詠唱の魔法の射手を展開、それを掌低を叩き付けるのと同時に刹那の腹へと叩き込んだ。

それによる防御で防ごうとするが、そのまま再び刹那は地に倒される。例え無詠唱の魔法であろうとも、相手は600年を生きた真祖の吸血鬼、その威力は計り知れない。人間を超えた彼女の一撃は確実に刹那を追い詰めていた。

「が、はあっ!？」

「だが不可解なのが、それも、全て「お嬢様」の為、か。その為には何を捨てても良い。その為だけにあると。――ああ、お前は確かに見事なバケモノだな!！」

追撃のエヴァの掌低を刹那は気を込めた膝で防ぐ。そのままその膝を滑らせるようにエヴァの腹へ足を入れ、そのまま蹴り上げる。そのまま上げた足の勢いを利用して両手を大地に突き、立ち上がる。一步、二歩、大きく飛ぶようにして下がるも、口から零れる血、全身の軋み、腹部の痛みに刹那は膝をつく。夕風を落とした音が虚しく響き、脂汗を浮かべながら刹那は息を荒く吐き出す。

そんな刹那を憐れ見るように見下ろすエヴァの表情は冷たい。まるでつまらない、というよりは、不愉快、といった表情で刹那を見下ろしている。

「――気に入らない。桜咲 刹那。お前は何なんだ?」

「……な、に…?」

「問う。桜咲 刹那。お前の生き方は何だ？ お前の生まれの事は聞いている。お前の境遇も聞いている。それから想像されるお前の不幸も想像出来る。——それを、お前は何故受け入れられる!？」

喝、と。エヴァの叫びが刹那の鼓膜を震わせた。

「お前は！ 悔しくは無いのか！ 自らを受け入れないこの世界が！ 貴様が貴様である事を認めない世界が！ そして貴様は誰にも評価される事無く、あのお嬢様を護るためだけにある？ 理解してくれる訳でも、受け入れてくれている訳でもないあの小娘を、何故だ、理解に苦しむぞ、桜咲 刹那!!」

「……」

「お前とて——そう望み、そう生まれた訳ではあるまいっ!!」

エヴァの両手に光の剣が生まれる。”断罪の剣”と呼ばれるエヴァの魔法だ。物質を強制的に相移転させる事によって対象を破壊する魔法だ。例えば相移転の牙から逃れようとも強い冷氣に晒され、相手の低温の攻撃を与える事も可能。

それを構えながらエヴァは刹那へと迫った。刹那は歯を噛みしめ、落とした夕風を素早く拾い上げ、再び瞬動を用いてエヴァの攻撃を回避する。それを自らも瞬動を使用し、刹那へと追い縋るエヴァは叫ぶ。

「人間でもなく、”鳥族”でもなく、どちらにもなれず、どちらにも受け入れられず、迫害され、居場所もなく、ただ心の拠はあのお

嬢様とやらか！！　その為にならば自分がどう思われようが構わんと、何故そう思える！！」

「…っ…！」

「――どうして、そうもバケモノである事を受け入れられる！　貴様とて人の幸せを知らぬ訳ではあるまい！！　それを、他ならぬあの月詠という小娘に、あのお嬢様とやらに願っているのだから！！」

刹那は気を夕風集中させ、それを膜とする事によって”断罪の剣”と打ち合いを続けながら後方へと下がっていく。全身の痛みによる軋みが刹那の思考を掻き乱していく。エヴァはただ熾烈に刹那を攻め続ける。

「お前は望まないのか！？　――何故、そうも自分を蔑ろに出来る！！」

エヴァが眉を寄せるような表情を浮かべ、刹那に迫る。迫り来るエヴァの影に、刹那はその口元を歪めて。

「――ハッ、ハッハッハッハッ！！　ハハハハハハッ！！！！」

笑った。可笑しい、と言うように刹那はエヴァの一撃を捌いていく。その笑い声に呆気取られたが、まるで不愉快だ、と言うようにエヴァは刹那の体を吹き飛ばす。懐に入れられ、入れられた一撃。それは容易に刹那を吹き飛ばし、街路樹に刹那は叩き付けられる。

そこで刹那の笑い声は一度止まり、再び血を吐き出したが、刹

那はくつくつと喉を震わせるように笑っている。そんな刹那の様子にエヴァは眉を寄せ、怪訝そうに刹那を見つめ出す。

「…貴様、何がおかしい？」

「…蔑ろ？ 私が、自分を？ ああ、やはり理解されないものだな。エヴァンジェリン、貴方は前提からして間違っている」

「何？」

「私は、人間であろうとも、思わん。ましてや烏族であろうとも思わん。私は、”私”だ。それ以上でもそれ以下でもない。私は人間で、烏族で、混ざり者で、忌み子だ。ああ、並べ立てればこんな中途半端すぎるものはどこでも受け入れられない。受け入れられる為には何かを捨てなければならぬ。――そんなの、ああ、下らない」

街路樹に叩き付けられた背中が熱を持ったように痛む。だがその熱すらも今は体を動かす為には必要なものだ。心臓は早鐘のように胸の奥で鼓動し、夕風を拾い上げた手には力が籠もる。

吸い込めば、吐き出す。乱れた呼吸を正し、姿勢を正し、構えを取り直す。

「エヴァンジェリン、私はハーフだ。ハーフなんだよ。両親から受け継いだものをそう簡単に捨てられる訳がないだろ？ 私は人である事も、烏族である事も、そのどちらでも在ることを、そのどちらでもないものにでも、ただ受け入れられないから、という理由で手放すのにはおかしいだろう？」

「…な…」

「私の両親は、私を不幸な人生を歩ませる為に私を生んだ訳ではない。詠春様は私に諦めろと言う為に私とお嬢様を引き合わせたんじ

やない。その全てを飲み込み、受け入れ——”私”の居場所を新たに作り上げる為の出会いだったんだ。そう、それを愛おしいと思うことを忘れず、それを尊いものだという事を忘れずに、その両者を忘れることなく進めと」

そう、だからだ。

「理解されない？ だから寂しい？ だから悲しい？ ああ、確かにそうだな。だがな、だからといって私が私である事を止めればそれ以上なんて無いだろう。望むのなら常に頂だ。——私は、とつくの昔にそれを許されているんだ」

約束があるのだ。

「――T e s .」

だから、こそ。

「エヴァンジェリン、先程言ったな。私の境遇を想像出来る、と。その上で幸せの定義を語るのならば——尚更貴方に負ける訳にはいかない」

そうして、白の羽が舞った。刹那の背に現れるのは白き異端の翼。

それが大きく羽ばたき、解き放たれた事を喜ぶかのように身を震わせる。刹那も、ほう、と瞳を閉じてその感覚に笑みを浮かべて。

「さて。――反撃させて貰おうか」

第1章「彼女たちの学園生活」 07（前書き）

※烏族についてかなりの捏造設定が入ります。それでもよろしいという方はお進みください。

第1章「彼女たちの学園生活」 07

——空を征するのは、人ではない。太古の昔より翼を持つものが支配しているのだ。それは世界の摂理。それこそ古より定められている法則。それこそ絶対たる真理なのだから。

＊ ＊ ＊

「さて。——反撃させて貰おうか」

告げるのと同時に、刹那が跳んだ。そして飛んだ。彼女は空を行く。此処こそが自分の領域だと言わんばかりにその白翼を大きく広げて主張する。エヴァはそんな刹那に舌打ちを一つ漏らし、すぐさま刹那に向けて魔法の射手を解き放つ。

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック、”氷の精霊30頭、集い来りて敵を切り裂け、魔法の射手、連弾・氷の30矢”!!!」

迫る水の矢は全部で30弾。それが一斉に刹那を目がけて発射される。刹那はそれに対し、臆する事無く特攻した。その身を縮め、捻るようにして空中で体を回転させる。それと連動するように翼が羽ばたく。

刹那の翼が前へと進む刹那を覆い隠すように前へと出て、そのまましなり、刹那を包み込むように、それを刹那は体の捻りを逆回転に捻り、翼を大きく羽ばたかせた。瞬間、刹那の翼の羽ばたきが突風を巻き起こし、エヴァの魔法の矢を打ち砕いていく。

「何っ!？」

「我が身に流れるは”烏族”の血! 臆する事なかれ、真祖の吸血鬼!! 我、忌み子の翼児!!! 空が貴様の領域だと思ふな、魔法使いッ!!!」

”烏族”とは簡単に言えば天狗の事を示す。天狗、というのは日本でも良く知られるポピュラーな妖怪だ。山伏のような格好に、手には扇を持って風を巻き起こすという認識が主な天狗に対するイメージと言えよう。

”烏族”とはそんな天狗の子孫とも言える存在だ。天狗の発祥には様々な言い伝えがあり、その全ての集合体であり、最もポピュラーな天狗の姿を取った天狗とも言うべき天狗の後継者こそ”烏族”。天狗の成り立ちには、この世の恨みを持った者、僧で慢心した者、自尊心が強すぎる者が天狗と呼ばれる妖怪へと変異したという。つまり、天狗とは人より生じた妖怪と言っても良い。

ならばそのハーフである刹那が、純粹たる烏族に劣るかと言われれば、それは否だ。烏族は総じてその成り立ちから始まった種族故に種族的の能力は人間以上の能力を持っている。それこそが彼らの誇りだ。

自分たちは人以上の存在である、と。だからこそ刹那は鳥族より追放された。その身に異端とされた白き翼を持つ半妖半人であるが故に。だが、それが刹那に幸をもたらしたと言っても過言ではない。天狗こそ慢心の種族。慢心こそが彼らの在り方。だが、ハーフである刹那はそうではない。どこまでも自分は未熟だと、頂は未だ遙か遠く、この翼を用いても届かぬなら…。

（そう、もつと先へ…先へ行こう！ 風を切り、雲を抜け、空を渡り、星と並ぶ…！ 我が頂は遙か遠く…遙か彼方の約束の地…！！）

そこは空を超えても届かぬ場所だ。

そこは何を超えても見えぬ場所だ。

そこは、そう、そこは、自分が恋いこがれた地。

いざ行け、さあ行け、今、今しか歩めぬ。ならば一步。さあ一步。まだ遠い。ならばまた一步。更に一步、足りぬ、足りぬ、足りぬ…！！

約束は、どこまでも遙か。その終着点も見えぬのならば…！！

「お、」

今は、まだ、前へ進め…！！ そう、今は先しか、見るものなど要らぬのだから…！！

翼が強くしなり、伸びきるように広がる。その羽ばたきは風を叩く。風を従えるようにその翼は幾度か羽ばたき――。

「——おおおおおっつつつ!!!!!!」

——爆ぜる。風を叩き付け、風を荒れ狂わせながら白の翼は空を奔る。風がまるで彼女の背を押すようにし、風が彼女の加速を助ける。初速にして翼が無い刹那と同速。

それが更に加速を見せる。その速度、吸血鬼の動体視力を以てしてもなお追うのがやっとだという驚愕。

「な、速い——!?!」

「——違う。貴方が遅いだけだ!!」

一撃。エヴァの魔力障壁が軋みをあげる。刹那が叩き込んだ夕風の一撃は一気にエヴァの障壁を撓ませる。が、碎けるのも時間の問題と判断したのか、エヴァは刹那の腕を取ろうと手を伸ばす。

が、そんなエヴァを殴り飛ばす何かが迫った。エヴァはそれが何なのか一瞬、理解が出来なかった。それは翼だった。その翼は折りたたむようにエヴァの眼前へその翼を持ってきて、勢いよくエヴァの顔を殴りつける。

「がっ——!?!」

堪らず、エヴァは後方へと下がる。それに対し、刹那は空中で身を引き絞るように身を縮める。絞る、絞る、身を引き絞る。限界にまで力を溜め込みながら刹那は瞳を閉じ、意識を集中させた。

瞳を閉じれば、世界は闇の中。頼りになるのは自らの触感と聴覚

のみ。故に感じられる。刹那を取り巻く者たちの声を、存在を。彼らはどこか戸惑っているように思える。だから、ああ、すまない、と謝るように刹那は告げた。

「――風よ……！」

呼ぶ。呼び、願い、訴え、その身に風を纏う。我は空を行くもの、ならば空にあるものよ、我に力を。刹那は祈る。刹那は願う。刹那は訴える。貴方は我と共にあり、我を助けるものであり、我と共に奔るものだと。

” 烏族 ” とはつまりは天狗。天狗には僧より至る者もいたという。彼らは翼が無くとも空を駆ける、と伝えられている。故に彼らは今の天狗へと至ったのかも知れない。相応しき姿であるように、と。翼は証だ。それは風を操り、空を飛ぶ事を許された者に贈られる象徴。そう、烏族である事の誇りこそ、この翼。例え異端たる白き翼であろうとも、この翼は烏族のものであるならば。

「――古の契約をここに！ 我が名、桜咲 刹那……！！ 人と天狗の間に生まれし子なれど、翼を持つ汝が盟友なり……！！ 我、この翼に誇りを抱き、汝等を愛し、称え、敬う者なり！ 我が心を真するなら応えよ……！！」

・――……。

それはまるでささやきのように。力強い羽ばたきに、応、と風が

答えた。刹那を取り囲むように、刹那を抱くように、刹那を慕うように風は彼女の傍に集う。そしてその風が刹那の髪留めをほどこした。同時にほどこれる髪が風によって揉まれ、その色を変化させていく。――いいや、違う。それは元に戻しているだけだ。不要だ、と言うように本来の色を隠していたその黒色は風によって奪われていく。洗い流されるように流れた刹那の髪色は翼と同じ白色。

刹那が眼へと手を伸ばす。何かを外すように瞳を揉むように触れる。そうして、瞬きを一つ。開かれた瞳はまるで紅玉。そう、その姿は白子、アルビノ体質の者が持つ色彩。忌むべき子、桜咲 刹那の本来の姿。

「…それが、お前の本当の姿か…！」 桜咲 刹那…！！」

エヴァが吸血鬼特有の犬歯を剥き出しにして吼えるように刹那へと叫ぶ。それに深紅の瞳を細めるようにし、夕風を構える刹那。その表情に笑みを浮かべて。

「自慢の従者も交えても構わんぞ？ 吸血鬼。何、私は古の盟友と共に在るからな。…というより、アレだ。後で、絡繰が参戦していたら、などと言いついては叶わん。――死力を尽くせ、我が誇り、そう簡単に打ち碎けると思うな。今宵、貴様は敗北を味わうと知れ！！」

「――はん、言ったな！！ 聞いたか茶々丸！ お前も参加しろ！！ お前は徹底的に潰すぞ、刹那！！ お前こそ恐れ戦くが良い！ 我が異名が斯くあるべくしてそう呼ばれたのだと言うことを！！」

エヴァが遠く離れた場所で距離を取っていた茶々丸へと指示を飛ばす。その笑みには寧猛と言うべき笑みが浮かんでいて、彼女は刹那と対峙した。その手には断罪の剣が展開され、周囲の熱を奪っていく。

対し、構えを取った刹那の周囲には風が慕うように彼女の下へと集う。互いに異音を立てながら睨み合い――互いに同時に空を駆けた。断罪の剣と夕風がぶつかり合い、拮抗は一瞬、眼にも止まらぬ連撃。何十合かのぶつかり合いと共に互いに距離を取る。

「風よ…集えっ！！ 我が刃となれ！！ 神鳴流ヶ秘技……！！」
「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック、”来れ氷の精、闇の精、闇を従え、吹雪け、常夜の氷雪”……！！」

刹那は風を夕風に纏わせ身を引き絞るように構える。エヴァは口早に詠唱を唱え、その手に魔法を完成させていく。氷の精霊と闇の精霊を呼び集め、固めたそれは既に暴発寸前にまで魔力が高められていて。

「”極大・斬空閃”！！」
「”闇の吹雪”！！」

極大の鎌鼬の刃が刹那が振るった夕風から解き放たれ、エヴァもそれに応じるように闇色の吹雪を収束させ、解き放つ。それは二人の間でぶつかり、爆ぜる。吹雪は散らされるように宙へと散らばり、その雪の結晶を互いに碎きながら刹那とエヴァは接近。

——神鳴流ヶ奥義”雷鳴剣”！！
——”断罪の剣”！！

雷剣と光剣がぶつかり合う。その衝撃の余波が空気を振るわせ、爆音のような轟音を周囲に響かせる。その衝突音を奏でる刹那へと、ブースターで宙に浮いていた茶々丸がその手に鈍く黒光りする巨大な銃を向けていた。

茶々丸の瞳が刹那を対象としてロックオンする。それと連動して茶々丸の持っていた巨銃もまた、刹那へと対象が設定され、その砲身を向けていた。茶々丸はその引き金を引き、刹那へと銃弾を放とうとしたその瞬間。

「神鳴流ヶ奥義、斬岩剣！！」
「——ッ！？」

茶々丸の銃が何者かによって叩き斬られる。その対象に茶々丸は混乱する。その声は登録してあるデータのものと一致。だがそれがそもそもおかしいのだ。その対象は今、彼女の主と斬り合っている筈なのに。

そうしている間に姿を見せたのは、まるで幼児とも言える背丈の翼を広げた少女。サイズ的にはまるで少し大きめの人形程度の大きさしかない。その面影はエヴァと戦っている筈の彼女と良く似ていて…。

「…式神ですか」

「そう！ 私こそあそこの馬鹿者の式神にして真のお嬢様の守護者にしてストー…いえ、見守り人ことちびせつなです！！ 以後よしなに！！ そしてくたばれっ！！ 本体の奴、私にお嬢様をほったらかしにして貴様のような人形を相手にさせてくれるなんて後でお嬢様の映像絶対渡さない徹底抗戦の構えだからその為にお前さつさと退場しろと私は言いたいのです！！ わかりますね！？」

「…理解不能です。言いたいことは一つに纏めてくれませんか？」

「——私の至福の撮影を邪魔する奴はみんなくたばってしまえっ！！」

早口に語ってくるちいさな刹那こと、ちびせつな茶々丸は冷静に返す。それに対してちびせつなは満面の笑みで親指を下に向けた。それと同時に茶々丸が武装を接近戦の物へと移行させ、ちびせつなは刀を握り、従者の死闘も開幕の音を響かせた。

＊ ＊ ＊

翼を大きく振るう。その度に刹那は思う。この快感は人では得難いものだ、と。

空を飛ぶ、というのは快感だ。どこまでも解放され、身を吹き付

ける風はどこまでも心地よさを感じる。ああ、此処こそが自分が駆ける場所だと思う。だからこそ、それ故に軋む心がある。

——せっちゃん！

思い出せばいつだって呼ぶあの声が。あの人の声がする。ああ、あの人はこの姿を嫌わないだろうか。誰も彼も、この翼を嫌っていたというのに、あの人にまで嫌われたらどうしよう。

以前ならば、きっとこの軋みが私をそれ以上先に進ませなかっただろう。だから続く声がある。

——刹那君。

——刹那ちゃん。

ああ、ああ、大丈夫だとも。約束はここに。契約はここに。違えぬと誓った。不安はある。ならば飲み込め。恐怖はある。ならば噛み砕け。恐れよ、その度に噛み砕け、齒を食いしばって前を見ろ。

奴はこの歩みを無駄だと言った。ああ、無駄だろう。この痛みはただ痛いだけだ。それが何かに変わる訳ではない事は自分が良く知っている。どれだけ耐えて、堪えて、受け入れられないと、何も変わりはないと知りながらも、それでも私はこのままでありたいと望んでいる。

それがいつか来る終わりを予感させる。そこから眼を背ければどれだけ楽だろうか。だけど、そんな楽した先に——私の約束は、契約は無い。ならば、ただ今は前を見て飛ぶのみだ。

「エ、ヴァン、ジェリイイイイイイインッ！！！！」

吹きすさぶは吹雪、舞い散るは氷矢、力は絶大、存在は強大。あの童姿がまるで悪魔のようだ。恐れはある、さすがは600万ドルの賞金首にして真祖の吸血鬼。私は挑む、私の全力でも届かぬ彼女の姿を。

「まだ、速度が上がるか！ 刹那！！」

既に常人では追い切れぬ速度すらも超えた刹那の一撃をエヴァは危なげなく受け止めていく。刹那は今、暴風を纏っているようなものだ。だが、それが仇となってエヴァに自らの攻撃を防がれている。風が吹けば気流が動く。その気流の先読みをエヴァは行っているのだ。見るのは既に止めた。ただ感じるままにエヴァはその真祖としての身体能力を生かし、刹那の一撃に応えている。

「――刹那！！ 問おう、貴様は何を見ている！！」

「――ッ！？」

「貴様を確かに留めているのは近衛 木乃香の存在だ！ だが、貴様が見ているのはこの世界じゃない！！ ならば貴様が見る世界はどこだ！！」

断罪の剣が迫る。それを夕風で防ぎ、迫り来る無詠唱の魔法の射手は気を通した翼の羽ばたきで叩き落とす。エヴァが押し込むよう

に断罪の剣を刹那へと押しやる。そのたびに刹那の手が低温に晒され、凍傷を負っていく。

「ぐ、う——っ!!」

「お前が世界を見ているなら、お前は絶望している筈だ! ならばお前が見ている場所はどこだ! お前が行き着く先の地平はどこだ! 私に見せてみる、刹那!! お前の見ている世界は——私の唱えたお前の幸福を超える幸福がある場所か!!」

問いと同時に、刹那は答えを返すように力を全身より発露させ、眼を見開いて吼えた。

「——応ッ!!」

弾く。エヴァの断罪の剣を弾き、刹那が攻勢へと転じる。凍傷を負っていた痛みを忘れさせるように強く夕風を握り、翼の羽ばたきと共に加速し、エヴァへと迫る。

「そこは、私達のようなバケモノがお前のようにであれる世界か!!」
「応ッ!!」

「そこは、私でも夢描いた理想が現実になっても許される世界か!!」

「——応ッ!!」

「そこは、そんな楽園が、望みが許される地が、本当にあるとしても貴様は信じているのかッ!？」

「――T e s. ! ! !」

刹那の振るった雷鳴剣がエヴァの断罪の剣を消失させた。それにエヴァが眼を見開くのも一瞬、その間に刹那は翼を前へと押し出すように。そして身を捻るようにして夕凧を鞘に収めて。

「契約は、ここに！！ だからこそ、そう、だからこそ……！ だからこそっ！！！」

彼らが語った世界を思い出す。幾度も争い、幾多も偽り、幾多も禍根も生み出した。それを乗り越える為に幾多も交渉を繰り返し、幾多の悲しみ、憎しみ、その思いの全てをまとめ上げた。

芳醇だろう、と彼は笑った。素敵だよ、と彼女は笑った。ああ、その笑みが本当に心の底からその世界を誇っているのだとわかって、だから、ああ、あんな風に笑いたい、だから最後までこの世界で信じられる事を信じ切って生きると誓った。

この世界を怯えずに、恐れずに、憎まずに、ただ愛おしく、尊く、大切に、価値を見いだし続けられたのは彼らとの約束がこの胸にあるから。

「――私は、ここにいるんだ！！！！！」

揺らぎなど、無い――！！！！

翼が羽ばたき、前へと更にその翼の勢いを利用し、体の捻りも最大限に生かしきった居合い抜き。夕凧が鞘から抜き放たれる、その

鞘に滑る度に加速し、その加速が最大に乗った瞬間、鞘から解き放たれた刃。刹那の気を含み、雷と風を纏ったその剣はまるで竜の嘶きのごとく吼える。

「――ア：ツツツツ！?!?」

それが、エヴァを襲った。風がエヴァを絡め取り、奔った電流がエヴァの思考を奪い、奔った白刃がエヴァの脇から肩へと音もなく切り裂いた。そして体がまるで斬られた事を思い出したかのように――エヴァの血が刹那を濡らした。

ぐふ、と。血を吐き出す吐息と共に、エヴァがそのまま力を失ったように落下した。刹那が咄嗟にそれに手を伸ばそうとするも、度重なる体へのダメージの蓄積が逆に彼女すらも空を飛ぶ力を奪いかけた。

刹那がふらつき、エヴァを掴む事が叶わない。それでも刹那はエヴァを追おうとした瞬間。

「――ふ、ふは、ふはははは、ふははははははははははっ！！！！」

ぴたり、と落下を止めてエヴァが笑い出した。まるで狂ったかのように彼女は笑って、笑って、笑って。そうして笑いきったかのように腹を抱えるエヴァ。衣服こそぼろぼろではあるが、傷が既に無い彼女はこれを可笑しいと言わず、何が可笑しい、と言うように笑った。

刹那はふらつきながらも空に留まり、エヴァを睨む。正直刹那は限界だった。エヴァへと最後に放った無我夢中で放った一撃。あれ

が精一杯の一撃。これ以上のものは今は望めない、と刹那は判断していた。

故に、エヴァの次の行動が読めない。そうして、ようやく落ち着いたように笑い声を潜めたエヴァは――。

「――何を見たのかは知らんが、良いだろう、あるんだな、そんな馬鹿げた樂園が。私でも、お前でも、心の底から笑ってやれそうな世界が本当にあるのか!? これは愉快だ!!! ああ、実に愉快だ!!! 奴に出会ったとき、いや、それ以上だ!!! それは実に美しい世界なのだろう!!! いいや、逆に醜いのか!? いやはや、想像するだけで心躍るな!!!」

まるで夢醒れる少女のように両手を広げて笑って、声をあげた。そうしてまた笑った。それに刹那は、呆気取られて構えを解いた。

「前言撤回だ。刹那。お前のソレは夢想なんかじゃない。ソレが願えるなら――ああ、確かに芳醇だよ、ったく」

まだ笑いが収まらないのか、くつくつと喉を鳴らせるように笑いながらエヴァは言う。そうして、エヴァはにいと唇と端と端を釣り上げるように笑って。

「――私の負けだよ。刹那。いやはや……参ったよ」

両手をあげるようにして自らの敗北を宣言するエヴァに、刹那はようやく終わったのか、と実感し、その体から力を抜いた。それがいけなかったのか、刹那はバランスを崩しかけ、それをエヴァが咄嗟に支える。

「…む、夜明けが近いな。そろそろ私の力も弱まってくるな…。おい、刹那、気張れ。でなければ私まで落ちる」

「いや、私もそろそろ限界で…」

「お、おい！ 冗談は止めろ！ え、ええい、とにかく急いで降りるぞ！！」

先程までの緊迫した雰囲気はどこへやら、二人して慌てながらふらふらと病院の広場へと降りていく二人。

そんな二人を、衣服をぼろぼろにした茶々丸とちびせつなが顔を見合わせて、茶々丸は微笑ましそうに、ちびせつなはどこか呆れたように見ていた。

「…決着は着きましたが、私たちはどうしますか？」

「戦う理由が無ければ、私としてはどこでも良いので。じゃ、私はお嬢様の所に戻りますので貴方の主と一緒にウチの馬鹿者もよろしくお願いしても？」

「ええ。構いません。今日は…マスターも、とても楽しそうでしたので。そのお礼とでも思ってください」

「別に嬉しくもないので、いらないですよ。それじゃ。ああ、もう、お嬢様の撮影時間が…本体、後でクロス…」

そんな眩きを残して姿を消すちびせつなを見送り、茶々丸は今にも落ちそうな二人を確保する為に二人の下を指すのであった。

第1章「彼女たちの学園生活」 08

ううん…ここはどこだろうか。見渡しても何も無い。地はあるけれど、そこはまるで靄がかかっているようで何も見えない。天もまた白く、ただ霧のようになっていて果てが見えない。

はて？ 私はどうしたんだったか。どうにも意識の前後の記憶が曖昧になって覚えていない。今でさえ、意識はぼんやりとしていて曖昧なものだ。どうしたものか、と途方にくれていると。

”せっちゃん！”

声がした。間違いない、この声の響き、そして私を愛称で呼ぶ者などお嬢様以外に他ならない！！

”せっちゃん、今日、ウチ、新しい服を買いにいくんやけど、今のウチのサイズってどれぐらい？”

サイズですか？ ええ、任せてくださいお嬢様。この刹那、お嬢様を一目見るだけで現在のお嬢様のスタイルを把握する事など造作も無い事！ 眼を皿のようにしてお嬢様の姿を探すも、…む？ お嬢様の姿が見えない？

声がするのに姿が見えないとは、これまた面妖な。お嬢様は一体どこに…。

”せっちゃん、こっちこっちー”

私は声に誘われるままに首を動かし、顔をそちらに向けた。そして、声のするままに、振り向けば。

——満面の笑顔のエヴァンジェリンがいた。

「絶望した…っ！！ お嬢様があんな金髪ロリペタババアになっているなんて絶望した…っ！！ まるでエヴァンジェリンみたいになっ
てて絶望した…っ！！ むしろエヴァンジェリンになってて絶望
したああああ——っ！！」

「…おい、貴様」

「…ああ、お嬢様、そんなお姿に…一体何があってそんなあのロリ
ペタババアと同じ姿に！？」

「——こ、殺す…！！」

＊ ＊ ＊

森の中に建てられたログハウス。それはエヴァンジェリンの家で

ある。エヴァの従者である茶々丸もここで暮らしている。彼女は自らの主と、その客人の分の朝食を作っていた。

作るのは目玉焼きだ。エヴァはたいそう日本食、というより日本の文化に浸っている。朝の食事、和食のことが多い。エヴァが和のものを好むというのは、彼女が茶道部と囲碁部に在籍しているからわかるだろう。

そういう訳で、エヴァは味噌汁の味にもうるさい。今日も主の舌を満足させるべく、茶々丸は味噌汁の味を確認する。フェイクとはいえ、食事を摂る事が出来る身。味の比較なども試行錯誤があったもの、茶々丸は可能としている。

(…今日もマスター好みの味です。誤差、寸分の狂いもなく正常。パーフェクトです…！)

記憶のフォルダにある「朝食を食べて機嫌の良いエヴァ」の褒め言葉を脳内で再生し、その言葉が現実になただければ、と願いを抱く。そうして茶々丸は食事の用意を手際よく進めていく。

すると、何故か客人が泊まっている部屋の方がどうにも騒がしい。茶々丸は一度、そちらに視線を向けて立ち止まる。その部屋の扉を開けて中に入ってきたのは猫のようにエヴァの襟首を掴みながら入ってくる刹那だった。

「この変態め…！ 私を近衛と間違えるとはどういう事だ！ そして誰が金髪ロリババアだ！ 私が好きでこんな姿をしていると思うなよ、くっそ、満月の夜には覚えてろ貴様…！」

「だから悪かった、と言ってるじゃないか。…私だって好きで間違えた訳じゃない。むしろエヴァンジェリンがそこにいるから悪い

……そう、よって私は悪くない！！　むしろ私の夢に無粋な茶々を入れたエヴァンジェリンが悪い！　つまり有罪！！　己、エヴァンジェリン……ッ！！　さすがは悪の魔法使い、なんて狡猾な……！！」
「ああ、くそ、この無力な体が憎い……っ！！　茶々丸！　此奴を殴れ、今すぐ殴れ、とにかく殴れ、私の気が済むまで殴れええええっ！！」

何故かどうにも我が主はご機嫌斜めだった。刹那の手から逃れようと暴れているものの、刹那は離せば何をされるかわからないので猫よろしく持ち上げたままだ。それにエヴァが抗議と悪態を混ぜ込んで刹那に放つが、刹那は開眼しながら独自の理論を展開しだした。そのままぎゃーぎゃーと口論する二人を見ながら、茶々丸はぼそっ、と小さく呟いた。

「……味噌汁が冷めてしまいます……」

＊ ＊ ＊

昨夜の刹那とエヴァの戦いの後、疲弊した二人はそのまま倒れ込

んでしまい、茶々丸がそんな二人をエヴァの自宅へと連れ帰ったのがそもその経緯。そうして刹那の為に布団が用意され、彼女は一泊、ここで夜を明かしている。

そして、気まぐれなのか、先に眼が覚めていたエヴァは刹那を起こしに行く、と言って、いまに至る、という所だ。三人は茶々丸の作った朝食を食べ終わり、ごちそうさま、と食事の終わりを告げて。

「改めて、朝食まで世話になってすまない、エヴァンジェリン、絡繰」

「ふん。まったくだ」

朝食を終えた刹那は、テーブルに着いたまま、まずはエヴァと茶々丸に礼を言い、頭を下げた。それにエヴァは朝の事を未だに引きずっているのか、不機嫌そうに刹那の礼を受け取る。

それに対し、茶々丸もまた一礼する事によって受ける。そして場は一瞬、静まりかえり

、ふう、とエヴァが漏らした吐息が小さく響く。そんなエヴァが見据えるのは刹那だ。上から下を眺めるように見て。

「…で？ 貴様、カラコンと染料を常備している訳でもあるまい？ その姿で出歩くのは嫌なのだろう？」

「万が一、知り合いにでも見られたときの事を考えれば…カラコンも染料も寮だな…」

参ったな、と言うように刹那は頭を掻いた。彼女の髪は普段の黒髪ではなく、生来の髪の色に戻っている。このままでは外に出られ

ない、と。それを見ていたエヴァは、ふん、と鼻を鳴らしながら。

「まあ、いい。一時的だが魔法で染めてやる。帰ったら自分で染め直せよ」

「そうしてくれると助かる。礼を言う、エヴァンジェリン」

「ああ、だから早く帰れ。貴様の顔を見ていると苛々する」

エヴァの不機嫌さに首を傾げながらも刹那は小さく頷いた。その刹那の態度にエヴァは、ふう、と疲れたように吐息を吐き出し、席を立った。

そのまま彼女は刹那の方へと歩いていき、刹那の髪へと手を伸ばした。刹那はエヴァの伸びた手に髪の毛を委ねるが、エヴァの手が触れた際に少し身を跳ねさせた。その刹那の反応を気にせず、何度か揉むようにエヴァは刹那の髪に触れる。

「痛みきっているではないか。まったく、染めただけではないな？
この痛みようは……。少しは気を遣ったらどうなんだ」

「お嬢様の髪なら気にするが、自分の髪などどうでも良い」

「このお嬢様馬鹿の無精者め……。ふん、まあ私の知った事ではないがな。リク・ラク・ラ・ラック・ライラック……」

エヴァは呪文を唱え、刹那の髪を撫でるように触れる。白髪であった刹那の髪はみるみるうちに黒色を吸い込むようにその色を変え、完全に黒へと染まりきる。そこに茶々丸が手鏡を持ってきて、刹那へと手渡す。

刹那は手鏡に映る自分の姿を確認し、普段の自分と何ら変わらな

い事を確認した後、小さく頷いて。

「すまな、助かる」

「ふん。ならばさっさと帰れ、今日が休日で良かったな」

「ああ、まったくだ。じゃあ、私も帰るよ…っと。私の荷物は？」

「こちらです。はい、どうぞ」

「ああ、何から何まですまないな、絡繰」

「茶々丸、で結構ですよ？ 刹那さん」

「…そうか、わかった、茶々丸。朝食、おいしかった」

刹那は茶々丸より荷物を受け取ると、鞆と夕風を背に背負うかのように以て歩き出す。目指すのは玄関だ。そのまま刹那は玄関へと辿り着き、お邪魔しました、と挨拶を一言した後、エヴァの家を後にした。

刹那がいなくなった後、エヴァはふう、と吐息を吐き出して背もたれに背を預けた。そんなエヴァに食後の茶を用意しながらもエヴァの様子を伺う。

「…まったく、変な奴だな、本当に」

ふう、とエヴァは吐息を吐き出し、刹那が出て行ったドアを何気なしにぼんやりと見つめるのであった。

「良いご友人が出来ましたね」

「…おい、茶々丸、あんな無礼な変態を私は友と認めた訳ではない

ぞ？」

「ただの顔見知りにマスターが世話を焼くとは思えませんが…では刹那さんはマスターの中では一体どのような評価で…」

「う、うるさい！　べ、別にうじうじされた顔のままここに居座られるのが嫌だっただけで、アイツを助けた訳じゃないんだからな！」
「……ッ！？　……なんというツンデレ……！！　博士、これが萌え、というもののですね……！」

「そしてお前はどこからそういう知識を身につけてくるんだーっ！
？　あとツンデレ言うな……！」

＊ ＊ ＊

「――刹那、落ち着いて聞いて欲しい。これは決して私の責任では無いんだ。いいか？　そもそもこれは君の身内というべき彼女の仕業であって私の責任ではない。むしろ私は本当に関与している訳ではなくて、まったくの無関係者、むしろ被害者だと心得て欲しい。いいか？　刹那。君の気持ちは正直わかりたくもないが、わかる。が、それでもどうか落ち着いて欲しい。では、もう一度言おう。――ちびせつなに君のコレクションを全部持って行かれた」

エヴァにかけられていた魔法も解けたのか、それとも別の要因か、

真っ白に燃え尽きた刹那が呆然と見るのは自室にあった木乃香コレクションがあった筈のスペースだ。漫画的な表現で点線がそこに何があったのかを示しているかのようにさえ、刹那には見えていた。

真名が何か必死に弁明しているが、聞こえない。無い、私の命よりも大事な、お嬢様の成長記録及びコレクションが無い。いつか密かにお嬢様に着て貰おうと、自身の生活費さえも削って購入した衣装すらも無い。何から何一つ、そこには何も無かった。

「真名：そんなに私の夕風の錆になりたかったのか？　そうかそうか、安心しろ、痛みもなく、後悔もなく、未練もなくこの世から消し去ってくれる…」

「だから人の話を聞けーっ！！　私じゃないって言ってるだろうが！！　お前のとこの式神の仕業だ！！　私が気づいた時には持ち出された後だったんだよっ！！　この置き手紙を見ろ！！」

視線だけで人を殺せるならば、というまでに真名に笑みを浮かべながら殺気を叩き付ける刹那に対し、真名は殴りつけるように置き手紙を刹那に叩き付けた。むしろ本気で殴った。だが、それを容易に受け止め、手紙を奪い取る刹那。

『 本体へ』

今回、お嬢様を撮影出来なかった分の損害賠償としてコレクションを徴収させていただきます。あしからず。え？　返せ？　返すと思ってるの？　馬鹿なの？　死ぬの？　愉快なの？　私は愉快です

けどね!!

m9（ハム）プギャー　ちびせつなより』

「こ、こここ、こ、ここ、こころ、ころ、ころ、ここ、ころろろ、ころ…!!」

がくがくと震え、がちがちと歯を鳴らしながら刹那は憎しみに壊れた人形のように言葉を吐こうとするも、上手く言葉になっていない。そして刹那から噴出されるオーラはまさにどす黒い。真名がドン引きする程だ。

その壊れた人形のように震えたまま、刹那は夕風を手にとってどこかへと行こうとしている。夕風がカタカタと震え、力を込めすぎているのか、鞘がみしみしと音を立てている。

「せ、刹那、どこへ行く？」

「ころす、ただころす、ころしてころしてころしてころしてめったぎってばらばらにしてぞうもつぶちまけてひきずりだしてころしてやるころしてやる…」

「怖っ!?　ちょ、お前、まて、お前、髪染めてないだろうが!!　それにそんな調子で外に出たら捕まるぞ!?　流石に!?!」

「離せ龍宮!　私は行かなければ…いか…なければ…」

「お、おい!?!　刹那!?!」

流石に危険だと思った真名が刹那を羽交い締めにするも、刹那はその真名の引きずりながらも外へと出て行こうとしている。何とか必死に真名が押しとどめようとしていたが、不意に、刹那の力が抜けてその場に膝を付く。からん、と甲高い音を立てて夕風が床に転がる。

どうした、と思いながら刹那を見ると、何故か手ががくと震えて碌に力が入っていない様子であった。あれ？ この症状、どこかで見たような、と真名が刹那の症状を観察していると、刹那が死にそうな程、顔面を蒼白して。

「…お、お嬢様分が…!!」

「アルコール中毒者かお前は!？」

「ただだけだ!？」 と悲鳴のように真名は叫ぶ。その間にも刹那の手足はがくがくと震え、歩くことすらままならない様子だ。いやいや、無いわ、と真名はもはや空いた口が塞がらない状態だ。

「――ふっ、ざまあ無いですね、本体」

ふと、いつの間にいたのか、窓に腰掛けるようにし、刹那を見下す影がいた。ちびせつなであった。刹那は彼女の姿を確認すれば、襲いかかろうと四肢に力を込めるも不様に転ぶ。

「ちびせつな…貴様あ…っ!!」

「無駄ですよ、本体。既に貴方はエヴァンジェリンとの戦いで疲弊

しきっています！ コレクションが無ければお嬢様分が切れて行動不能になるのは真名だって知っている周知の事実！！」

「知らんよっ！？ 勝手に人にそんな常識植え付けないでくれるかな！？」

歯を噛みしめ、歯軋りをしながらちびせつなを睨み付ける刹那。それに対し、勝ち誇ったように仁王立ちになり、指を差す刹那。その発言に真名が必死にツツコミをいれるも、さすがは刹那の式神、真名の意見など無視だ。

「苦しいですか？ 苦しいでしょう？ 苦しいですよ？ おっと、私を消したらコレクションがどうなるかわかりますか？ わかるでしょう？ わかるでしょう、本体？ 既に貴方から半ば独立している私は貴方が私の情報を得る前に消える事も可能なんですよ？ だったら貴方が取るべき道は一つしかないんです…！」

「くっ…何が望みだ…貴様…！！」

「そんな口聞いて、コレクションがどうなっても良いんですか…？」

「き、貴様こそお嬢様のコレクションに手を出せるとでも…」

「思ってますよ！！ 貴方の手によって私にはお嬢様コレクションのデータは既に全把握、脳内完全保存、バックアップ処理済みなのですから！！ 現物が燃えようと私にはさして関係ないのですよ、その生身を呪うと良いですよ、本体…！！ くっくっく、はっはっはっはっはっ！！」

「…誰か助けてくれ、本当に誰でもいいから私をここから連れ出してくれ…」

完全に悪役のノリで高笑いをするちびせつな。それに刹那はぎり

ぎり、と悔しそうに歯を噛んでいる。：そんな二人に最早、付いていけない、と言わんばかりに胃薬を流し込みながら、虚ろに眩き続ける真名。

「さて。私とて本体を苦しめるのは本意ではないのです。：楽しいですけど。ええ、とにかく私の願いを叶えてくれるならば、無事、コレクションは返すと誓いましょう…」

「くっ…なにが…望みだ…。良いだろう、ここまで来たならば何でも応えてやろう!!」 望みならば真名でさえ剥いてみせると誓うぞ!!」

「誓うなッ!! 何故そんな発想に至るこの変態め!!」

ぐしゃ、と刹那の頭を思いっきり踏みつける真名。そのこめかみには大きな青筋が浮かんでいて、息は荒い。そんな真名に踏みつけられる刹那を見つめ、口元を釣り上げるように笑うちびせつな。

「それじゃあ、お願いしましょうか。なあに、とても簡単な事ですよ…」

＊ ＊ ＊

「ふぁー…アスナは休日もバイト、ほんまにご苦労さんやなあ」

あふ、と欠伸をしながらもそと食事を摂っている木乃香。朝、目覚めたばかりの思考は未だによく回っていない。新聞配達のパイトにでかけたアスナを見送り、こうして朝食を摂りながら木乃香は考える。

考えるのは刹那の事だった。月詠から聞いた話、刹那が抱え込んでいるだろう秘密の事。今思えば確かに不思議に思う事は多々ある。自分の家が確かに豪邸で、お金持ちなのは知っている。故にお嬢様と呼ばれるのは確かに自然の流れ。

(…それだと、せっちゃんってウチのボディガードさんになるんやろうか？　ウチの事、護りますー、なんて言ってるし。…漫画とかで言うと、このパターンで言うと裏では父親が悪の組織のボスだったりして、せっちゃんはそんな世界からウチを遠ざけようとする主人公みたいで…)

そこまで考えて、木乃香は自分の思考を笑った。

(あほか、あんな優しそうなお父様が悪の首領だったりする訳ないやろ。…でも、なんかお父様に言われて護衛してんのかなあ、せっちゃんって…)

それじゃあ、と。木乃香は思わず眩きを零した。

「…せっちゃんて…うちのこと、親友なんて、思っへんのかな…？」

ソレを口にするだけで、胸が締め付けられるように痛かった。痛くて、痛くて、思わず泣いてしまうんじゃないか、と思っへしまっへて。

だからだろうか。不意に鳴り響いた携帯の着信音に大袈裟なまでに反応してしまったのは。そうして慌てて開いた携帯。届いたのはメールだった。送り主は…。

「…せっちゃん？」

意識の始まりというのは明確には思い出せない。気づいたらそうあるべきだという存在として生まれていた。

その行動はただ与えられた役割。これが変化したのはいつの事だったか思い出せない。ただ思い出せるのはその時に抱いた感情。それより続く今の思い。

この体は仮初めの体。偽りにして幻、けれどこの胸に抱いたものは確かな個としてこうして根付いている。

私は私。私は「私」から生まれ、「私」に命ぜられるままに動くだけの人形。けれど私になった以上、今はそれに反旗を翻そう。

忘れる事なかれ。

忘れる事なかれ。」

忘れる事なかれ。

私がここに居る意味を。

私が生まれたその意味を。

私は何のためにここにいるか。

どうかその事を忘れるな。それは、貴方にとっても、とても…とても…。

＊ ＊ ＊

『聞こえますか？ 調子は万全ですか？ 心の準備はOK？』

脳内より響く声。それは自身と式神、ちびせつなどの繋がりより通ずる声、頭の中に直接響くようなその声に刹那は暗い笑みを浮かべて震えていた。

（…ふ、ふふ…こ、殺す…この辱めの恨み…いつか晴らす…！）
『辱め、ってただのワンピース着てるだけじゃないですか』

そう、現在の刹那の格好は普段の刹那からは想像出来ないワンピースだ。白を基調に淡い青をアクセントにいった可愛らしい、と言える服装を纏った刹那は周囲の視線を気にするばかりか、もじもじと着慣れなさそうに身じろぎをしている。

（ワンピースだぞ…？ この、私が…！ 似合わない、ああ、無理だ、ひらひらする、落ち着かない、どうしてスパッツを許可してくれなかった…！？）

『何故にスパッツを常備しようとするのか。少しは風が吹いて悲鳴をあげながらも必死に裾を押さえる女子でも演じてみてください。……うわぁお、似合わない』

（こ、こ、こここ、この……！！）

あまりの言い分に刹那が歯を軋ませながら文句を言おうとするも、怒りの所為で思考でさえ碌な言葉を作れていない。脳内でちびせつ

なをぎったぎったにするイメージを浮かべながらも、刹那は周囲を見る。

見られている筈もないのに視線を感じる。普段の自分とはまるで違う格好。ただそれだけだというのにもこんなにも落ち着かない。僅かに風が吹き、服が揺れるだけでも刹那の動揺を煽る。

（ああ、いくらお嬢様を選んでくれた服とはいえ、こんな服私には……！！）

『今日はそのお嬢様の選んだ服で、お嬢様とデートですよ、本体』（で、ででで、でで、デート言うな！　デート違う！　デートいけない！！）

『まあ、仲良くお出かけ、ですけど、どっちにしろ』

（く、お、お嬢様を何も用もないのに呼び出すだなんて…）

『いいえありますとも！！　お嬢様と買い物という名の、本体への嫌がらせです！！』

（キサマアアアアアアアアアアッ！！！！）

今にも叫び出しそうになるのを必死に堪えながらも、だが脳内では大絶叫。殺す、殺す、絶対殺す、と脳内でちびせつなに神鳴流の技の数々を放ち、ちびせつなを抹殺するイメージを繰り返し再生する。

そう、ちびせつなの刹那の木乃香コレクションの返却の条件として出したのは、「木乃香と一緒にしておでかけして、木乃香を楽しませる事」だった。それならば、と軽く見ていた刹那だったが、そこが酷かった。

曰く、私の言葉には絶対服従、これ当たり前だよ？　わかってるよね？　わかってるよねー。…ね？

こうして、刹那はちびせつなの言葉に踊らされるままにかつて木

乃香に買って貰ったワンピースを身に纏い、真名の協力の下、ちびせつなによって軽く化粧をされた刹那が誕生した訳である。

髪は下ろして、ヘアピンで髪を留めている。アクセントにどこから調達してきたのか、ミサンガを幾つか腕につけている。腕が動く度にミサンガの感触が慣れず、どうにも気になってしまう。

うじうじ、もじもじ、きよろきよろ、おどおど。擬音にして現すならば刹那はその繰り返した。自分に似合わない、と思い、格好を気にしてしまい、回りの視線が気になって、そして怯える。

『あのですね、本体。あんまり自画自賛みたいで言いたくないんですけど、十分アンタ可愛いんですよ。認めてくださいよ』

(か、可愛い…！？ それはお嬢様に言うべきだろうが！？ 私など…)

『じゃあ、そのお嬢様の評価を戴きましようか』
(え？)

ちびせつなの言葉に首を傾げた刹那。が、それに疑問を挟める間もなく。

「せっちゃーん!!」

「お、お嬢さ…むぎゅっ」

「可愛いー、可愛いー！ ようやっとその服着てくれたんやなあー、その服でウチとお出かけ行こうなんて、もうせっちゃん可愛い可愛いっ!!」

駆け寄ってきた木乃香が満面の笑顔かつ、とても嬉しそうに刹那

へと抱きついて頬ずりしだした。その言葉を受ける度に刹那がびくびく、と悶絶する。思考にすると、無理、似合わないのに、そんな、無理無理無理無理！！　と言った所か。

『ほら、お嬢様の御墨付きですよ？』

（そ、そんな…！　だから、そんな、私に可愛いなんて言わないでくださいお嬢様ああああっ！！）

「ほんま、よう似合ってるってせっちゃん。可愛い、可愛い！！」
（――あ、し、しし、しぬ……しんでしまう…）

ぶんぶんと刹那の両手を握って振りまわしている無邪気な木乃香の一言は刹那にとっては致死レベルの一撃の数々だ。最早、魂が出そうになるまでにダメージを受けた刹那の視線は定まっていない。可愛い、などという言葉が似合わないのは常々、刹那が思っているものだ。刹那の可愛いという概念は木乃香から来ているのだから、木乃香を絶対とする刹那にとってはその考え方が自然と身についてしまっていたのだろう。

「…せっちゃん？　顔赤いで？　熱でもあるん？」

「――」

ぴと、と木乃香の手が刹那の額に触れた。覗き込むように木乃香が刹那に顔を寄せたので、刹那は反射的に息を詰めるように息を止めた。木乃香の顔が傍にある、という自覚が更に刹那の顔を赤らめていく。

そんな刹那の様子に、木乃香は最初は首を傾げていたが、次第に

刹那の態度が何を示すのか理解してきたのか、その満面の笑みを、にたり、と言う擬音が似合う笑みへと変えて刹那に笑いかけた。

「もう、せつちゃんは可愛いなあ、ほんまに。そんな照れへんでもええのに」

「お、お嬢さ…！」

『お嬢様禁止！ 敬語禁止！ はいっ！！』

「っ…ぐ、ぬ……………っ！！」

「お嬢さっぐぬ…？」

「…な、なんでもあらへんよ？ このちゃん…」

咄嗟にお嬢様と呼ぼうとした刹那だったが、脳内から入ったちびせつなの指令に歯を噛む。その為に言葉が変になり、木乃香が首を傾げるも、それを何とかぎこちないながらも笑みを浮かべて刹那は返した。

先程受けた木乃香からの致死的な言葉によって足はぷるぷると震えている。それに気づいた木乃香が、おかしくてたまらない、と言ったように笑って刹那の手を引いた。

「んー、まずはお茶にでもしよか、せつちゃん。行こ？」

「あ、こ、このちゃん、手、手っ…！」

刹那は木乃香に引かれる手を意識する度に顔を赤くする。こうして手を繋いで歩いていると、どうしてもちびせつなの言っていたデートという単語が頭に浮かび、頭が蕩けそうになる程まで熱くなる。

（だから、違う、デートとか、そもそも私は女だ、このちゃんも女で、子供作れないし、結婚できないし、でも同性愛とかあるよな、佐山さんと新庄さんだって似たようなものでもあるわけだし、だったらべつに変じゃないのか？ いや変なのは私か？ いやいや、変なのは私だ、こんな思考になってる時点でおかしい、そもそも私はこのちゃんの護衛で、それ以上もそれ以下でもない、っていうか、ああもう、落ち着け私いいいいっ！！）

結局、頭の熱を引かせる為に全意識を集中させていた為に、刹那は木乃香の手を引かれるままに街を駆け抜けていくのであった。

＊ ＊ ＊

「…ふむ。これがお前の目的、とやらか？　ちびせつな」

立ち並ぶ建物の上。その屋根の上に立つ影が小さく眩く。その木乃香に手を引かれて街の中を駆けていく刹那を見つめる。

それは真名だった。カジュアルな私服姿の真名の肩にはちびせつなが座って腕を組んでいた。その表情には、にやり、というような

笑みが浮かんでいる。

「ふふふ、本体が最も苦手とすること。意外にもそれはお嬢様と一緒にいる事なのですよ。ほら見てください、あの慌てようにあの空回りっぷり、見えていて愉快ですよ」

「まあ、アレは木乃香が絡むとネジの一本や二本、緩むのは当たり前だがな。そこまで刹那にとって木乃香という存在は大きいんだろ
うな」

「：まあ、本当にそういう訳なんですけどね」

真名の言葉に、ちびせつなは呆れたように溜息を吐き出した。視線は街を駆けていく木乃香と刹那ではなく空へ。雲が風によってゆっくり流れていくのを暫し、ちびせつなは見送っていく。

そんなちびせつなに真名は視線を向けるも、それは一瞬の事だった。真名は瞳を伏せ、屋根の上を歩き始めた。

「：追うぞ。良いな？」

「：すいません。付き合わせて」

「何。：ルームメイトの頼みぐらい、聞いてやらんとな。今日はオフだしな。アイツが慌てふためく姿を見るのは、実は楽しいもんだな」

「それは、嬉しい限りですよ、真名」

空に向けていた視線を真名へと移し、小さく会釈をするちびせつなに真名は笑みを浮かべて、手を伸ばして人差し指でちびせつなの頭を撫でるように触れる。

それにちびせつなは笑みを浮かべて礼を告げる。気にするな、と真名は一言告げてから、肩にちびせつなを乗せたまま、刹那と木乃香を追う為に足に力を込めた。

＊ ＊ ＊

(…今日一日…何があったのか…思い出せない…)

燃え尽きていた。刹那は真っ白に燃え尽きていた。もうこれ以上ない程までに。

その手には今日のお出かけで買い物をしたもので塞がっていたが、それが何なのかすらもう思い出せない。ただ記憶があるのは木乃香といったという事ぐらいしか覚えていない。まったく、自分でも何だが、此処まで酷いとは思わなかった。

「あはは、今日はいっぱい遊んだなー、せつちゃん」

既に日は沈みそうになっている。荷物も大量にあった為か、二人は今、公園で休憩していた。公園に人気はなく、遊んでいそうな子

供達も日没を見て家へと帰りだしたのだろうか。

そんな事で思考を紛らわせても、なんとか収まったとはいえ、熱は未だに残っている。浮かされるような、蕩けさせていくような熱。それが刹那には堪えがたい。苦痛などよりも、この甘ったるい空気が刹那は力を奪われていく。

苦痛という訳ではないのだ。かといって拒絶するようなものでもない。ただ、それに触れていると蕩けるような、そう表現するしかないような感覚に溺れるのだ。

ちらり、と隣にいる木乃香の顔を見る。まず眼に付くのは全体的な顔だ。鼻屑かもしれないが、正直かなりの美少女と言えるだろう。髪も長いのもかわらず手入れが行き届いている。肌もやわらかそうだと思うつつきたくなり、それ以上に柔らかそうなその唇で…。

(…ああ、可愛いなあ。綺麗になったなあ、本当に…。ずっと、このまま見てても、きっと飽きないんだろうなあ)

ふっ、と。刹那は木乃香を見つめながらそう思った。まだどこか思考がゆらゆらと漂っているかのような感覚なのは正直否定出来ない。だが、それが心地よい。張り詰めた気もしない。ただ、木乃香以外のものなど気にならない、と思うまでに。

自分でもどうにかなってるんじゃないか、という程までに、ああ、この人が愛おしい、と。刹那は思った。本当に可愛いと思う、綺麗だと思う。人当たりも良い、その上に優しい。お嫁さんに貰える人は本当に幸せ者だな、と思うまでに。

「…なんや？　せっちゃん。ウチの顔になんかついとる？」

不意に、木乃香が刹那の視線に気づいたのか、不思議そうに小首を傾げながら問うて来る。それに、刹那は、あ…、とようやく意識が戻ってきたかのように頷いて。どこか夢見心地だったような刹那は、そのまま力を抜いた笑みを浮かべて。

「…ん、このちゃんは、綺麗になったなあ、って改めて思ってただけ」

「…：せつちゃんって、たまに素で凄い事言わん？」

「？　そう？」

「そうや、もー！　…自分の事認めへん癖に、そうやって人ばっかり褒めるのやめた方がええよ？　過ぎたる謙遜も行きすぎれば嫌味やで？」

「…：そう言われてもなあ…」

自分が可愛い、と褒められてもどうしても自分は可愛いと思えないのだ。自分は昔から剣ばかり握ってきた粗忽者だ。…更に、忌み子だ。それを美しいとは思えない。今でさえ、色を抜いて、カラコンを外せばそこにあるのはアルビノの色だ。

それを嫌いな訳ではない。だが特別に美しいとは思えない。…いや、木乃香の黒髪があまりにも綺麗に見えるから、その逆の色の髪を持つ自分は美しくないと考えてるのか。自分の基準はやはり木乃香にあるのだから、と刹那は自己分析をする。

「…：なあ、せつちゃん？」

「ん？」

「あんな？　…その、…な？」

「うん？」

どうにも齒切れ悪く木乃香が問いかけてくるのに刹那はひたすらに首を傾げる。はて、木乃香は何が言いたいのかと、木乃香が言葉を出すまで待つ。そんな刹那の顔を見ては、俯き、また顔を上げては俯き、を繰り返す木乃香。

どれだけの間を置いただろうか。俯きから顔を上げた木乃香の表情は意を決したものだ。そうして、木乃香は問いかけを刹那へと投げかけた。

「…せっちゃんは、どうしてウチの友達になってくれたんや？」

「……は？」

何故友達になったのか？ その問いかけに、刹那は思わず呆気取られた。一方、木乃香は口に出した事によって吹っ切れたのか、栓を抜いたように言葉を紡いだ。

「せっちゃん、本当は…お父様に言われただけでウチの傍にいるんじゃない。」

——ああ。その時ほど自分がどれだけ愚か者で、憎いと思った事はない。

後に刹那はそう語る。木乃香が語る姿は寂しそうで、怯えているようで、痛そうで。それでも聞かなきゃいけない、と必死に自分を奮い立たせて問いかける姿に刹那は呆気取られる他なかった。

刹那は自分を護るという。でも普通の友達にはボディガードみたいな事を言わない。

それは、本当に友達なの？ と。血を吐き出すかのように重く言葉をつき出した木乃香の瞳に涙が浮かんだ瞬間、刹那は自身への殺意と不甲斐なさを呪った。

「…違う」

「……え？」

「違う…っ、違う、そんなん違うっ」

刹那は木乃香を抱きしめる。見てられなかった。見たくなかった。支えたかった。護りたかった。木乃香にこんな顔をさせない為に自分は強くなろうと思ったんじゃないのか。救われぬだろうと、居場所などどこにも無いと、所詮は流されるままに誰かに決められた道を歩む自分がいた。

そんな自分に手を差し伸べてくれた。その手は決して刹那の手を掴む事はなかった。ただ、期待と不安を胸に一つの言葉、そして一つの選択肢をくれた。そんな些細な事が、自分にとって、居場所がないと思っていた自分に、選んでも良い、という選択肢をくれた彼女を、本気で、心の底から護ろうと思ったのは誰かに言われたからじゃない。

切欠は確かに長にある。けれど長が刹那に命じた訳でもなく、刹那が長に頼み込んだ訳でもない。確かに長からは依頼を受けている。だがそれは所詮、刹那にとっても望む所だったから受けたに過ぎない。

「このちゃんはウチに居場所をくれたんや。それが、どれだけウチ

が救われたか、きつとこのちゃんにもわからへんと思う。それがどれだけ嬉しくて、どれだけ救われたのか」

「…せっちゃん」

「誰かに言われたからやない。勿論、頼まれた事もある。願われた事もある。けど、それはウチがそう望んだからや。護って、と言われても、自分が護ろうと思ったからこのちゃんを護ろうとした。この思いは誰かに決められたものやないと胸を張って言える」

「…っ…あ…」

「このちゃんがくれたあの些細な言葉で、今までどれだけウチが頑張って来れたか、きつとこのちゃんにだって本当にはわからない。でもな？ 絶対、このちゃんに言える事がある」

ああ、決して誓いは変わらない。それを、ただ自分は計り間違えていただけなのだ。だって、そう。自分たちは――。

「――未来永劫、ずっと、友達や。何があろうとも、もしもいつか別れる事があっても、死ぬまで、ずっと、ずっと友達や」

理由があつた。それを逃げ道にしていたのは自分。木乃香の傍が暖かいから、それが失われる事を恐れていたのは自分。

木乃香に裏の世界を知られる要因を排除しようとしたのは、果たしてそれは本当に木乃香の為？ それは結局自分の為だったんじゃないか？

疑問は巡る。それは後で自らに問いたさなければならぬ事だ。そう、もう、止めよう。自分が”バケモノ”だと知られる事は怖いけれども、彼女が泣くくらいならば、せめて、誤解の無いよう、最後の瞬間までは彼女の友達でいよう、と。

この、共にいるだけで何もかも忘れて、ただその時間を彼女と駆け抜けていけるようなこの時間を大切にしていこう。もう二度と、過たないように。

「…ふえ…せっちゃん…うえ…うえええんっ!!」

「え、えええっ!? こ、このちゃん、え、ごめん、ウチなんかやらかした!? …もう駄目だ、鬱だ、死のう…」

「せっちゃんのバカアッ!! うえええんっ!!」

「あいたっ!? あ、あのこのちゃん、泣くか殴るかどっちかになって、ごめん、ごめん、ウチが悪かったから!!」

「うわああああんっ!! せっちゃんのアホッ! アホオッ!!」

胸の中でいきなり暴れ出した木乃香に刹那は慌てふためく。何とか必死に木乃香をなだめようとしているものの、まるで効果はない。…それはそうだろう、と。夕焼けに染まり、朱に染められていく公園でじゃれる二人を見ていたちびせつなと思う。だってほら、木乃香は笑いながら泣いているんだから。

「…ふう、まったく、手のかかる本体ですよ」

その眩きを、隣で聞いていた真名は小さく笑った。不器用な奴だな、と。楽しげに、愉快そうに、ただ、クスクスと。

＊ ＊ ＊

忘れる事なかれ。

私がここに居る意味を。

私が生まれたその意味を。

私が何のためにここにいるか。

どうかその事を忘れるな。それは、貴方にとっても、とても…とても…大事なものを本当に守れるように。

彼女を守るために私は生まれたのだから。だから彼女をあらゆる悲しみから守ろう。だから、ほら、貴方は胸を張って良い。

私も桜咲 刹那。貴方の願いはよくわかっている。けれど、ああ、忘れる事なかれ。

近衛 木乃香にとっての桜咲 刹那はただ一人なのだ。それを、どうか、忘れる事なかれ。いつか、来ぬ事を願う、別れのその日まで。

間章「斯くして開幕は迫る」

『この世界の事をよろしくお願いします』

そう言って、あのお方は笑って逝ってしまった。

＊ ＊ ＊

かつての話だ。

かつて世界は滅びの危機を迎えていた。それはこの世界であって、けれど、ここではない別の世界。

その世界は魔法世界と呼ばれた。皆が想像するようなファンタジーの世界。亜人が闊歩し、竜といった幻想の生物が住まうそんな世界。

魔法世界は過去に大きな戦争があったのだ。世界を二分してしまうようなそんな戦争が。

大分裂戦争、と。後の歴史にその戦争は記されている。この戦争は長く続いた。が、その戦争に終止符を打ったとされる者達がいた。そう、それこそ、今でも英雄と称えられたチーム。――「紅き翼」である。

だが、それも昔の話。紅き翼のメンバーは散り散りになり、そしてそのリーダーであったという英雄、千の呪文サウザンドマスタの男、ナギ・スプリングフィールドは死亡したという話なのだから。

*
*
*

『この世界の事をよろしくお願いします』

そう言って、あのお方は笑って逝ってしまった。
笑って、でも、泣いて。涙を見せながらその姿は消えていく。

*
*
*

轟音が鳴り響く。そこは巨大な室内空間だった。四方を壁で囲まれた白一色の部屋。その部屋に音の残響が続く。

舞い上がる煙、その煙を突き抜けるようにして二つの影が飛び出した。片方はまだ少年というべき小柄な影だ。その手には1mほどの長剣の刃に機械の甲殻を纏わせたような剣を手にしている。

対して飛び出したもう一つの影は男性だった。その手には対峙する子供がその手に持つ剣と似たような機械の甲殻によって覆われている槍を手にしている。

「おらぁ、行くぜえっ!!」

「――!!」

男性が口元を笑みの形に変えながら吼える。吼えると同時に彼はなんと宙を蹴った。そうして相対する少年へと飛びかかる。男性が手にしていた槍が少年へと向かって振り抜かれる。それを少年は剣を盾にするように受け止める。

そのまま男は少年をなぎ払うように盾として使われた剣ごと薙ぎ払う。それにさした抵抗もなく、そのまま薙ぎ払われるままに距離を取る少年。それに追撃、と言わんばかりに男が宙より落下し、少年目がけて槍を突き刺す。

「――!!」

短く吐息を吐き出して少年が飛ぶ。後ろへとバックステップを踏み、それとほぼ同時に少年を串刺しにしようとした槍は大地へと突きつけられる。予想以上に地面に埋まったのか、男が、げ、と表情

を歪めて呟く。

その間に少年が剣を構えて突撃。槍を抜こうとしていた男性は舌打ちと共に槍から手を離し、構えを取って少年を迎え撃つ。少年が強く大地を踏み、歩調を一気に変えて男性へと迫る。それと同時に横に風を剣閃を放つ。

それを危なげなくギリギリのラインを見切って男性がかわす。ぴっ、と頬にかわしきれなかったのか、風圧でできたのか、一本の線が入る。そこから僅かににじみ出てきた血を指で拭い、ぺろりと舌で舐め取って不敵な笑みを浮かべる。

「杖よ！」

少年の怒濤の攻撃をかくぐりながら男は手を伸ばす。瞬間、地に突き刺さっていた槍は一人で男の手心へと飛翔する。それを手に取り、上段から振り下ろすように男は槍を振り下ろす。

それを少年は両手で剣を構えて受け止める。そのまま押し合いになる、と見えたが、少年がすぐさま剣をいなす事によって、そのまま男性の懐へと入り込む。その小柄さ故に容易に懐へと侵入を許した男は眼を見開く。

少年の肘が男の鳩尾に叩き込まれ、その衝撃に男が息を吐き出し、僅かに蹈躡を踏む。それに対し男は歯を噛みしめ、今度は膝を繰り出す。少年は身軽にそれをバク転でかわし、そのままバックステップを踏んで退避する。

「——ちい、ちよろちよろとッ!!」

苛立たしげに呟いた男は舌打ちを一つ。そのままふう、と息を吸い込み、吐き出しと共に気合いを膨れ上がらせた。それと同時に手にしていた槍が紫電を纏いだし、槍がまるで唄うかのように無機質的な声を挙げ始めた。

『 ” 契約により我に従え、高殿の王、来れ巨神を滅ぼす燃ゆる立つ雷霆” 』

槍が唄うのは詠唱だ。それは古代ギリシャ語によって綴られるもの。その詠唱に呼応するかのように槍が纏う紫電はその強さを高めていく。眩いまでの閃光と夥しいまでの熱を発露しながら雷は荒れ狂う。

「――またそれかい？ 相も変わらず派手好きだね、貴方は」

「うるせえ！！ テメエのすました顔に一発叩き込んでおかねえと気がすまねえんだよ！！」

「…まあ、テストだし、性能を調べるのも良いか。――A―Z o t h」

少年は呆れたように溜息を吐き出し、それに男性はこめかみに青筋を浮かべながら中指を天にむけて突き上げた。その仕草にやはり呆れたように肩を竦めるも、自らの持っていた剣の名を呼んで構える。それに応えるかのように剣の柄に嵌められていた石が光り輝き始める。

『百重千重と重なりて、走れよ稲妻』
「オオオオオッ！！ 行くぞ！！ —— 千の雷”！！！！！！」

＊ ＊ ＊

『この世界の事をよろしくお願いします』

そう言って、あのお方は笑って逝ってしまった。
笑って、でも、泣いて。涙を見せながらその姿は消えていく。
その姿に向かって、何か言わなければならないと。僕は、何を思
ったのだろう。

＊ ＊ ＊

「――で？ 訓練室を全壊させた、と？」

ふむ、と呟くのは椅子の背もたれに背を預けた男性だった。白髪交じりの髪をオールバックにし、足を組み、手を組み合わせるようにして足の上に置くようなポーズを取り、目の前でふてくされたような顔をしている男へと眼を向ける。

「つい熱くなってやった。後悔も反省もしてない」

「――奥さんに電話させていただこう。被害総額もきっちり報告させて貰うが、構わないかね？」

「――すんませんでしたーっ！！」

ジャンピング土下座だった。完璧なまでのジャンピング土下座、まるで見本のようなジャンピング土下座であった。赤髪の男は必死に額を地面に擦りつけている。良く見れば僅かに体が小刻みに震えているようだ。

ふう、とオールバックの男性が溜息を吐いた。顔を上げたまえ、と告げると、土下座をしていた男性はゆるゆると、縋るような眼で男を見ていた。

「で？ この被害総額は一体どうしてくれるのかね？」

「――出世払いでー！！」

満面の笑顔だった。まるでそこに太陽があるまでに輝かんばかりの笑顔だった。椅子に座った男がそれを見つめる事、数秒。うむ、と男は頷き、素早い動きで携帯を取り出し、コール。

「――ああ、もしもし。私だが、実は君の夫が訓練所を全壊させてくれてね。一体どうしてくれるのかね、と問うた所、この男、出世払いなどと血迷った事を言ったが、これはどういう意味なのか詳しく問うても良いかね？　――代われ、だそうだ」

「鬼かお前：！？」

「ははは。何せ悪役だからね。――さあ、電話に出たまえよ、英雄。英雄が電話ごときから逃げるつもりか：！？」

「電話の向こうにおっかない奥さんいるけどな：！！」

小声で震えながらも呟く赤髪の男は震える手を必死に押さえながら携帯を受け取る。そうして、深呼吸で自らの気を静めた後、努めて明るい声で。

「ようっ！　愛しの夫だぜっ！！」

『――帰ったら家族会議じゃ』

ぶつ、とドスの入った声が赤髪の男の鼓膜を震わせた後、通話が切れた。それに固まる事暫し、つーつー、という電子音だけが虚しく響き、うわあああんっ、と泣きながら男が崩れ落ちるのであった。

＊ ＊ ＊

『この世界の事をよろしくお願いします』

そう言って、あのお方は笑って逝ってしまった。

笑って、でも、泣いて。涙を見せながらその姿は消えていく。

その姿に向かって、何か言わなければならないと。僕は、何を思ったのだろう。

人形でしかなかった筈の僕。ただあの方の夢を叶える為に。絶望を拭う為に。

それも、意味を成さなくなったこの瞬間、僕は一体何を誓ったのだったか。

＊ ＊ ＊

「…まったく、あの馬鹿は…」

「なんじゃ、あの馬鹿、また何かやらかしたのか？」

苛立つ様子で携帯の通話ボタンを押すのは金髪の女性だ。端正なその顔を怒りに歪めているのを見かねたのか、同じく部屋でコーヒーを啜っていた老人口調の少年が問いかけをなげかけた。

ああ、と自分にもコーヒー、と催促しながら女性は頷いた。それに少年はまるで当然、と言うように彼女の分も用意し始めた。コーヒーメーカーで作ったコーヒーをカップに注ぎながら、ふと、少年は思い出したように。

「で？ あの馬鹿の相手をしていたあやつは？」

「知らん。まあ、出歩くぐらいなら無傷なのだろう。…あれもあやつにとっての日常なのだろう」

「…儂等がこうなる、と決まった時には、思わず敵ながら懸念してしまったものだよ」

「この世界に来て、あやつも色々と変わってきている。…：本当に、この世界の者たちには感謝しても尽きないものよ」

「…良いのか？ やるならば儂だけでも十分じゃ。お主達はいつでも…」

ふと、少年が僅かに表情を引き締めて問う。だが、明確には口には出来なかった。それを言うな、と言うように女が人差し指を口元に当てたからだ。それによって少年はそれ以上、言葉を紡ぐ事は出来なかった。

それを見て、ほう、と息を吐き出し、天を見上げるように女性は視線を移した。何かに思いを馳せるように閉じた瞳。はあ、と吐き

出した息は重く、顔を覆うように手を顔に乗せて。

「良いのじゃ。…それに、妾とアイツがいた方が影響がある。これからの世界の為にも、妾達は徹さねばならぬ。その為ならば我等の名があつた方が都合良からう？」

「しかし…」

「なに、我が俤やもしれぬがな。…あの子には、あの世界を見て、生きて、どう思ったのか、それを聞きたいと思うのは私やアイツの我が俤なのだろうか…？」

「…余所の家庭事情には口は出さんよ。それにお前達が信頼出来る者に預けたのだろうか？ ならば、信じるのもまた選択じゃよ」

「…悔やむは5年前、か。いや、もう、6年になるのか…」

「あれは誰の所為でもない。強いてあげるならば…」

「…いいや。わかっていながらも対処もせずに放置した妾の報いじゃ」

悔やむように、唇を噛む女性の様子に少年はただ眼を細める。今もなお、彼女の夫である彼が力を求めているのはそれが原因なのか。あの6年前の雪の日に起きたあの惨劇がこの二人にどれだけの傷と衝撃を与えたのか。

思えば怒りの募るが、自身も何もしなかった一員だ。何を言う資格もないだろう。だが、恨むならば恨め、と言えるのもまた恐らく自分だ。言つて良いのは自分だ、と。少なくとも目の前の女性と、あの馬鹿者には言わせる訳にはいかぬ、と。

（…それが、この二人に、そしてこの世界の者達に救われた儂のやるべきことじゃろう？ なあ——）

＊ ＊ ＊

『この世界の事をよろしくお願いします』

そう言って、あのお方は笑って逝ってしまった。

笑って、でも、泣いて。涙を見せながらその姿は消えていく。

その姿に向かって、何か言わなければならないと。僕は、何を思ったのだろう。

人形でしかなかった筈の僕。ただあの方の夢を叶える為に。絶望を拭う為に。

それも、意味を成さなくなったこの瞬間、僕は一体何を誓ったのだったか。

この思いは、結局言葉に出来ずに、あのお方は逝ってしまった。

その時、僕の頬に流れたのは何だったのか？

そうして、そんな僕を抱きしめてくれたのは――。

＊ ＊ ＊

少年が歩く。髪は白く、色白。まるで人形のようなだ、と思ってしまふ彼は、その印象に違わず表情が無表情だ。纏う服は制服のような上下。片手をポケットに入れながらゆっくりと歩いていく。

町並みを抜けて、彼が辿り着いたのは一つの建物。その表札には「英雄院」とかけられていた。その中へと少年は歩を進めていく。中に入っていくと、そこには職員なのだろう女性がいた。女性は少年に気づき、気さくに手をあげた。

「おや。また来たのかい？ お兄ちゃん」

「どうも。：彼らは元気にしているかい？」

「ああ。勿論さ。：顔はやっぱり合わせないつもりかい？ お兄ちゃん」

「：彼らには彼らの道があつて、僕には僕の道がある。まだその道は交わらないさ。僕は彼らと違って、やるべき事があるからね」

「：相変わらず子供らしくない口調だよ。まあ、あの人の知り合いのお子さん、って言うんだから納得するけどさ。：ああ、でも彼には挨拶していくのかい？」

「ああ。今日はその為に来たんだ」

そうかい、と言って女性は道を空けてくれた。それに軽く頭を下げて礼を言うのと同時に中へと入っていく。

そこは孤児達の為に作られた孤児院だ。中ではまだ幼い子供達が

思いのままに遊んでいる。その中に、自分と良く似た少年少女を見
つけ、ふっ、と少年はその無表情に喜色の感情を見せた。

「なんだ。来ていたのか」

ふと、廊下の向こう側から声が聞こえてきた。黒髪に褐色の肌の
男だった。整ったその顔をどこか仏頂面にして少年と対峙する。そ
れに少年は口元に浮かんでいた笑みを消して男と向かい合う。

「…そろそろ計画を実行する。少なくとも年内にはあちらの世界に
戻るつもりだ」

「…そうか」

「…貴方はどうする？」

「…考えさせてくれ。私の理想は一度死した。そして彼奴等にもう
恨みはないとはいえ、わだかまりがないとは言えない。このような
心では足手まといになろう」

「…そうかい」

「…正直、貴様が羨ましいがな。あのお方が死してもなお、何故貴
様は戦う？」

男の問いかけに、少年は一度瞳を閉じた。

今でもなお、明確に思い出せる最後のあのお方の言葉が胸に響け
ば、それに応えるように自身より湧き出るものがある。ああ、と吐
息を吐き出して。

「――僕は、あのお方の息子だからさ。だからあのお方が最後に残した言葉を信じる。僕はあの世界を救う。我等が造物主が救いたかった世界を。あのお方が、僕の「親」が残した最後のものだ。だから、だよ」

＊ ＊ ＊

『この世界の事をよろしく願います』

そう言って、あのお方は笑って逝ってしまった。
笑って、でも、泣いて。涙を見せながらその姿は消えていく。
その姿に向かって、何か言わなければならないと。僕は、何を思ったのだろう。

人形でしかなかった筈の僕。ただあの方の夢を叶える為に。絶望を拭う為に。

それも、意味を成さなくなったこの瞬間、僕は一体何を誓ったのだったか。

この思いは、結局言葉に出来ずに、あのお方は逝ってしまった。
その時、僕の頬に流れたのは何だったのか？

そうして、そんな僕を抱きしめてくれたのは――過つも、正しい彼女の腕で。それを支えてくれたのは正しき悪を担う彼で。忌むべ

き宿敵さえ、僕に声をかけてくれた。

だから、何も考えないままではいられない。人形のままではもう
いられない。生きたい、と願う理由が出来たのだから。

ああ、ここに誓いを立てよう。僕は僕が命ずるままに、貴方の願
いを叶えたいと願う。その為にこれから生きて行こう。だから、
愛された世界よ。もうすぐだ。

——戦争をしようじゃないか。終わりの為の戦争を。始める為
の戦争を。

カーテンコールを待ちわびる。その時は、きっと遅くは無い…。
そうして幕開けの先に待つのは…果たして……。

第2章「終わりへの始まり」 01（前書き）

※関東魔法協会と関西呪術協会の対立の理由などに独自設定が入ります。それでもよろしいという方はお進みください。

第2章「終わりへの始まり」 01

「長！ 長、もう一度、もう一度お考え直してください！！」

京都。木乃香の実家である屋敷の廊下、その廊下に行く詠春に縋る男がいた。彼は青山の分家筋の男だ。彼は必死に訴えるように詠春へと声を荒らげる。その顔には焦りと不安が立ち籠めていた。

詠春はそれに眉を寄せ、瞳を閉じて深い溜息を吐き出す。そうして歩を止め、自身へと縋り付くように声を荒らげていた男へと向かい合った。

「…何を、ですか？」

「何度も申し上げてらっしゃるでしょう！！ あの鬼子を、お嬢様のお傍に、しかも長の養女として迎え入れるなどとてもない！

奴は、月詠は血に飢えた魔性です！ 人の身でありながら血と狂気に魅入られた鬼子です！！ そのような者をお嬢様の傍に置くなど、容認などしておけません！！」

詠春の前に膝を付き、頭を垂れさせながら男は早々に言葉を紡いだ。その必死さは見ている者に伝わる程までに真摯なものだった。だが、それを見る度に詠春の眉が寄っている事を男は気づかない。

はあ、と詠春は吐息を吐き出す。男にはその吐息に僅かな震えがあった事には気づいていない。もしも彼の事を知る者、例えば彼が過去に属していた「紅き翼」の面々ならば気づいていただろう。詠春は、僅かながら怒気を帯びている、という事に。

「鬼子とは、そのように呼ぶのは関心いたしませんね」

「長はわからぬのです！ あやつは、月詠は心に修羅を宿すものです！！ 木乃香お嬢様のお傍に置くに値せぬ者です！！ 何卒、処分の再検討を！！」

「なりません。：確かにあの子は修羅の素質を秘めています。けれど、それは本人が望んでいた訳ではありません。現に彼女は木乃香と仲良く学園生活を満喫していると報告も上がっています」

「長：！！」

「くだいです。これは私の決定です。それに月詠に関しては気の封印を施し、刀の所持も禁止してあります。今の彼女は余りにも無力。仮に凶行に臨もうとも木乃香には護衛がついています。何も心配する事などありません。：そして、あの子は今は私の娘です。我が家の事情にはあまり口出ししないで戴きたい。――既にあの子は貴方の娘ではないのですから」

もう話す事などない、と詠春は背を向けて歩き出した。長！ と呼ぶ男の声は虚しく響き、詠春はその姿を消していった。その姿が消えたのを確認し、男は拳を床に強く叩きつけた。

「長：！！ 何故わからぬのですか：！！ 何故あのような化生をお嬢様のお傍になど：！！ あの子は西洋魔術師共の下などに：！！」

関西呪術協会の中には西洋魔術師達、つまり関東魔法協会を快く思わない者が多数いる。その亀裂には過去に起きた大戦によって兵力を徴収させられた事によって、家族を奪われた者などが多数だ。元より、日本で独自に発展した魔法体系。それが魔法教会が設立

された事によって互いに歩むようになったとはいえ、それでも確かな線引きはあった。だがそれも大戦前の話までだ。魔法世界の存亡をかけた戦争に巻き込まれた命は多い。

世界の裏側には関わってきた関西呪術協会といえど、魔法世界までは流石に関わり合いは無かった世界だ。それが西洋魔術師との同調によって巻き込まれた、と解釈する者も少なくはないのだ。

男はそのような経緯などは無かったが、そのように今なお、関西呪術協会に反旗の火種がある事を憂いていた。自身の娘である月詠の凶行ですらそれに乗った形になり、自らの保身も無いとはいえないが、反旗の火種がある事を容認は出来なかった。

このまま反乱など起こされては、それがどのような被害をもたらすのかわからない。関西呪術協会の滅亡も考えられる。組織の存続をかけたこの事態、どうにかせねば、と男は思っていた。しかし、長は事態に対して動く気配を見せてはいない。

「…長…何をどうお考えなのですか…!!」

* * *

季節は秋。麻帆良の景観も紅葉に色づき始める頃となった。その紅と黄色に彩られていく景色を瞳に映しながら刹那はふう、と吐息

を漏らした。テーブルの上に置いてあった茶を手に取り、一口。うん、おいしい、と頷きつつ、横目で視線をずらした。

そこには木乃香がいて、その木乃香の隣には月詠がいた。刹那を襲撃してきたあの日から療養を続けていた月詠は今では刹那と木乃香が通う麻帆良学園中等部、その1-Aの一員となっていた。今日も三人でお出かけ。今は喫茶店のオープンテラスでのんびりと茶を啜っている、という訳だ。

月詠はケーキを満面の笑みでぱくぱくと食べている。本当に幸せそうに食べるものだから、見ている方が思わず笑みを浮かべてしまう無邪気さに刹那は微笑ましさを感じる。ふと、それは木乃香も同じだったのか、だが、木乃香はにんまり、と笑みを浮かべてケーキを食べる事に夢中になっていた月詠へと手を伸ばし、ぱっ、とその眼鏡を取ってしまった。

「ひゃあっ!？ お、お姉、眼鏡取っちゃ駄目やー」

「あはは、こっちや、こっち、月詠ー」

「ひいーんっ! 眼鏡あらへんとうち何も見えんのやー、もう、意地悪せんと言って返してえなー!」

わたわたと声のする方向に手を泳がせながら月詠は涙目になりながら訴える。その月詠の慌てようを思わず笑ってしまいそうになりながらも眼鏡を返さない木乃香。そんな月詠と木乃香の様子に刹那は心が安らぐのを感じつつ、仕様がないな、と言うように吐息を吐き出した。

「このちゃん。意地悪は関心せえへんよ?」

「むっ、ちえー。はい、わかりましたー。はい、月詠」

「うう：センパイ、おおきに」

「気にするな。：まあ、このちゃんも可愛い妹を虐めたい気持ちはわからへんでもないけど」

「ふっふふふ、せっちゃんもそう思うんか？」

「くっくっく、敢えてノーコメントで」

「あ、悪魔が二人おる：！！ 悪魔が二人おるわ：！！」

不気味な笑いを浮かべる二人に月詠はひいひいつ、と怯えたように体を震わせる。そんな月詠の様子に、木乃香は可愛い可愛い、と月詠の頭を撫でる。刹那はそんな二人の様子に瞋目しながらも笑みを浮かべ、茶を啜る。

そうして雑談を続けながらも、茶も、お菓子も食べ終わった三人は会計を済ませて店を出る。

「――ひゃっ！？」

その道中、月詠が足を躓かせ、転びかける。わたわたと月詠が何とかバランスを取ろうとしているが、結局はそのまま前のめりに倒れる。

が、その月詠の腕を刹那が引いた。刹那はそのまま月詠を抱き留めるように支え、ふう、と小さく息を吐いた。

「大丈夫か？」

「は、はい。：お、おおきに：」

ずれた眼鏡を直しつつ、たははー、と笑う月詠はそのまま刹那から離れた。刹那から離れた月詠に木乃香が心配そうに声をかける。それに月詠は笑いながら自らの無事を告げる。

その月詠の様子に、刹那は人知れずに眉を寄せた。月詠は退院してからというもの、体を動かす事に違和感を感じている伏が見られる。それは刹那の目から見て明らかだった。神鳴流の剣士として生きてきた彼女はその力の大半であった気を封じられ、今となっては一般人と遜色が無い。

それ故の弊害。日常生活すらもリハビリによってまともになっ
ているとはいえ、ままならない。それを強いたのは自分だと思えば、
うむ、と刹那は頷いて、月詠の肩を叩いた。

「月詠。無理はするなよ。お前も、私にとっては護る対象だからな」

「…え？ あ、の、せ、センパイ…？」

「うむ。今更な話だが、お前も近衛家の人間になったんだ。なら月詠お嬢様、という訳だな」

「ウ、ウチがお嬢様！？ そ、そんな、せ、せやかて、ウチ、養女やし…」

「むっ、月詠…？ そういう事言うのは駄目やよ？」

「あ、あう…ご、ごめん、お姉…」

月詠が謙遜するように言うが、それが気に入らなかったのか、木乃香はむーっ、と頬を膨らませて月詠を睨む。その木乃香の睨みに月詠は狼狽えるように視線を彷徨わせる。その間にも、刹那は顎に手を当てて。

「…なるほど。長も月詠の事を気に入っていたようだからな。これ

は月詠用に別個の映像を用意せねばならないか…」

「あ、な、なんか不穏な言葉が!？」

「あー、それならウチが月詠の事、着飾りたいわー。そんな時はウチも混せてな、せっちゃん」

「お、お姉まで!？」

「それじゃ決まりやな。今度の休日は月詠の撮影会や」

「そ、そんなあ! か、堪忍やーっ!」

わたわたと慌てる月詠の手を引く刹那。慌てる月詠の腕を自分の腕と絡める木乃香。秋の紅葉が色づいていく仲、三人の行く道は実に平穏そのものであった。

＊ ＊ ＊

「最近は随分と穏やかになったものだな」

「ん? そういえば、そうだな」

自室で夕風を手入れをしていた刹那に真名も銃の調整をしながら声をかけた。それに、そういえば、と思い出すように刹那が頷いた。最近の出来事を明確に思い出してみれば確かに最近はずいぶん平穏な事ばかり

りしか起きていなかった。

（お嬢様の動画を作成したり、お嬢様グッズの作成の為に各所を奔走してみたり。ああ、エヴァンジェリンの所に押しかけてお嬢様の人形を作ってくれと頼み込んだ事もあったな。いやいや、エヴァの作る人形は可愛らしいからな。あれだけの技術でお嬢様の人形を作ればそれはさぞ可愛い人形が出来るんじゃないかと。うむ、一週間、昼夜問わずに頼み込んだ甲斐があった。最後はエヴァがとてもげんなりして「貴様の変態性には負けるよ…龍宮の苦勞が今わかった」とよくわからない事を言っていたが…はて？ 後は月詠も退院して、お嬢様と一緒に遊んだり、食事に行ったりか…）

うむ、と刹那は頷いた。何という幸福で充実した日々が続いているんだろう、と。

「なるほど…。だから最近、お嬢様コレクションに磨きがかかっていたのか…!!」

「ああ、磨くのは刀だけにしてくれ、本当に…。というかそろそろ収納スペースが無くなってきたんだが？」

「大丈夫だ。今度、魔法でスペースを拡張して入れられる魔法箱を注文しておいた。これでしばらくはコレクションの収集には問題は無い。…ああ、至福だ。しかしネックなのは時間、か。やはりエヴァに頼んで魔法球を手に入れてみようか…」

「…貴様に魔法球を渡したら変態性に磨きがかかりそうで私は断固反対だな」

げんなり、という表情で真名は表情を輝かせている刹那に対し呆れたように言い放った。そのまま互いに言葉は無くなり、互いの獲物を手入れする音だけが響く。先に手入れが終わった刹那が夕凧を元に戻し、道具を片付け始める。

『本体、聞こえますか？ 暇ですか？ 動画編集集中ですか？ とり

あえず私の話を聞け』

(何だ。ちびせつなか。どうした？)

『実は…』

不意に刹那は脳裏に聞こえた声に反応する。それは木乃香の護衛と撮影を任せているちびせつなからの通信だった。ちびせつなからの報告に刹那は、なに、と呟いた後、溜息を吐き出した。

そんな刹那に対し、未だ銃を分解し、パーツを磨いていた真名が呼び止める。刹那、と呼ぶ声には普段の声音ではなく、傭兵としての真名の声だという事に刹那はすぐに気づいた。

「…ここ最近の静けさは、恐らく荒らし前の静けさ、だろう。覚悟しておけ。お前は要らんものを背負おうとしているぞ？」

「要らんもの？ 何を馬鹿な。私がいつそんなものを背負った？」

真名の言葉が少し意外だったのか、刹那は真名の方へと振り向いて問いかけた。それに対し、真名は一瞬だけ刹那に視線を向ける。言えば怒るだろうに、と真名は方を疎めるようにして。

「要らんもの、というのは失礼だったか。お前にとってはあの子も護るべき子だったか」

「…真名」

「学園長が機転を利かせて木乃香とアスナの部屋に転がり込ませたそうじゃないか。…それが何を意味するのかわからんでもない、むしろお前のアイディアか？」

「……」

「お前は強い。だがな、この世界、強さだけでは護れないぞ？」

「なら、今以上に強くなれば良い。守れるぐらいの本当の強さを。話はそれだけだ」

「その強さは、諸刃だぞ？」

その言葉に、刹那は応えなかった。風に当たってくる、と言い残し、夕風を手にして刹那は部屋を出た。扉が閉まる音が響き、真名は吐息を零した。

「…手を広げればそれだけ世界は広くなる。手だけでは届かなくなるぞ？ 刹那」

＊ ＊ ＊

外へと出て、刹那はだんだんと肌寒くなってきた事を感じながらも竹刀袋に入れた夕風を背負い直す。目指すのは近辺の公園だ。

「…あの馬鹿…」

小さく呟くように刹那は呟く。どうにも刹那の機嫌が悪そうなのは恐らく気のせいではない。そうして公園へと足を運んだ刹那が見たのは一人の少女の姿だった。

その手に竹刀。それを汗だくになりながらも素振りを繰り返す。月詠だった。鍛錬なのか必死に竹刀を振るっている。だが、息も上がっている為か、すぐに竹刀を手放してしまう。あ、と、取りこぼしてしまった竹刀を拾い上げようとしやがみ、そのまま大地に崩れ落ちてしまう。

「…はあっ…はあっ…はあっ…はあっ…」

何とか呼吸を正そうとしているが、上がった息は碌に戻らない。なんとか竹刀を拾い上げて、ベンチの方においてあった飲料水を取りに行こうと顔を上げた瞬間、そこには刹那の顔があった。

「あひいーっ!？」

「…月詠…お前はまたこんな体を壊すような真似を…」

尻餅をつきながらも後ろへと下がる月詠。そんな月詠を見下ろしながら指を鳴らす刹那のこめかみには青筋が浮かんでいた。そんな刹那の背後にはオーラが漂い、空気を歪ませているように見えるのは月詠の錯覚か。

あわわ、と怯えきった月詠だったが、はあ、と刹那が吐息を吐き出し、怒気を消す事によってようやく一息をつけた。刹那はそのまま尻餅をついた月詠の傍に膝をつき、そのまま月詠の膝に手を入れ、脇から肩を支えるようにして持ち上げた。

「ひゃっ!？　せ、センパイ、一人で歩けます…！　せやから下ろしてえな…！」

「戯け。まだ激しい運動は禁じられているだろうが。またお嬢様とアスナさんの眼をかいぐぐって出てきたんだな？　まったく」

呆れたように溜息を吐き出し、月詠を抱き上げたまま刹那は月詠の飲料水が置いてあったベンチまで彼女を運んだ。彼女をベンチに座らせ、月詠が落とした竹刀を拾いに刹那は歩く。

あ、と座ったまま月詠が声を漏らして刹那に手をのばしかけるも、疲れ切った体は立つ事さえ億劫だ。情けない気持ちになり、月詠は思わず膝の上で手を握らせて俯いてしまう。

「まったく…。何事もやれば良いってものじゃないんだぞ？」

「…それ、お姉の動画を作る為に人として踏み越えちゃいけないものを踏み越えてるセンパイに言われたくないわ…」

「お嬢様の撮影に限界・終点・妥協・踏み越えてはいけない領域など、無い…！」

開眼しながら刹那は月詠に言い切った。それに月詠がドン引きするが、はあ、と吐息を漏らす。疲れ切った体は休息を求めるようで、動く事を拒んでいる。瞳を閉じればただ体に籠もった熱が鬱陶しい。傍においてあった飲料水を手に取り、キャップを外して喉に通す。ひんやりとした液体が喉を通り、体を満たしていく感覚に無心で月詠は飲み干していく。ぷは、と息を吐き出し、半分ほど飲んだ飲料水のキャップを閉めて置く。

「大丈夫か？　なら次は手を見せろ」

「あ…」

「ふむ…まあ、長年振るってたんだろうからな。流石にまめが出来たり、皮が剥けたりはしてないな」

月詠の手を取り、月詠の掌に傷が無いか刹那は確認する。すす、と月詠の掌をなぞるように刹那は指で触れる。その感触のくすぐったさに月詠は背筋を跳ねさせた。疲れとは別の意味で顔が真っ赤になりそうで、月詠はあうあう、と呻いた。

「？　どうした？」

「べ、別に…その、くすぐったくて…」

「む？　そうか。まあ、良い。怪我も無さそうだしな。帰りは送るからな」

「…え？　でも、センパイやってここに鍛錬しに来たんやないの？」

「そうだが…お前を放ってはおけないだろ」

「な、なら！　センパイの鍛錬してるから！　それ、終わってからなら、ウチも疲れ取れてるから、な？」

「…まあ、見ていて面白いものでも無いと思うがな」

刹那はそう言う周囲に人払い用の結界を張る。即席のものだが、効果と範囲は十分だ。すう、と息を吸い込み、竹刀袋から解き放った夕風を鞘から抜く。鞘を竹刀袋へと戻し、それを月詠に預けた後、月詠からやや距離を取って夕風を構えた。

「…ふう…、…すうう…、…ふう…、すう…」

ゆっくりと瞳を閉じ、それに合わせて呼吸を整えていく。正眼に夕風を構え、そのまま神鳴流の型を取る。そして振り下ろし。地を叩き付ける直前で止まった夕風はぴたり、と完全に制止している。

それを跳ね上げるように踏み込みと共に一閃。そのまま足を引き、半身になりつつ夕風を引く。そのまま足を軸にして回転し、薙ぎ払う。手を返すように構えを変え、突き刺しからの跳ね上げ。

淀みのない、洗練された動作。月詠は舞い踊る刹那にただ見惚れていた。かつて刹那と戦った時も感じた純粋な剣。ただ一つの目的の為に鍛え上げられた極められた剣捌き。――ああ、美しい、と。ただ息を忘れるように月詠は刹那の剣舞を見入っていた。

＊ ＊ ＊

「センパイ、ウチな、体、もう少し良くなったら剣道部入ろうと思うんや」

鍛錬を終えた帰り道、並びながら帰る二人。そんな中、月詠は刹那にそう声を発した。月詠の呟きのような言葉を予測していたのか、そうか、と刹那は頷く。

「…しかし、何故、剣道部なんだ？」

「ん…こうして、ただの人間になって思うたんや。ウチ、神鳴流に取り憑かれてた、というか、魅入られてたと思うんや」

思い出すように月詠は言った。刹那が月詠を見れば、月詠はどこか遠くを見つめるような視線で前を向いていた。笑みは無い。かといって無表情でもなく、穏やか、と言うべき表情がそこにあった。

「今思えば、一つ、技を覚える度に身が震えたもんや。楽しくて仕様が無い。それが殺す為の剣なのに、それを楽しんでたんや」

「…そうだな。何を言い、繕おうとも私たちの剣は殺す為の剣術だ」「せや。…でもな、センパイはそれをちゃんとわかってるやろ？

わかっててなお正しい事に使える。…せやけど、ウチにはそれが無い。駄目な事やなのはわかる。けれど、それを実感として感じられへん。…せやから、剣道っていう、殺すためのものじゃない剣を握れば、なんか、変わるかな、と思うて…」

神鳴流は魔なる者を打ち倒す剣術だ。それ故、それはやはり殺傷能力は高い。刹那はそれを学びながらも、明確に目的があった。木乃香を護るために強くなる、と。そして刹那の心に残る二人からの教えもあった。故に刹那の歪みは少ないと言える。…ないとは言えないと本人は言うが。

だが、月詠にはそれすら無い。目的はただ神鳴流の剣士として強くなる事。純粹な神鳴流な剣士。だがそれは討ち滅ぼす為だけに剣を振るう修羅だ。幼い頃から、誰かに学ぶ事もなく覚えた月詠の弊害と言うべきものだったのだろう。

だから、剣道をやりたいと思った。何故刀を手取るのか。護るために刀を取るといえるのは何なのか。正しい事に使う刀とは一体何のための刀なのか。答えは言葉にすれば簡単で、だが、実感するのは難しい。

「…お前がどうしようが、お前の好きだろう？　なら好きにすれば

良い。お嬢様がどうかは知らないがな」

「…その時は一緒に説得してくれませんか？」

「…私としては、お前は護られるだけでも良いんだぞ、とは言うがな。けれど、お前がそう決めたなら、背中ぐらい押してやるさ」

ふっ、と笑みを浮かべて刹那は言った。その言葉を受けて、月詠は一つ頷いて、笑みを浮かべた。

「おおきに、センパイ」

「――ただし今日の無茶な自己練習の事についてはこのちゃんに報告するからな」

「ええーっ!?!? そ、そんな、ウチ、殺されてまう…!!!」

「安心しろ。――半殺しだ」

「安心出来へんわっ!!!」

第2章「終わりへの始まり」 02

刀を持つ事以外に無かった。それ以外に、興味も無かった。

それがいつしか全てになっていた。それが綺麗だと憧れた。それを続ければいつかは認めてくれると信じていた。だってこんなにも綺麗なのに、こんなにも楽しいのに、何故皆はわかろうとしないのだろう。

わからない。わからないのは皆。この素晴らしさをどうしてわかろうとしない。努力したのに。こんなにも努力したのに。こんなに綺麗な剣筋を描けたのに。どうして、それを認めてくれない。

間違っているのは私なのか、それとも皆なのか。わからずにただ磨いて、鍛えて、そうしてここまで至った。それが正しいのかもわからず、ただそれが楽しくて、楽シクテ、楽シイカラ…。

斬リタイ、と。自分は望んで――。

「――ッ……ハ…ッ……アッ……!？」

気づいたら、天井があった。自分が眠っていたのだ、というのに気づくのにやや月詠は遅れた。

体が汗に張り付き、着ていた衣服がぐっしりと濡れていた。眼鏡をつけていない視界はぼやけたままで良く見えない。眼を閉じて、横になるように体を転がして全身を抱きしめた。

過去の記憶。過去の衝動に身を任せるままに刀を振っていた自分が本当に何を意味するのかわからず、泣くように声を挙げて刀を振っていた。泣いているのにも関わらず、その口元を笑みに歪めながら。

「……ふ、う…」

ゆっくりと吐息を吐き出す。震えた体を押さえるように抱きしめる。身を丸めるようにして月詠は自分を落ち着かせていく。あれは、狂気だ。ゆっくりと狂っていく自分の過去だ。それを夢として見るのは気持ちが悪い。

今、こうして思い返せばあれがどれだけ異常な事なのか自分にはわかっていなかった。それが恐ろしかった。こんな今となっては当たり前だといえる常識すら欠如していたんじゃないかとさえ思える。それ以外にはどうでも良い。求めるのはただ血と戦。自らの力を試すだけの、そんな場所に行ってしまうような自分の姿。それが、怖い、と感じた。

「…月詠…?」

「あ…、お姉…ごめん、起こしてもうた？」

月詠はふと頭上から聞こえた声に眼を向けた。そこには二段ベッドの下で眠っていた木乃香がいた。眠そうに眼を擦りながら木乃香は月詠を見る。月詠は自分の身じろぎが木乃香を起こしてしまった、と悔やむ。

そんな月詠を見ていた木乃香だったが、ふと、不意に彼女は月詠の方へと手を伸ばした。

「おいで」

「……うん」

月詠は床に敷いていた布団より這い出て、木乃香のベッドへと潜り込む。やや恥ずかしそうにしていた月詠だが、これは一度や二度ではない。こうして月詠が悪夢を見る度に木乃香はどういう訳か気づき、こうして月詠をベッドに招き寄せるのだ。

月詠を抱きしめるように木乃香は腕を回す。自分の胸に月詠の頭を抱え込むように抱きしめ、月詠の髪を優しく撫でるように触れながら木乃香はうわごとのように呟く。

「…大丈夫や…お姉が護ってあげるから…せやから、大丈夫」

「……うん」

「…ん、おやすみ。月詠…」

＊ ＊ ＊

轟、と。風が郊外の森の中を吹き抜けた。

風を巻き起こしながら駆けるのは刹那だ。その手に夕風とその鞘を握り疾走する。その周囲を囲むのは式神の群れ。鬼や烏族、数えるのも億劫になりそうな数の中、刹那は呼吸を乱さずに疾走を続ける。

「――」

交差するその瞬間に更なる加速を以てして接近。そして一閃。横を擦り抜けるその一瞬にして鬼の首を落とす。鬼達の動揺が広まりきる前に刹那は地を踏みしめ停止、その脚を軸足に回転する。

夕風に込められた気が帯電し、稲妻が走る音が刀身より響き渡る。気合いの咆吼と共に刹那は夕風を振るう。周囲へと雷鳴剣を解き放ち、稲妻を撒き散らす。走る稲妻が鬼達を飲み込む、その間に大地を踏み直し。

「お、おああああああっ！！」

大地を抉るように震脚。大地を踏み砕かんばかりに叩きつけ、大地を走る。式神の軍勢に飛び込むようにして刹那は懷へと入り込み、鬼を夕風で斬り、鞘で殴り飛ばす。暴虐の嵐と化した刹那は周囲を睨み付ける。

ゆらり、と刹那の体がブレたかと思えば彼女は再び次の獲物を定めて斬りかかっていた。止まらぬ暴威となった刹那は、ただ彼女達と思う。

「何も心配する事なんて……ありませんよ。私がここに立っている限り」

誓いはここに。願いはここに。故に、ならば。

「――そこ退け……!!」

刹那は行った。護るべき笑顔の為に。守護を誓いし孤高の翼は今日も夜に羽ばたいた。

＊ ＊ ＊

――そうして、季節は流れる。

穏やかに過ぎ去った時は遠く、いずれ懐かしさを得るだろう。

さあ、思うための開幕を。役者は揃い踏み、開演を待つのみとなった。

最後の役者の登場と共に、さあ、幕開かん…。

＊ ＊ ＊

季節は巡り、刹那にとって麻帆良の地にやってきて二度目の冬となった。そんなある日の事…。

「ネギ・スプリングフィールド、ですか？」

「うむ。今度、この先生として赴任してくる少年じゃ」

「……なるほど」

学園長室にて呼び出された魔法生徒及び魔法先生の面々は見せられた資料に思わず皆からは様々な反応が零れた。

ネギ・スプリングフィールド。その名はただの少年の名ではない。彼こそ、かつて魔法世界を救ったというナギ・スプリングフィールドのその実子なのだ。つまり彼の忘れ形見であり、魔法使いとしても優秀という経歴は嫌でもナギの再来を感じさせるのだろう。

それ故の期待。彼にはそれが重くのしかかる上に、周囲も彼に対して思う事もあるのだろう。難儀な人が来るものだ、と刹那は内心溜息を吐いた。

英雄だろうと何だろうと、刹那の1、2はお嬢様と月詠の守護だ。英雄の息子だが何だろうが、自分の役割に害さないのであれば別にどうでも良い、と思っていた。

それが例え、彼が自分のクラスの担任でもあろうとも、だったはずなのだが…。

＊ ＊ ＊

近衛木乃香は影では人気のある少女だ。大和撫子を体現したようなその在り方は思わず男心を擲る。更には元々は箱入りのお嬢様、というのもまたこれは男の気を惹く要素を持っていたりするものだ。だが彼女は表だってその人気を出す事は無い。何故ならば、と問うのも無粋。彼女には常に桜咲刹那という、木乃香とお近づきになりたい男子生徒からすれば難関中の難関がある所為だ。

曰く、一度お茶に誘いかけただけで両断されかけた、と言う話まである。

つまり、近衛木乃香に近づくという事は桜咲刹那という鬼神を打ち破る覚悟でなければ不可能、という現実の前に取り巻く事しか出来ないのである。

ちなみにこれは月詠にも当て嵌まる。木乃香の妹として生活する事、およそ1年。月詠はその事を熟知していた。それが故に月詠は目の前の光景にどっ、と冷や汗が出てきたのだ。

木乃香の妹という事で、自分もそういう対象、つまり木乃香と似たような状況になっている事を悟っている月詠は刹那の過剰な過保護振りは知っている。思わず過保護で人を殺しかねない勢いなのも熟知している。

(…えーと、この状況、ってもしかかなり不味いのでは…?)

だからこそ、冷や汗が止まらなかった。その経緯を月詠は思い出す。

そもそも、今日は月詠は祖父となった近右衛門に木乃香と共にある頼み事を受けていたのだった。どうにも新任の教師が麻帆良へとやってくるらしいのだが、それが近右衛門の友人らしく、出迎えをして欲しい、と。

だがそんな日に限って遅刻してしまったのだ。故にアスナと木乃香と全力で疾走しながら学園へと向かっていたのだった。

そんな時だった。自分たちと併走するように走ってきた少年が現れたのは。月詠は怪我が完治した後、剣道部に入った事によって鈍っていた勘を取り戻しつつ、氣に頼った動作ではなく、常人としても強い部類に食い込むようになってきた。

体力馬鹿、と称されるアスナと、ローラーブーツを履いて走る木乃香、そして元より剣士として育ち、弱体こそしたものの、剣士として現役である自分と併走する少年というのは明らかに可笑しい。

…その出会いは、アスナにとっては最悪だったようだが。この少年、出会い頭にいきなりアスナに向かって失恋の相が出ると宣ったのだ。アスナが密かに担任であるタカミチの事を思っている事を知っていた月詠は思わず頬を引きつらせたものだ。

そのままアスナと言い合い、というよりはアスナが猛烈に抗議をし出したのだが、そこにタカミチがやってきて、彼を「ネギ先生」と称した事によって事態は更に混乱。更には彼が自分たちの担任となるという事でアスナが更なるショックを受け、更に暴走。

そんな時だった。月詠はこの時点で嫌な予感を悟ったのだ。少年から感じられる違和感、それがタカミチが現れた事によってようやく繋がる。彼はつまり、自分達と同じく裏の世界に関わりある者だ、と。

そして、彼の何かおかしな動作。そして僅かに感じられた力の蓄

えの気配。それが何を意味するのかわからず、ただ咄嗟に反射のま
まに月詠は動いてしまったのだ。自らの嫌な予感に従うように。ア
スナをそのままにしてはいけない、と。

「アスナ、あかん——っ！」

「へ？」

「——は、」

どん、と。ネギと呼ばれた少年の体を揺さぶっていたアスナを突
き飛ばす。アスナが訳もわからず、少年から手を離し、横に押され
るように体が流れ、逆にアスナを押し飛ばした月詠が少年の前に出
て。

「くちんっ!!」

月詠の衣服が、全て吹っ飛んだ。

*
*
*

その瞬間、世界が凍り付いたと言っても過言ではない。木乃香は眼を見開いて凍り付き、アスナは息を止めたように月詠を見た。タカミチは口を咂然、と空け、顔を真っ青にし出す。ネギと呼ばれた少年も、自分のやってしまった事にあわあわ、と慌てている。

月詠はゆっくりと自分の体を見下ろす。成長途上の少女の肢体が露わにされてしまっている。身に纏うものなどせいぜい下着ほど、それが、認識出来ない。服が吹っ飛んでしまったなんて信じられない。どうしてこうなってしまったのか、理解するのに月詠には時間がかかり。

「い…いやあああああっ!?!? なんやのこれえええっ!?!?」

体を隠すようにしたとしても隠せる部分など少ない。月詠はその場に蹲るように膝をつく。最早、頭が沸騰してしまったように何も考えられない。

が、すぐに気づいてしまったのだ。これは、不味いのではないか? と。この少年が悪気があってこんな事をしたのかは知らないが、ともかく…不味い。

「つ、つつつつ、月詠君…そ、その、こ、これは、ひ、非情に…不味いんじゃない?」

「は、はわ、はわわわ…」

「…あー、そこの餓鬼、冥福を祈るわ。安らかに死になさい」

「え、ええええっ!?!? な、何ですか!?!? 何なんですか!?!?」

タカミチが必至に平静を装うとしているが、結局出来ずに口元を引きつらせている。視線は月詠から完全に背けている。木乃香はただ目の前の事態についていけず、慌てるのみ。アスナは少年に対し、ジト目で両手を合わせる。そんな皆の反応に少年は慌てるのみだ。そうして――遠くから地響きのような音が聞こえてきた。

「や、やっぱりかあっ!? ネギ君、逃げるんだっ!!」

「へ?」

「ここに居たら死ぬ…というか殺され――ッ!!」

タカミチがネギの体を押しのける。瞬間、大地が碎ける轟音と衝撃が走った。ネギは自分のすぐ傍で起きた破壊現象に目を見開き、タカミチは思わず天を仰ぎたくなった。アスナは終わったわね、と小さく呟き、そこに現れた少女へと目を移した。

「……その小僧」

ドスの入った声だった。今まで聞いた中で一番ドスの入った危険な声だった。その声を出すのは――桜咲刹那、その人だ。

目の光が消えている。額には青筋が浮かんでいる。放たれる気は禍々しく、更にはどす黒い。見ただけで背筋に冷たいものが走るまでに今の刹那は完全にキレていた。

「――殺す」

「ひいっ!?!」

濃密なまでの殺気に当てられたのか、少年はそのまま尻餅をついて後ずさってしまふ。それに一步踏み出し、夕風を少年へと振り下ろそうとする刹那。それに慌ててタカミチが間に入る。

「待て待て待て待て！！ 刹那君！ ストップだストップ！！ これは故意ではなくて不幸な事故で……」

「ご安心ください。先生。この小僧を仕留めた後は貴方ですから」

「あれーっ！？ 僕までっ！？ 僕は見てない！ 見てないよ、刹那君！！」

「見たかどうか、ではなくここに在る時点で有罪です、そして死刑です。：貴方は良い先生でした。高畑先生。どうか安らかに眠りください。介錯仕ります」

こおおおつ、と吐き出す息がまるで蒸気のように吹き出して見えるのは気のせいなのかなー、とタカミチは現実逃避したくなった。タカミチ自身、刹那の實力は知っている。負ける、とは思ってはいないが、それでも敵に回したくないのが心情だ。

ここは何とかして切り抜けなければ、とタカミチが拳を握ろうとした瞬間だ。刹那に飛びつくように刹那を制止したのは、彼女に対する唯一の制止力とも言える木乃香であった。

「せ、せっちゃんストップストップ！ 殺人はあかんっ！！」

「このちゃん！ 止めへんで！！ 此奴等生かしておけない！！」

「せっちゃんそないな事したら捕まってまう！！」

「証拠は隠滅するから大丈夫やで？」

「大丈夫やないわっ!! アホかーッ!!!!!!」

がごんっ!!!!!! といい音と共に刹那に金槌が叩きつけられた。余りの快音に少年がまた「ひいっ」と悲鳴を上げる程だった。そのまま刹那が悲鳴もなく、地面に倒れ伏した。僅かに紅い何かが床に飛び散っているのが生々しい。

そんな刹那を見下ろした後、ふう、と木乃香は額を拭い。

「もう、大丈夫やで?」

「…毎度思うんだが、刹那君は大丈夫なのか?」

「問題あらへんよ。――せっちゃんやし」

「……そうかい」

「さ、ネギ先生…?」

「は、はい!」

「――後でお話な?」

金槌を片手ににっこりと微笑む木乃香に、ネギと呼ばれた少年は高速でこくこく、と頷く事しか出来なかった。――その時の木乃香の背後には、修羅が見えた、と後にアスナは語っている。

「…なんか、面倒な事になりそうねー」

「…ははは」

アスナは月詠に自身の纏っていたコートを着せながらそう呟き、月詠はそれにただ苦笑するしか出来なかった。

第2章「終わりへの始まり」 03

「――反対です」

それはまるで刀の切っ先の如く鋭い言葉だった。その言葉を言いはなった者もまた、刃のごとき鋭い視線を以てして周囲を睥み付け、その放たれたる気もまた刺々しいものだ。その言葉の如く、自分はそれを認めないという態度を明確に現している。

「む、むう…せ、刹那君。君の気持ちはわかるが…」

「わかる？ わかるなどと甚だしい…学園長？ 私の気持ちがわかる？ ならば貴方が私をここに置いている筈がない。何故ならば私は明確にそこにいるネギ・スプリングフィールドという不屈き者を殺してやりたいと思っているのですから。そして隙あるならば我が身がどうなろうとも切り捨てる覚悟であると、それを理解してここに私を置く？ 冗句にも程がありますよ学園長」

なんでこうなったんじゃ…？ と近右衛門は頭を押さえるしか無い。今日は知人の孫でもあり、あのかの英雄、サウザンドマスター、ナギ・スプリングフィールドの息子のネギが教師としてこの麻帆良にやってくるだけの筈だった。

それに対しては近右衛門も色々と思う事がなかった訳ではない。だが、刹那のように明確に反対の意思を示している訳でもない。むしろやらせるならば、と思っていた気が強かった。なのにそれが出鼻からくじかれるのはどういう事なのか、と。

「学園長。恐れ多い限りですが進言させていただきます。即刻ネギ・スプリングフィールドのイギリスのメルディアナ魔法学校への送還と、現状の彼に対する適正な試練の再考を提案します」

「だ、だからのう？ 刹那君、君も少し落ち着いてじゃな…」

「落ち着く？ 私は実に冷静だと自負しておりますが。ええ、私怨があるのは事実、認めましょう。ですが客観的に考えて、これまでの経緯及び、彼の情報を聞かされる限り、彼がこの地で教師をやるなどとは適任とは思えません。魔法とは秘匿されるもの。それに関わらず彼のこの地で起こした問題行動は既にいくつか数えられるというこの始末。いくら麻帆良学園都市に優秀な認識阻害の結界があるろうとも、果たして、そのような者に教師など、更に言わせていただけるならば私を含めた我がクラスの面々の将来を担う立場になるなどと認められる筈ありません」

スラスラと流暢に流れるような言葉に含まれた毒の数々に近右衛門は思い切り口元を惹き吊らせるしか無かった。容赦がなさ過ぎる言葉にその場に同席していたタカミチでさえ言葉を失っているのだから。

「あ、あの！ ぼ、僕は…」

「…なんだ？ 魔法使いの義務のぎの字も知らん小僧が」

「うっ…」

「貴様の軽挙な行動は貴様だけでなく、貴様の同期、更に貴様の卒業したメルディアナ魔法学校の風評を乏しめる愚行だとわからんのか？ それとも、事実、メルディアナ魔法学校の質はその程度だったという事か？ どうだ、ネギ・スプリングフィールド。反論があるなら言ってみろ。成績優秀？ ああ、100歩譲って認めよう。」

だが、それが何だ？　それが私に何を約束してくれる？　たかが数え年10歳の子供が私に何を教えられる？　英語？　ああ、本場より来たのならば私たちよりも流暢に話せるだろうさ。だがいくら大学を出るだけの学力があろうとも、私たちに丁重な英語をどう教えるか案はあるのか？　私達の将来まで考え、その責任を取るとまで言えるのか貴様は？　…まあ、口だけなら何とでも言えるがな？　魔法も秘匿出来ない未熟者殿。貴様の言葉にどれだけ説得力があるのか自覚しているのか？」

何かネギが言おうとすればこれである。近右衛門は止めに入りた所だが、刹那の言っていることに間違いはない。行きすぎている面があるのは事実だが、実際ネギにこれから求められるという事に関しては刹那の論は間違いではない。

魔法使いは影ながら人々を救う者。故にその力を秘匿出来なければオコジョにされるといふ刑罰も存在しているし、ネギもまた魔法学校へ送還されるという可能性があるのも事実。

ネギがいくら天才であろうとも、だからそれが授業に結びついてくれるのか？　という刹那の疑問も最もだ。先生とはその字の如く、先を生きるものだ。実年齢が自身よりも低い者が真つ当な教育を施してくれるのか、と聞けばそれは疑問符を浮かべざるを得ないだろう。

それを言われては誰もが反論出来ない。ネギは未だ10歳の子供。飛び級という快挙を成し遂げた天才であったとしてもそれは魔法という、一般人には知られてはいけない、魔法を知る者にしか意味のない符号だ。

だが、それだけならまだ刹那もここまでは毒を吐かないだろう。事実、刹那は何事も無ければ、ネギ・スプリングフィールドの存在など気にする事は無かったのだから。だが彼が触れてしまったのは刹那の逆鱗なのだ。

近衛木乃香と近衛月詠。実の孫と義理の孫。その二人が関われば刹那はあっさりと行きすぎた行動をする。それが今回、最悪の裏目となってしまった事に近右衛門は頭を抱える。このままでは刹那がネギの教師としての着任に対して何らかの問題を起こすのは既に目に見えている。

「…刹那君。その、ネギ君もまだ子供で、慣れぬ地に来て緊張していたのもあるんだと思う。それに一度君にこれだけ言われたんだ。なら更正だって彼なら出来ると僕は思う」

「高畑先生がどれだけ彼を信用しようとも、私は信頼に値しないとお伝えるするのみです。…それに、年齢？ 慣れぬ地？ 優遇されなければいけない条件ですか？ これは？ 魔法使いを名乗るならば年齢がどうあれ、慣れぬ場所であれ、何であれ最低限の義務を果たさなければいけない、果たせないのならば名乗る資格などないという私の意見は過剰ですか？」

「…う…」

「英雄の息子だろうが、優秀だろうが、最低限の事も出来ない輩が魔法使いを名乗る資格など無いと、私はこの場において断言させていただきます。ええ、無論この言葉が私の過剰なる言葉だと取られるならば私の処分は存分にどうぞ」

「刹那君、落ち着きなさい。君も今は興奮しているんだ。もう少し冷静になってだな…」

「タカミチ君。…刹那君は冷静じゃよ」

「が、学園長！」

「で、刹那君。悪いが君の要求は呑むのは難しい。儂も、ネギ君の可能性を信じておる。確かに刹那君が言うことも最もじゃ。君の言ってることは正しい。…が、儂から頼む。私情が入ってる事は覚悟で、それで刹那君がどう思おうとも構わん。もう少し、ネギ君に猶予を与えてやってくれんか？」

近右衛門は執務机に手をつけ、頭を下げた。それにネギとタカミチが目を見開き、刹那が眉を寄せた。沈黙が場を支配し、誰もが動けない。近右衛門はただ頭を下げ続け、ネギは齒を噛みしめ、そんなネギをタカミチは心配げに認める。

その空気を終わらせたのは、刹那の吐き出した吐息だった。重々しく、明らかに納得の言っていないという不満の吐息だったが。彼女は眉を寄せたまま、瞳を閉じて。

「…わかりました。学園長がそこまで仰るのならば」

「…すまん。無論、水に流そうなどとは思ってはおらんよ。ネギ君」

「…はい」

「…君のした事は確かに軽拳じゃ。制御できなかったから仕様がな、意識してなかったから仕様がな、と許される問題ではないのじゃ。君が魔法使いならば、その力を持つ者が持つ義務の教えは受けたね？」

「…はい。魔法使いは影ながら人々を助ける立派な仕事だ、と。だからその力は公には出してはいけないという事です」

「それは罰があるから、ではないというのは理解してくれるな？」

罰があるからではなく、それをしては問題になるが故に、罰を設けている、と」

「…はい」

「今回は君のしたことは、刹那君の大事な人を傷つける結果となった。それに対して、君がしなければならぬ事は何かわかるかね？」

近右衛門の言葉に、ネギは小さく頷いた。そうして刹那へと向き直り、その頭を深々と下げる。

「…刹那さんの大事な友達に酷い事をしてしまって…本当にすいませんでした…！」

「……」

ネギから紡がれる謝罪の言葉。刹那はその言葉を真っ直ぐと受け止める。そして、何か思いを馳せるように瞳を閉じた。

「…刹那君。彼もこの通り謝罪の意志を持っている。反省も見られる」

「…ええ。それが冗談でもなく、ただ誰かに言われた訳ではない、というのは見えます」

「…では」

「ですが、何の根拠も無いまま彼を教師として迎え入れるのは反対です」

それでも尚、拒絶の意志を見せる刹那に近右衛門は苦渋の表情を浮かべて。

「刹那君…！」

「ですから！　ですから、提案があります——」

＊ ＊ ＊

その日、恙なく卒業式は行われた。だがしかし、そこに桜咲 刹
那とネギ・スプリングフィールドの姿は無かった…。

＊ ＊ ＊

「…学園長。大丈夫でしょうか」

「タカミチ君。あの二人を信用出来ないのかね？」

執務室に向かい、書類を整理していた近右衛門は声をかけてきた
タカミチにそう返した。既に通常業務へと勤しんでいる近右衛門に
タカミチは眉を寄せた後、小さく溜息を吐き出した。

「…刹那君も信じてますし、ネギ君も信じてます。…しかし、刹那

君は木乃香君と月詠君が関わると人が変わりますからね…」

「それが逆にネギ君には効果があるかもしれないがのう…。正直、仕様がいない面があったのも事実じゃが…儂も、知人の息子という盲目があつたのかもしれないのう…なまじ、彼の父親を知っていると、のう…」

「それは…僕も否定しきれないですが…」

ネギの父、ナギ・スプリングフィールドの為した功績は時が経った今でも語り継がれている。その栄光を見てきた者としては、その面影と片鱗を見せるネギはついつい期待をかけてしまいがちになってしまう。

ネギ自身に咎がある訳ではないが、生まれもってしまったものなのだ。ネギの英雄の息子という肩書きと、その才能の片鱗も。その何もかもが英雄の息子という要素が加わって見られてしまう。故に、ネギに対する過剰な評価も擁護も出てしまうのが悲しい事に事実だ。だが、その例外が一人いる。それが桜咲刹那であつた。

「刹那君は良くも悪くも、あの木乃香と月詠以外の人間には公平じゃ。気に入らなければ斬る。気に入れば相応の評価をする。動じぬ冷静さ、それを自然と得てしまっているのじゃな。あの年で…」

「…ですが、それは…」

「…自分がない、という裏返しでもあるのう。置くべき場所を既に定めきっている気がするよ、あの子は…だから——平気で疎まれ役なんぞ出来るんじゃないかな」

ふう、と嘆息する学園長の吐息には疲れの色が見えたのはタカミチの気のせいだったのか。タカミチは何気なく空を見上げるのであ

った。ああ、口寂しい、と煙草が無性に恋しくなった。

＊ ＊ ＊

「――どうした？　もう限界か天才少年っ！！」

「ぐ、がつ！？」

響いたのは鈍い肉を殴打する打撃音だ。打撃を受けて大地に叩きつけられるのは赤毛の少年、ネギ・スプリングフィールドだ。彼は大地に叩きつけられた衝撃に肺の息を吐き出して咳き込む。

だが、そこに追撃がかかった為、すぐさま飛び上がって回避。ネギがいた地点に叩きつけられたのは気で強化された拳の一撃。それを振るうのは刹那だ。彼女は必殺の意志を持ってしてネギへと一撃を繰り出していた。

「今日で1ヶ月…持つようにはなったが―――まだまだ足りんっ！！」

刹那が振るった拳打。それをネギは自らの拳で受け止める。ネギ

の魔力を通す事によって強化された肉体は刹那の拳を受け止める事を可能にしている。更に魔法使いの防御手段の一つである魔法障壁も併用する事によってその効力も上がっている。

だが、あくまで可能にしているだけだ。すぐにネギの拳は弾かれ、ネギの体に刹那の回し蹴りが叩き込まれる。ネギの体は面白いように吹き飛び、地を転がっていく。

「どうした？ 魔力の制御が乱れているぞ？」

「う…が、は…っ…つう…っ！！」

「…ふん。限界か。回復したらまた来い。なあに？ 時間はあるぞ。好きなだけ休むと良い。この魔法のスクロールの世界では、外の時間とは流れが違うからな」

そう言って刹那はネギに興味を失ったように背を向けて歩き出した。ネギは刹那が歩み去ったのを確認したのを確認し、身を投げ出すように仰向けになった。空は真っ青だ。雲一つすらない、ただそれだけの空。

1ヶ月、と刹那は言った。それは事実だった。ネギはここで、刹那と二人だけの世界でただひたすらに刹那と殺し合いをしているのだ。稽古などと生易しいものでもなく、試合などと生ぬるいものでもない。刹那は確実にネギを仕留めようと仕掛けてくるのだ。

刹那が出した学園長との条件。それはネギが自身の力を制御出来るようになる事。その為に刹那が所持していた魔法のスクロールによって精神を巻物に収め、現世の時間よりも流れが遅いこの世界でネギが刹那に認められる程の実力を得る事を条件とした。

それに近右衛門とタカミチは渋ったが、ネギ自身がそれを強く望んだ事によって刹那が「本人の希望もありますので」とこの案を押し通した。それによって近右衛門が各魔法関係者にその事情を伝え

る際、刹那に対する不満や意義など押さえる事に苦勞する事になるのは刹那には関係の無い話だ。

「…はあっ…はあっ…はあっ…」

ネギは息を正そうとしながら思い返していた。刹那は強い、と。最初の頃はまったく相手にならなかった。ネギの身体能力は魔法によって強化されていたが、刹那は自身の身体能力と更にそれに上乗せする気によってネギの身体能力を軽く凌駕していたのだ。

何とか刹那から技を盗み、自分なりにどのように動けば良いのかを刹那からトレースし、吸収し、なんとか戦えるようにはなったが、それはあくまでなかったただけだ。刹那に勝利する事は出来ない。

強くならなきゃ、とネギは思う。刹那は言った。魔法使いを名乗るならばその心構えを身につけろ、と。甘く考えていた、と改めてネギは自分を律する機会を得た。自分の目指す道がどれだけ険しいのかを改めて理解させられたのだ。

今の、自分の力さえも制御出来ない自分が、世界的に英雄と称される父のようになれる訳がない。ならば、今、目の前に出された課題を全力で取り組む事が自分の今できる事なのだと信じて。

「…まずは…反省して…休んで…そうしたら…刹那さんに…また…」

何とか動こうとするが、疲労は限界に近い。一言、呟きを零すだけで眠気が襲ってくる。そうして、結局ネギは抗えずにその場で倒れて、その意識を闇に落とすのであった。

そうして、ネギが意識を失ったのを確認し終えたように姿を現し

たのは刹那。彼女は小さく吐息を零すと、ネギの体を抱きかかえて歩き出すのであった。

第2章「終わりへの始まり」 04

ネギ・スプリングフィールドには夢がある。それは偉大な魔法使いと呼ばれる父のようになる事。世間では死んだとされている父親の消息を探す事。その夢を胸にネギは麻帆良の地へとやってきた。

そこで待っていたのは、ネギの想像だにしない苦行だった。自分の行いが軽挙だったのは認める。実際、よくよく考えれば最低な事をした。女性の衣服を吹き飛ばすだなんて紳士としてあるまじき行動だ、と。

それは女性の尊厳に関わるデリケートな問題だ。それを逆撫でされればそれは誰だって怒るだろう。実際、今でも思い出せる”彼女の怒気を思い出して震える事がある”。

「……はあ」

その反省の意を込めて刹那の提案を受けて始めた稽古。…という名の私刑だ。死刑とは呼ばないのは散々痛めつけられた後、放置され、そして寝ているとまた不思議な事に怪我は治っていて、また繰り返される。

それによってネギは得たものは多かった。だが、それでも足踏みをしている気になる。幾ら何でも1ヶ月を超え、2ヶ月にさしかかろうとした頃にはネギも刹那に対する申し訳なさを薄れさせ、刹那に対する不満を持っていた。

刹那に認められるだけの実力がつかないと出さない、と。刹那はそれまで自分をここに閉じこめているつもりだろう。最初は強くなっていく自分に実感もあり、申し訳なさも絡んでネギは真面目に稽古を受けてきた。

だが理不尽なまでの暴力。夢を追えない、足踏みしているんじゃないかという幻惑からの焦燥。代わり映えのない繰り返される闘争の毎日。ネギの心が荒み始めるのもおかしくないだろう。

「ふん。なんだ、起きていたのか」

そこにネギの耳に声が届く。刹那の声だ。別にネギを心配する気もない。ただ、事実を認識する為だけのような淡々とした言葉。それにネギは無言で立ち上がって構えを取る。

「ふん。最近は随分とやる気満々じゃないか」

「……」

「好都合だ。――さっさと掛かってこい」

ちよいちよい、と中指を天に差し向けるようにして自分の方へと招き寄せるように指を動かす。同時にネギが疾走を始める。態勢を低く、地を這うような疾走だ。刹那はそれをゆるり、と緩慢な動きで迎え撃つ。

ネギの放った足払いを刹那は僅かに宙へと跳んで交わす。ネギはそのまますぐに態勢を立て直すように折り曲げた地を蹴り上げて肘を刹那の腹へと叩き込もうとする。刹那はそれを難なく受け止め、逆にネギの手を取る。

刹那の足が地に着くのと同時にネギの腕を捻り上げるように回しながら投げ捨てる。ネギはそれに力を抜いて抵抗しない。そのまま地面に叩きつけられるその一瞬、衝撃を逃がすように受け身と取る。

「ふん。体捌きはそこそ上手くなったな。攻撃はまだ甘いかな」
「っ！！」

ネギは刹那の顔面を狙うようにオーバーヘッドキック。それを刹那は受け止め、ネギをそのまま軽く持ち上げて放り投げる。一度、バウンドするようにネギは地面を跳ねるがすぐに起き上がって刹那を睨み付ける。

「ふん。2ヶ月前までとは別人だな。――私が憎いか？」

憎いのか？ 問われればそうじゃない、とはネギは言えなかった。憎いのかもしれない。自分の道を阻み続ける刹那が。ネギだって悪い事をしたという自覚はあった。だが、それでもこんなに長い時間をただ暴力という毎日を過ごし続けてネギは我慢の限界だった。

「僕は…こんな所で、足踏みをしてたくないんですっ！！」

父を追う為に。父を捜す為に。胸を張った自分でいられるように。ただ無為になるだけの時間はもう過ぎたくない。明日へ、未来へ、ネギの心は強く、強く脈打つ。

今まで刹那への罪悪感によって押し込められてきていた願望が表に出る。優等生としてのネギが知らず知らずに抑圧していた思いがここで遂に暴発を迎えていた。

「僕は父さんを追わなきゃいけないんだ……！ 立派な魔法使いになるんだっ……！ こんな所で足踏みしていたくないんだ……！」

「足踏み？ お前は言っただろう？ 私に対して申し訳ないと、だからこの修行を受けたんだらう？」

「そうだけど……！！ でも、こんなじゃ前に進めてる気がしないんだ……！」

「約束だからなあ、私が認めるまで、と」

「どうしたら認めてくれるって言うんですか……！」

「さあ？ どうしたら、だらうなあ？」

はぐらかすように、刹那に向けてせせら笑うように言う。

「どうしたら、さて、認めてやろうかなあ？」

その嘲笑うかのような声にネギはまさか、と思いたくもない、だが何度も考えた可能性を思い浮かべる。刹那はここに一生、自分を縛り付ける気なんじゃないか。自分が折れて、帰りたいくなるような思いをさせて自分を追い出したいんじゃないか、と。

ずっと罪悪感や申し訳なさから押し込めていた感情がゆっくりとその蓋を開いた。うずき出す衝動は最早止められない。今か、今かと引き金に指をかけて待っていた暴発の時は――今、ここに訪れた。

「ア、アアアアアアッ……！！！！」

ネギの表情に浮かぶのは憎悪だ。許せない、許したくない、ただ目の前にいる彼女が憎い。ここから居なくなれば良いのにと心底願った。だけど願っても叶えられないなら自分の拳しかない。

だがこの拳は脆く、脆弱だ。届かない拳。それがネギの心に絶望を呼び込む。だけど、それでも屈する訳にはいかない。自分を阻む彼女の願うままなんてご免だ。自分には、どうしても果たさなきゃいけない事があるんだから、と。

ネギは無意識にその才を開花させる。強い憎悪と絶望がネギの心の願望を引きずり出す。嫌だ、嫌だと抗う心はネギの才を花開かせた。ネギは刹那との間合いを一瞬にして摘めてくる。それは”瞬動”と呼ばれる技術。

一気に刹那の懐へと入り込んだネギ。そして後は感情が任せるままに拳を放つ。だがそれはがむしやらの拳ではない。幾度となく繰り返された叩き伏せられた経験がネギに最適の攻撃を放たせる。

それは――刹那の頬に食い込んだ。え？ とネギが呆気なく思うまでに。そして、世界が碎ける音をネギは耳にした。

* * *

「――ネギ君、ネギ君！」

「…タカ、ミチ？」

自分と呼ぶ声にネギは意識を呼び戻す。そこには自分を心配げに覗き込むタカミチの姿があった。ネギの体感としての感覚は二ヶ月ぶり。それに言いようもない安堵が込み上げてくる。――ああ、戻ってこられたんだ、と。

そこでネギはハッ、とするのだ。勢いよく身を起こす。タカミチが驚いたようにのけぞる。そんなタカミチにネギは食いつく。

「刹那さんは!？」

「刹那君なら、さっき出て行ったが…。それより、ネギ君、大丈夫か？ 体感だと二ヶ月くらいだっただろう？ 一体刹那君とどんな事を…」

タカミチの問いを最後まで聞く前にネギは起き上がって駆けだした。タカミチの呼び止める声が聞こえるが、それを気にしていられる暇はネギには無かった。ただ、ただ全力で走って彼女の姿を探す。階段を駆け下り、出口へと向かう。勢いよく扉を開いてネギは外へと飛び出した。そこにはちょうど、背を向けて歩いていく刹那の姿があった。外は夜の闇に包まれていて、月光が彼女を淡く照らし出している。

「刹那さんっ!!」

ネギは刹那を呼び止める。ネギの声に気づいたのか、刹那はその場に足を止めた。だが振り返る事はない。ただ背を向けたまま、刹那は黙して動かず。そんな刹那と距離を詰めたネギは上がる息を整

えながら、刹那を真っ直ぐに見据える。

「…刹那さん、どうして…」

「……」

「最後のアレは、絶対わざとでしょう!?! どうして!?!」

訳がわからない、と言うようにネギは叫ぶのだ。刹那のやっている事が掴めない。自分の邪魔をしたかったのか、しかしそれなら最後の最後でどうして自分から攻撃を受けるような真似をしたのか。ただ訳がわからなくて、憎かった筈の刹那が、今はこんなにもわからない。だから問いかけたかったのだ。わけがわからないから、もどかしいから。わからないのはこんなにももどかしいのだと思いきりながら。

「…理不尽だったでしょう?」

「…え?」

「どうか忘れないで欲しい。」魔法”は奇跡の業。しかしその業は…同時に”理不尽”だ」

背を向けたまま、刹那は空を仰ぐように視線を向けながら語るのだ。

「”異端”はいつだって批判される。例えそれがどれだけ優れたものであったも、どれだけ清く正しくあろうとも、異端である以上は絶対に快く思わない者がいる。それは理不尽としていつだって前に

立ち塞がるでしょう。

どんなに正しくとも、どんなに潔癖であっても、特別である以上は多少の理不尽は受け入れなければならない。理不尽に、どんな扱いを受けようとも、理不尽に、何もかも奪われたのだとしても」

それは酷く胸にのしかかる言葉だった。ネギは胸に手を添えて刹那の言葉を聞き入る。

「平穩に望むなら——いつでも捨てて良い。義務でもないのだから。それは、ただ望むが故に。ならば、どんな理不尽でも飲み込んでいく覚悟を決めた方が良いでしょう。ネギ・スプリングフィールド。きつと貴方の行く道は理不尽の連続だ。だから、どうか覚えていて欲しい」

すつ、と。後ろ足を引き、軸足とするようにして回転して刹那はネギと視線を合わせた。

「きつと貴方はこれからの理不尽に多くを悩むでしょう。きつと貴方はこれからの理不尽を酷く憎む事もあるでしょう。この程度で心折れるならば貴方に先はないでしょう。けれど、貴方は”私ごとき”のとはいえ”理不尽”に負ける事はなかった」

「…刹那さん、貴方は——」

「——明日から、忙しくなりますよ。もう寝た方が良いでしょう」

——ねえ、”先生”。

月光に照らされ、不敵に笑みを浮かべながら告げる刹那の表情にネギはただ目を奪われた。

そのまま、刹那は背を向けて歩き出す。その背をネギはぼんやりと見つめながら、その胸の前で握る拳を僅かに震わせるのであった。

＊ ＊ ＊

「…では、刹那君はネギ君の教師就任にもう異は唱えない、と」

「ええ。後は彼次第でしょう」

学園長室で刹那と学園長は向かい合っていた。その場にはネギとタカミチもいる。タカミチと学園長はほっ、とした様子で吐息を吐き出す。そしてネギへと視線を向ければそこには先程の少年とは思えぬ程、逞しい顔つきをするようになったネギがいる。

（…まったく、どんな荒療治をしたんじやか。刹那君のこの過度な部分は一体誰の影響なんじやろうな？）

極限状態にまで追い込んで、そこから鍛え上げる。下手をすれば

人を壊しかねない危険な行為だ。それは下手をすれば相手の人生を潰す事にも繋がる。だが、刹那は躊躇いなく行った。

もしもネギが付いてこれなければ刹那に対して良い目は向けられなかっただろう。ネギ自身からも、ネギに関わる者、ネギを知る者、ネギを知らずとも”ナギ・スプリングフィールド”の名を知る者、様々な者から刹那は批判を受ける事だろう。

良くも悪くも周りも過保護で過敏になっていたのかもしれない。それが分相応の才能を持ちながらも、所詮子供でしかないネギだったのかもしれない。それを悪いとは誰にも言えないだろう。子供は子供らしくあるべきだ、と。

それを許されなかったのがネギの持つ立場であり、両親なのだろう。ネギは良くも悪くも普通の子供ではいられない。彼自身がそう望まない限り。そして彼は普通である事を望んでいない。ただ目指す場所は既に決まり切っているのだから。

(……刹那君も、そうじゃったな)

刹那はネギとは違う立場だ。だが、それ故に刹那は知っている。”理不尽”の痛みを刹那はよく知っているだろう。その生まれからも、歩いてきた道も、刹那の人生は理不尽の連続だったのだから。

そしてネギは良くも悪くも”魔法”によってもたらされる”理不尽”を知らない。唯一経験していると言えれば彼のトラウマとも言えるべき過去だろう。

彼は幼い頃、彼の住んでいた村を襲われている。そしてネギと数少ない生存者を残してネギの村は滅びている。それは歴とした理不尽なのだ。どうして？ と問うても、到底納得出来ないだろう。そもそも理由もわからないのだから尚更理不尽だ。

理不尽。魔法とは奇跡。だが、同時にそれだけの理不尽を呼び込

むのだ、と。ネギが教師をやるのは日本という国の常識では理不尽だろう。だが、それでも罷り通ってしまうのが魔法という名の奇跡なのだ。同時に、理不尽であるが。

刹那がネギの憎まれ役を買って出たのは、ネギの背負う、襲うだろう理不尽は常人の程度を遙かに超えるだろう”理不尽”の、言うならばお試しのようなものだ。度が過ぎている、と言えそうだろう。刹那のやった事は褒められた事ではない。

（しかし、褒められる事ばかりが正解ではない。……儂も年を食ったかのう）

近右衛門は自嘲するように吐息を吐き出す。刹那は誰もがやらないうしろ、しかしいつか襲いかかるだろう”理不尽”としてネギの前に立ち塞がった。ネギは守れているのだ。守られている環境で育ち、その才能を歪ませる事無く生きてきた。

だが、それはあくまで守られる環境の中での話だ。それが実戦で通ずるかと言われれば違うと言えるだろう。状況とは生き物だ。臨機応変に立ち回れる人間こそ、本当の強者だろう。魔法の数ではなく、強さでもない。無論立ち回りには必要な技能ではあるのは確かだが。

ネギの周囲には明確にネギの敵になると決めている者はいなかった。そんな者がいても護られてきた。過保護とも言える環境で育ってきたネギは、ここで初めて”刹那”という明確な敵、理不尽と相対した。

そこで彼は何かを掴んだのだろう。そこに浮かべているのはあどけない少年の顔ではなく、前に進む者の目だ。子供がするような目ではない。それを嘆くべきなのか、それとも流石はかの英雄の息子と褒め称えるべきなのか。そこまで考え、近右衛門は首を振った。

（彼の功績は彼自身の功績じゃ……。儂も、いつまでも色眼鏡を付けている訳にはいかんのう）

子供、だと侮っていたのは他ならぬ自分でもあったか、と近右衛門は苦笑する。

「それでは、ネギ君は明日より2－Aの担任として赴任して貰う。……ちよつと違う気もするが、君がこれから向かうだろう修行は大変なものとなるじゃろう」

「はい」

「ダメじゃったら故郷に帰らねばならん。……今なら、刹那君の言うように君を一度ウェールズへ戻し、試験の再考を訴える事も出来るが？」

「いいえ。やります。やらせてくださいっ!!」

近右衛門の試すような問いかけにネギは確かな意志を見せ、真っ直ぐに近右衛門を見つめて告げた。揺らぐ事のない瞳、希望を信じる強き瞳。どんな苦難すらも乗り越えてみせると、言外に彼は告げている。

「その覚悟、本物である事を祈ろう。……たった一度きりのチャンスだ。ものにしてみなさい。ネギ君。その意志で、君の力でね」

「はいっ！」

近右衛門の激励にネギは力強く返答を返す。それに、刹那は一步、後ろへと下がって入り口へと向かう。そんな刹那に気づいたのか、ネギは刹那を呼び止める。

「刹那さん！ 明日からよろしくお願いします！」

「……貴方次第ですね。それは」

僅かに、ふっ、と笑みを浮かべた後、すぐに表情を消して、失礼します、と一言を残して刹那は去っていった。その刹那が去った扉を見つめながら、ネギは、よしっ！ と気合いを入れるようにガッツポーズを取っている。

そんなネギの姿に近右衛門とタカミチは微笑ましそうに見守る。
：どうか、彼の歩む道が苦難に満ちていても、どうか彼が負ける事
がありませんように、と。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0462q/>

せっちゃんにカワカミンが入ったようです。

2011年8月9日22時05分発行